NPO法人向島学会×東京アートポイント計画

墨田のまちとアートプロジェクト

［墨東まち見世2009-2012ドキュメント］

ART PROJECT IN SUMIDA | BOKUTO MACHI MISE 2009-2012

NPO法人向島学会×東京アートポイント計画

墨田のまちとアートプロジェクト

［墨東まち見世2009-2012ドキュメント］

ART PROJECT IN SUMIDA | BOKUTO MACHI MISE 2009-2012

墨東まち見世について

〈墨東まち見世〉(以後、まち見世)は、東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、特定非営利活動法人向島学会の三者共催により、平成21年度から墨東(ぼくとう)エリアを舞台に毎年開催されてきた地域アートプロジェクトです。地域に息づく多様な文化の視点を通し、これからのまちと暮らしを多方面から探っていくことを目的に活動してきました。平成24度までに、墨東エリアのアート拠点、アーティスト、グループなどの多彩な活動をつなぎ情報発信する「ネットワークプロジェクト」、墨東初体験のアーティストを迎える「100日プロジェクト」、アートとまちをテーマにした連続講座「墨東まち見世塾」、地域再発見のまち歩き「墨東まち見世さんぽ」、本書の制作に取り組んだ「墨東まち見世編集塾」など、様々なプログラムを実施。今後も、これまで活動に関わってきた人々の手による自主的な活動展開が期待されています。

東京アートポイント計画

「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。

ウェブサイト：http://www.bh-project.jp/artpoint

特定非営利活動法人向島学会

「向島学会」は、地域を考えるフォーラムとして、墨東エリアでまちづくりに関わるメンバーが集い設立されました。平成14年より活動を始め、平成18年からはNPO法人に。現在では、地域に関する様々な情報の収集と提供、地域活性化活動の支援、住まい・まちづくりの調査研究、他の地域とのネットワークづくり、地域社会と結ばれたアートイベントの支援など、幅広い事業に取り組んでいます。平成24年度から理事会の中に「墨東まち見世部会」を設け、地域に根ざしたネットワークを通年でサポートするプラットフォームとしての役割を果たしていきます。

ウェブサイト：http://www.mukojima.org

本書について

まち見世の4年間の活動と、その背景にある墨東エリアのまちづくりやアート活動の歴史を伝えることを目的に、活動に詳しい編集者・まち見世の事務局担当者・公募による「編集部員」によって「墨東まち見世編集部」を結成して制作に取り組みました。外部ゲストを招いての公開レクチャーやトークを繰り返しながら収録内容・編集方針を検討し、全ての活動を一律して網羅的に紹介するのではなく、あえて焦点を絞り、活動のディティールや関わる人の顔が見える内容になるよう、意識されています。ここにはおさまらなかった多くの人やまちの姿、出来事にも想像をめぐらせながらご覧いただければ幸いです。

橋本誠［墨東まち見世編集部長］

目次

007 墨東エリアについて

018 ［論考］墨東地域の現在とアートプロジェクト——真野洋介

025 100日プロジェクト（招聘プログラム）

028 新里碧《曳舟湯怪》

044 ［コラム］墨東まち見世の原点を振り返る——曽我高明

046 岸井大輔《墨東まち見世ロビー》

048 大巻伸嗣《Memorial Rebirth in 京島・キラキラ橘商店街》

050 池田光宏《by the Window “墨東バージョン”》

052 山城大督《トーキョー・テレパシー》

054 長島確《墨田区在住アトレウス家》

056 谷山恭子《Lat/Long-project “I’m here. ここにいるよ。”》

058 ［コラム］旧アトレウス家のこと——長島確

060 ［論考］消費されないアートプロジェクトを求めて——橋本誠

065 ネットワークプロジェクト

070 墨東文庫［街頭紙芝居編］

080 私たちがおすそわけできること

090 「どこにいるかわからない」展

100 ロジ展「はためくわたしたち」

110 ネットワークプロジェクト一覧

129 墨東まち見世ネットワーク

130 ［論考］墨東まち見世と東京下町のコミュニティ——金善美

134 ［コラム］鳩の街通り商店街と私——ヨネザワエリカ

136 墨東まち見世を支える人々

140 ［コラム］路地園芸術祭のこれまでとこれから——村山修二郎

142 ちらっとドキュメント

146 ［コラム］まちみてマップから見える新しい芽——長尾聡子

148 ［座談会］墨田のまちとアートプロジェクトのこれから

155 墨東まち見世実施概要

172 おわりに——森司

BOKUTO MACHI MISE 2009-2012 | About Bokuto Area

墨東エリアについて

AREA | 墨東エリアについて

〈墨東まち見世〉の展開エリア

主な展開エリア：曳舟・京島・東向島・八広・押上

まち見世は、隅田川・荒川・北十間川によって囲まれた墨田区の北半分を占める地域「墨東（ぼくとう）エリア」のまちなかを舞台として開催されてきたアートプロジェクトです。この地域は、無数の路地に沿って住宅・工場・商店街が混在する、東京でも有数の木造密集市街地です。江戸時代には文人墨客の遊ぶ風光明媚な郊外として、また近代になってからは幸田露伴、永井荷風といった文士らのゆかりの地としてもよく知られています。最近では、押上地域における東京スカイツリーの竣工や、曳舟駅周辺の再開発事業などによって、情緒ある路地のまちを取り巻く環境は大きく変貌しつつあります。

墨東エリアとは

「墨東エリア」という呼称は広く共通認識の元に浸透しているものではなく、墨田区・江東区・江戸川区・葛飾区・足立区と隅田川の東側地域を広く指すこともあれば、永井荷風の『墨東綺譚』のように向島・玉の井地区といった狭いエリアを指すこともあります。雑誌等では「向島エリア」といった表記もよく見られますが、これも例えば地域住人にとっては住所の町名に「向島」がつく限定された印象を与えることがあります。来訪者だけではなく地域住人も参加対象にしているまち見世では、あえて共通の概念がはっきりしておらず、積極的に使用されていない「墨東」という呼称を使用することで活動の広がりを狙っています。

監修：特定非営利活動法人向島学会「墨東まち見世部会」　制作：墨東まち見世2012事務局　発行：平成24年7月（初版）、9月（第2版）

BOKU-to-TekuTekuまちみてマップ

ギャラリー・共同アトリエ・クラフト工房・カフェなど、墨東エリアのアートスポットの数々とともに、アートやまちづくりの団体・プロジェクトの情報を紹介するマップ。墨東エリア内の各スポットや首都圏を中心とした全国のアートスペースなどで配布されています。まち見世の活動がきっかけで立ち上げられたり、つながりができたりしたもので、かつ継続的な活動が行われているものを一覧することができます。

KEYWORD｜墨東エリアを知るキーワード

文＝橋本誠

路地

墨東エリアは水路やあぜ道が多くあった農村地域が近代工場地域として発展してきた場所。戦災も逃れたため、曲がりくねった道や複雑に入り組んだ路地が多く残っています。その袋小路を意味する「どんつき」や、自宅前の路地を庭のように活用して鉢植えや植木で彩る「路地園芸」も目にすることができます。東京ではほとんど見られることのなくなったこの風景や慣習に注目したアートプロジェクトもしばしば行われています。

—

木造住宅密集市街地

路地と同様に、長屋や戸建てなどの木造住宅が密集した状態のまま多く残る、都内でも有数のエリア。特に京島・東向島・八広地区では、一部の幹線道路沿いや区画整理が行われた場所を除き低層の住宅が立ち並び、遠くには高層の建築や巨大な東京スカイツリー、といった風景を目にすることができます。借り手のつきにくい空家の増加が防犯・防災の観点から問題となっており、アーティストや新住人のリノベーションにより活用される例も見られます。

—

空き地

老朽化が進んだ空家が取り壊された跡地・区画整理のために確保された「まちづくり事業用地」・整地によってできた広場など、路面が狭く、開けた場所の限られる木造密集市街地の所々に空き地や公開空地が多く存在し、子供の遊び場や地域住人の憩いの場となっています。土地の所有者や管理者の許可を得て、アーティスト等が活動の場所として活用することもあります。

細く入り組んだ路地

木造の長屋

京島地区のまちづくり事業用地

イザ!カエルキャラバン! in 寺島

尾道とのまちづくり交流会（2005）

八広の金物工場

防災

延焼防止機能などを備えた白鬚東団地が墨田川沿いに建設されたり、道路の拡幅整備や老朽住宅の建て替えなど、行政主導で防災に関わる事業が行われてきました。一方で、一寺言問を防災のまちにする会（通称：一言会）をはじめとする団体が自主的に防災やまちづくりに関わる活動を多く行っています。2009年からは東京アートポイント計画の働きかけをきっかけに、防災プログラム〈イザ!カエルキャラバン!〉も展開されています。

—

まちづくり

防災の観点からはもちろん、防犯や、商店街の活性化、新旧住民の交流など日常的なテーマも含めて、空き家や空き店舗の活用、大学の研究室等との連携による調査事業、各種勉強会やシンポジウムなど、まちづくりに関わる活動が広く行われています。アーティストや拠点運営者による活動はもちろん、彼らの日常生活そのものも、ひと役かっていると言うことができるでしょう。

—

ものづくり

墨田区は都内で大田区に次いで工場の数が多いものづくり気質の強いまちです。羽子板や皮革製品・木箸などの伝統工芸から、金属・ゴムなどの加工技術を用いた日用品のパーツ製作まで、多岐にわたるジャンルを扱う中小規模の工場が存在しています。近年、区ではこれを背景として、産業や観光振興の観点から地域ブランド戦略を展開。すみだの想いを伝えられる商品や飲食店メニューを対象にした「すみだブランド認証事業」や、〈すみだファクトリーめぐり〉といった企画を開催しています。

職住近接

いわゆるオフィス街や工場街・ベッドタウンとは異なり、数多くの工場で働く職人や、まちを支える商店の従業員が住み込み、あるいは同エリア内で生活しています。仕事だけではなく、日用品の購入、銭湯への日参など、普段の生活がまちと密接に関わる姿が色濃く残っています。工場の減少やライフスタイルの変化、東京メトロ(半蔵門線)の延伸など交通網の発達が後押しする新住人の増加などにより、その様子は変わりつつあります。

—

商店街

地蔵坂通り商店街、キラキラ橘商店街など、地域の生活を支えてきた昔ながらの商店街が数多く残っており、休日やセールなどのイベント時にはその様子を楽しむ観光客などの姿も見られます。しかし多くは利用者の減少や商店主の高齢化、空き店舗の増加などの課題を抱えています。向島の鳩の街通り商店街では、空き物件を創業支援施設〈チャレンジスポット!鈴木荘〉として運営し、若い商店主などを呼び込む活動を行っています。

—

喫茶店・カフェ

鳩の街通り商店街の「エデン」など、レトロな雰囲気が漂う昔ながらの喫茶店が徐々に店をたたむ一方で、若い経営者によるカフェやバーが少しずつ数を増やしています。築60数年の元薬局を改装した「こぐま」や築80数年の長屋を改装した「爬虫類館分館」など、中には古い物件の雰囲気を生かしながらお洒落にリノベーションした例が多く見られます。地域の住人にはもちろん、まち見世への来訪者や観光客の人気も集めています。

住宅街の中にある豆腐屋と畳屋

鳩の街通り商店街

2012年に閉店した喫茶店「エデン」

旧S家の見学会(2010)

墨東まち見世さんぽ —『寺島・玉の井』歴史と文学のさんぽ

八広地区から見える東京スカイツリー

調査研究

防災やまちづくりに関わる活動のための調査研究や、まちを舞台にしたアートプロジェクトの事例調査などが、個人・大学・地域団体・公的機関など様々な立場から行われています。東京工業大学や明治大学など研究室単位で継続的に活動を行う例も多くあります。向島学会でも、そのような例を共有することを狙いとして、2010年より「向島スタディーズ」を開催。墨東エリアをテーマに研究する学生の修士・卒業論文などの発表会を行っています。

—

文学

寺島・玉の井地区を舞台に『墨東綺譚』を書いた永井荷風や谷崎潤一郎・正岡子規・幸田露伴・森鴎外など、多くの文人たちのゆかりの地として知られています。彼らの足跡や作品の舞台を、各所にある石碑や、墨田区観光協会が発行している小冊子『向島文学散歩』などで知ることができます。文化元年(1804年)に開園した向島百花園は、江戸時代の文人墨客のサロンになっていたと言われています。

—

東京スカイツリー

都心部の超高層化や放送の多様化への対応を目的に建設が検討され、2006年に押上の東武鉄道貨物駅跡地に建設地が決定。2008年7月に着工して2012年2月に竣工、5月に開業しました。これによりエリアへの観光客が増え、地元の商業が活性化するという見方もありますが、短期的には併設の商業施設による圧迫の影響も大きいとする見方もあります。また低層の住宅が立ち並ぶ中で景観が破壊されるという意見や環境・安全面への問題も唱えられています。

墨東エリアとアートに関わるプロジェクトや拠点の動き

制作＝曽我高明＋野村美里＋編集部

墨東エリアでは、まち見世以前から様々なかたちでアートやまちづくりに関わる活動が行われてきました。その歴史を簡単な年表でご紹介します。

RICE+

向島博覧会2000

向島Year2004

年代	主な出来事	主な拠点開設の動き	主なアート系プロジェクト
1980	「京島まちづくり協議会」発足		
1986	「一寺言問を防災のまちにする会」（通称：一言会）発足		
1988	「まちづくり才団・川の手倶楽部」発足		
1992	川の手倶楽部、ハンブルグ・オッテンゼンとの交流事業開始 「芸術文化地域活動『楽の会』」発足		
1996		ティトス・スプリー邸	
1997		現代美術製作所	
1998			向島国際デザインワークショップ
1999	向島のまちづくりを支援する専門家集団「SONOTA」発足		
2000	〈アサヒ・アート・コラボレーション（AAC）〉開始	渡辺慎二邸	向島ネットワークス 向島博覧会2000 アーティスト・イン・空き屋（～2004）
2001	開発好明個展（現代美術製作所）で〈39アートの日〉開始	フルハウス、北川貴好アトリエ	アートロジィ向島博覧会2001
2002	「向島学会」設立（2006年にNPO法人化） 〈アサヒ・アート・フェスティバル（AAF）〉開始		秋の向島アートイベント（「ツママレ2002」ほか） 荒川モード
2003		RICE＋（AAF）（～2005年） スパイス・カフェ	39アート共鳴企画「吾嬬・寺島長屋博覧」 FLY CAFE（AAF） ツママレプロジェクト（AAF） 向島自転車アート&ネット・プロジェクト（AAF）
2004	「向島百花園」200周年 「京島ロジコミマップ」発行		向島Year2004 向島のトリのマーク（通称）（AAF） 東京ローカル・アートマップ（AAF）、沖縄カフェ「かなさん」（AAF） 小山田徹「しあわせのしわよせ」（AAC） えんのしたのねこ不動産

［1980～96年ごろ］
行政による防災や住宅整備の計画をきっかけに、またバブル期の再開発の影響を受けて、住民によるまちづくり組織が誕生しました。アーティストではじめて向島に注目したと言われるティトス・スプリーが拠点を構えました。

［1997～2001年ごろ］
まちづくり系の組織を中心に、イベントが開催されるようになりました。テーマも建築・まちづくりから徐々にアートへと移っていきます。この頃から、活動に興味を持ったアーティストらの移住の動きが見られるようになりました。

［2002～04年ごろ］
過去のイベントで形成されたつながりを活かし、ネットワーク的なアートイベントが行われました。また、以降のイベントで基盤となる向島学会が設立されます。アサヒ・アート・フェスティバル（AAF）が始まったことで、墨東エリアでも様々な関連プロジェクトが展開されました。

こぐま

チャレンジスポット!鈴木荘

爬虫類館 分館

路地琴プロジェクト

向島アート・まち大学（2006）

向島芸術計画2007

年代	主な出来事	主な拠点開設の動き	主なアート系プロジェクト
2005	「すみだコミュニティ・プログラム（AIG）」開始	八広HIGHTI	向島アート・まち大学（AIG）（～2006年） WHEEL Project 2005（AAF） トリのマーク（通称）ふたつの向島（AAF）
2006	〈東京スカイツリー〉建設地決定	東向島珈琲店 こぐま（AIG）	路地琴プロジェクト（AIG） 向島・路地園芸プロジェクト（AAF） トリのマーク（通称）向島のはじまり（AAF） 鳩の街ジャズフェスティバル（～2012年） 向島百花園 あかりと音の夕べ（～2010年）
2007			向島芸術計画2007（AAF） 向島アートのまち（文化庁）（～2008年） 光タワープロジェクト 墨田下町緑道植物園展（AIG）
2008	〈東京文化発信プロジェクト〉開始	チャレンジスポット!鈴木荘 アートスポット鳩や 枕橋茶や（～2011年）	〈アートスポット鳩や〉スタジオプログラム：小林史子 アンテナショップ eおのみち屋
2009	〈東京アートポイント計画〉開始 〈墨東まち見世〉開始（～2013年3月）	スタジオ・シェッラハル SOURCE Factory	〈アートスポット鳩や〉スタジオプログラム：三宅航太郎 向島アート展（～2010年）
2010		爬虫類館 分館 coneru yahiro 8 こすみ図書	39アート in 向島（～現在）
2011		玉ノ井カフェ 一軒家カフェ ikkA float、logique／ロジーク 紙工房 堂地堂	ポスト工務店 BUGHAUS（AAF）
2012	東京スカイツリーオープン 〈アサヒ・アート・フェスティバル〉10周年 「向島学会」設立10周年	あをば荘 アトリエ犬屋敷 haus Reminders Photography Stronghold	めざせ、中央市場! 寺島なす復活プロジェクト（AAF） 木村健世＋こすみ図書（AAF）

［2005～08年ごろ］
すみだコミュニティ・プログラム（AIG）や文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業の一環として、継続性のあるアートプロジェクトやアートと地域に関わる研究会が行われるようになります。鳩の街通り商店街「鈴木荘」の活用が始まり、まち見世にもつながる〈アートスポット鳩や〉スタジオプログラムが行われました。

［2009～12年ごろ］
まち見世がはじまり、それまで潜在的に活動していた拠点が明らかになるとともに、これを期に活動をスタートする拠点も現れ、地域で継続的に活動する個人・団体が増えていきます。自主的に活動をネットワークする〈39アート in 向島〉も始まりました。

［2012年～］
10周年を迎えた向島学会内で「墨東まち見世部会」設立。墨東エリアで継続的にアート活動を支える体制ができつつあります。

墨東まち見世論考｜1

墨東地域の現在とアートプロジェクト

まち見世開始以前の状況

真野洋介 Yosuke MANO
（東京工業大学社会理工学研究科准教授、NPO法人向島学会）

→P.136

1｜墨東のこれまで

隅田川東岸を示す墨東という呼称は、永井荷風の『墨東綺譚』（※1）に代表される、近代文学上の呼称である。そこには、玉の井などかつての私娼街や、町工場で働く労働者、商店主たちによる庶民のまちの象徴として、都市のエッジ（周縁）独特の雰囲気が込められていた。しかしそれは自らの呼び名ではなく、外から相対化した地域の名称であった。

墨東まち見世のフィールドとなる墨田区北部地域は、こうした由来を借りてはいるが、そこに連続性を見出そうとしたり、イメージを重ねたりすることは短絡的である。むしろ、地域の人々や移住者、来街者などによる近年の活動の積み重ねが、別のかたちで新たな「墨東」という地域性をつくり出している。

同様に、外から名づけられた地域の名称として「向島（むこうじま）」がある。江戸後期、江戸のまちの浅草方面から見ると「川の向こう側」であるため、隅田川対岸の島状の地域一帯を「向島」と呼ぶようになったと言われている。（※2）昭和戦前期は区の名称にもなった。2000年に開催された草創期のアートプロジェクト〈向島ネットワークス〉や〈向島博覧会〉は、こちらの名称を掲げている。

いずれにしても「向島」や「墨東」という呼び方は、近世以降、人によってつくられたまちであるという由緒を示す名称である。近代以前、向島は市中の人々が住むまちではなく、江戸郊外の農村地域であり、墨堤の桜並木や百花園に代表される行楽地でもあった。江戸末期から明治にかけては文人墨客が集まるサロンや豪商の別邸などが建てられた。（※3）しかし現在の環境に直接つながっているのは、関東大震災以降、下町の被災者や地方から上京する人々の急激な人口移動によって、一気に長屋と路地のまちが生まれ、それがまちの名称として「向島」に変容した部分である。

一方、地元住民の視点から愛着を持たれている地名は、古くから川の呼び名であり、区の由来ともなっている「すみだ」や、向島区誕生以前の旧町名を示す「てらじま」「あずま」などである。また、現在の町丁名である東向島、京島、八広などは、1960年代の町名変更以降の名称であるが、近年の住民による活発な活動が、その呼び名を個々のエリアの特性を表すものに変えつつある。空襲を免れた長屋や網目状の路地が一帯に残るこの地域は、高度成長期以降、防災上危険な木造密集市街地、通称「モクミツ」と呼ばれる地域の代表格となった。この防災まちづくりの始まりを支えた地域の人々とその独特の環境が、本地域におけるアートプロジェクトのひとつの下地となっている。建物の独特な形態や古さ、道や近隣との近さ、通りの空気、人との付き合いなど、この地域特有の環境に向き合うことから始まる。

もうひとつはものづくりのまち「すみだ」という下地である。明治以降、軽工業を中心に町工場が数多く立地し、様々な技術と製作現場が各所に集積するだけでなく、職人や工場主の気質、好奇心などがプロジェクトを後押ししてきた。

以上のような経緯で、アートプロジェクトに付けられた地域の名称は、長く地域に住み続ける人ほど最初に違和感を持たれ、敬遠される傾向がある。墨東地域のアートプロジェクトの出発は、地名の由来のように、内と外のふたつの眼が一定の距離を持ち、向き合う状態から始まった。

—

2｜アートプロジェクトの始まり

1997年の現代美術製作所開設、1998年の向島国際デザインワークショップを経て、この地域のアートプロジェクトの先駆けとなった向島ネットワークス・向島博覧会（2000）においては、ティトス・スプリーや中里和人など、向島に対する独自の眼と感覚を持つアーティストの強いイニシアティブにより、空き地や空き家、路地、商店街等に対する新しい価値の表現がなされた。同時に、東向島地蔵坂通りの一角や、京島2丁目長屋群など、新しい界隈が切り開かれた。この場所は、核となるアーティストやクリエイターが住みながらプロジェクトを実践することで、新しい移住者を呼び込む、新たなビレッジの始まりの原点となった。このかたちのビレッジはその後八広や、京島1丁目に広がっていった。（※4）

中里和人「五感工場」（向島博覧会2000）

向島博覧会（2001）では、2000年に会場となった建物や周辺エリアで「住む」ことを獲得したアーティストやクリエイターたちが、場所により近づいた「居住者」の一面を最初から持ち、家屋や工場跡で自らの「プロジェクト」として表現した。（※5）居住空間に付随する展示・交流スペースは、内外を結ぶネットワークの入口となった。この時点で、向島のアートプロジェクトにおいては、「住む」という主題が組み込まれることとなった。2002年から2003年にかけてのネットワーク型プロジェクトも、そこから派生したものである。

この時期のプロジェクトのもうひとつの特徴は、最初にプロジェクトを持ち込んだアーティストが、それぞれのタイムスパンやスタンスで、その後も継続的に関わり続けていることである。向島での経験をベースに、各地で活動を展開する一方、向島でも実験的なプロジェクトを一定のインターバルで実施している。このように、現時点の動きだけでなく、過去を含めた向島に対する眼や経験の積み重ねが、アートプロジェクトの持続を支える地域の土壌をつくり出している。

—

3｜応答する場所

向島地域では、地域が防災まちづくりに力を入れた時代から、建築や都市計画分野を中心に、卒論や修士論文、設計演習、研究プロジェクト等を通して、木造密集市街地の研究や再生提案が数多くなされてきた。しかしその多くは一過性のものでしかなく、一方的な視点の提示にとどまった。また、地域に視点や知見がフィードバックされず、情報が蓄積されないという課題もあった。向島地域で開始されるアートプロジェクトには、このような、一定の応答関係が成立していない状況を転換するという使命が最初から潜在的に横たわっていた。

2000年、2001年に行われたプロジェクト群は、記録集やウェブサイト、新聞記事等を通じて、少しずつではあるが、内外に向けて発信されつつあった。また、『ウチノキヲク展』のように、地域独自の家屋の変容を、居住者の生活履歴とともに記述するプロジェクト自体がアーカイブを指向するものも実践された。

博覧会の翌年2002年、運営メンバーを中心に「向島学会」が設立された。数ヶ月に一度開催される「交流サロン」を通じて、学生たちによる研究・提案の発表や、地域の成り立ちに関するレクチャー、ワークショップなどが開催され、情報が少しずつ相互に流れるようになった。その中で、アートプロジェクトの運営実態や、プロジェクトに関係する建物リノベーションをめぐるネットワークなどが徐々に報告されるようになった。(※6)

このような2002年後半期の応答の中で生まれたのが、京島1丁目の元米屋の建物を活用したオルタナティブ・スペース〈RICE+〉である。このプロジェクトでは、改修以前の素の状態からアーティスト・イン・レジデンスの実験が始められた。滞在アーティストによるリサーチ・制作、建物の改修提案、これに関連する記録の展示・長屋ツアー、複数アーティストのコラボレーションによるスペース運営(※7)など、複数の異なる視点から提案と実験が繰り返される中で、空間とその場所の役割が変化していくという新たな状況が成立した。RICE+は東向島3丁目の〈フルハウス〉とともに、2002年秋から2003年にかけて、「ポスト博覧会」模索の時期に行われたプロジェクト・ネットワークの結節点として活躍した。

—

4 | エリア・ベースの展開

2004年以降、アートプロジェクトと地域の関係で大きく変わったことは、それまでの拠点や界隈スケールの活動ではなく、エリアに視点を広げたプロジェクトが実施されたことである。

最初にフォーカスされたエリアは、戦後の私娼街の

東京ローカル・アートマップ

名残が漂い、空き店舗の比率が4割を超す鳩の街通り商店街である。〈向島Year2004〉では、沿道の空き店舗に関する調査展示と店舗活用提案コンペ、店の軒先とポケットパークを会場にした「ローカルキッチン」、鳩の街にまつわる映画上映など、商店街沿道を舞台にした「鳩の街イベント」が実施された。このようなイベントは、商店街組合組織とのマッチングの難しさなどから、一過性のものに終わる危惧が常に存在している。イベント後、企画メンバーとふたつの通りの商店主有志による会合「寺島の集い」が定期的に持たれ、エリアマップの試作にこぎ着けたが、活動は徐々に下火となった。しかしながら、鳩の街エリアでの経験は、玉の井エリア(2008〜)、東向島エリア(2009〜)、京島エリア(2009〜)など、エリア・ベースのまちづくり活動とアートプロジェクトがリンクしていく下地になっている。

もうひとつの「エリア」は、アートプロジェクトによる地図表現を通じた情報の統合により顕在化した、広域としての向島エリアである。KOSUGE1-16による『曳舟発信局／向島グリーンマップ』(向島Year 2004)、『東京ローカル・アートマップ／ツアー』(アサヒ・アート・フェスティバル2004)がこれに該当し、アーティストや移住クリエイターの眼を通じた地域資源が浮かび上がり、地図に投影された。

—

5 | コミュニティ・アプローチ

エリア・ベースのプロジェクト展開は、空間的なリンクだけでなく、地域の情報や出来事、経験など、場所を通じた関係の集積と新たなコミュニティにつながっていく。

2004年から2005年にかけて、向島百花園とRICE+等を舞台にまちの記憶をテーマとした演劇公演を行った劇団「トリのマーク(通称)」は、公演を契機に、主宰のふたりが鳩の街通りの元薬局の建物に移住し、カフェ〈こぐま〉を開設した。プロジェクトの企画・実施アーティストが、常に地域に開かれている店舗という場所を運営することで、これまでの在住アーティストとは異なる立場で、日々の生活やコミュニティとの関係や距離を考える、新しい視点が開かれた。この視点は、アサヒ・アート・フェスティバル2003『FLY CAFE』以降、RICE+に長期滞在し、運営を担った住中浩史と水内貴英のふたりが実施した「こどもが彩るまちづくりプロジェクト(2004)」、「路地琴プロジェクト(2005〜)」を通じて獲得した地域コミュニティとミクロな生活空間に対するアプローチにも共通するものであった。

これらの活動を背景に、2005年秋から始まった連続講座「向島アート・まち大学」(※8)では、向島というひとつのエリアに対して、沖縄や尾道、長野、土澤など、プロジェクトを通じて交流する各地のゲストを迎え入れ、アートプロジェクトに関心を持つ内外の人々と接点を持ち、コミュニティを広げるプログラムとしての役割を担った。2007年以降は拠点をこぐまに置き、クロストークや写真ワークショップが開催された。

カフェ〈こぐま〉で行われた「向島アート・まち大学」

また、こぐまの商店街組合への加入と、プロジェクトメンバーによるいくつかの提案は、数年を経て、下火となっていた鳩の街通りの活動を再び活発化した。2008年秋には、商店街組合の事業として、工房やアートスペースを含むチャレンジショップ〈チャレンジスポット!鈴木荘〉(※9)が開設され、6畳一間の居室が並ぶ2階には、向島学会による〈アートスポット鳩や〉がオープンした。この向島アート・まち大学から鈴木荘／アートスポット鳩やの運営に至る一連の流れをとりまく人と関係性が、まち見世につながる直近の社会資源となっている。ここで、中心スタッフや滞在アーティストがつくり出した関係性が、サポーターや常設の小さな交流スペースなど、まち見世のスタイルを支える重要な要素を生み出したのである。それは日常的な活動を実質的なものにしただけでなく、バラバラに存在した過去のプロジェクトをアーカイブで束ねていくことにもつながった。

2007年、開設10年目の現代美術製作所で開催された『向島芸術計画』では、数年にわたり様々に開催されてきたアートプロジェクトをアーカイブ化する試みが進められた。ここで蓄積されたアーカイブは翌年、こぐまを拠点に進められた『向島のアート・アーカイブプロジェクト』に引き継がれ、1997年から2008年までに地域で開催されたプロジェクトは1年刻みでアルバムとウェブサイトにまとめられた。(※10)

—

6 | 応答の結晶

2009年、アートスポット鳩やにスタジオプログラムで滞在した三宅航太郎が実施した《向島おしょくじプロジェクト》では、参加メンバーとともに飲食店という日常的な地域の空間をアーカイブする共同作業を通じて、地域の若い居住者の関心を高め、これまでとは異なるネットワーク層を引き出した。

以上のように、偶然の連続や接点、とぎれとぎれの出来事の重なり、潜在的資源の活用等が重層する世

界が、「地域のアートプロジェクト」と呼ばれる全体を構成している。しかしそれは誰もひとりではすべてを体感できず、かつ誰にも共有されていない仮想の存在である。外部から訪れる作家や支援者は、様々な視点と勝手なプログラムを持ち込んでいる。しかしその存在がなければ新しい応答も生まれないことが多く、思いがけない気づきをもたらす場合もある。

一方、居住者としてのアーティストや企画者を支える存在として、周辺の地域住民や来街者がおり、一定のパートナーシップが成立しなければ生まれないプロジェクトも多い。さらに向島地域で特徴的なのは、外部のプロジェクト・パートナーの多くが地域の居住者や拠点の運営主体となり、立場と視点を転換することである。先に述べたように、住むという主題がどのプロジェクトにも潜在的に含まれる中、この立場と視点の転換が、内外の接点を作り、場所やコミュニティの循環を支えている。その結果、プロジェクトのタイトルやスタイルが移行しても、向島というフィールドに何かしらのインパクトや切り取られた資源が蓄積されていく環境が形成されている。

「サイトスペシフィックなアートプロジェクト」と、都市の日常的な一側面としての「まち」、そこで暮らす個人との応答は、一朝一夕に起こるものではなく、長い時間の中で「小さいが根深い切れ目」を含みつつ存在している。しかしながら、墨東地域ではアートプロジェクトが「まち」と「住まい」に対して常時接続することで、少しずつ関係を動かしている。

『向島芸術計画』で進められたアート・アーカイブ

［注釈］

※1. 永井荷風による『墨東綺譚』は昭和12年刊行された。

※2. 江戸末期の切絵図のひとつ、隅田川向嶋絵図（安政3、1856年）で、向島の地名が確認できる。

※3. 百花園は文人墨客が集まるサロンとして機能した。現在「露伴公園」となっている東向島1丁目の場所には、明治41年から大正13年まで幸田露伴が「蝸牛庵」と名付け、親しんだ住居があった。

※4. 八広では2001年、北川貴好によって、自らのスタジオとなる家屋を修復し、居住するまでの過程を主題とした〈YAHIRO HOUSE PROJECT〉が開始された。

※5. 向島博覧会に呼応することから活動した古橋良文や渡辺慎二らクリエイターは、向島に根を下ろし、住まいと一体化し、独立したスペースを運営し続けており、地域の情報や人のネットワーキングのハブ的存在となった。

※6. このテーマに関して、2002年夏の理科大、早稲田学生チームによる、向島博覧会前後のキーパーソンへのインタビューとリノベーション調査や、慶応大学美学ゼミ生によるオルタナティブ・スペースの運営実験、大阪外語大学のゼミ生による報告などが新たな動きとして生まれた。

※7. 2003年、RICE+では『吾嬬・寺島長屋博覧会』『FLY CAFE』プロジェクトが企画実施され、アーティストではカワチキララらがレジデンスに滞在した。

※8.「向島アート・まち大学」は、2005-06年度はAIGのすみだコミュニティ・プログラムの助成のもとで、07-08年度は文化庁の助成のもと、「向島アートのまち」事業の一環として実施された。

※9. 鳩の街通りでは、商店街補助事業の年限である3年というスパンで開始したチャレンジスポット!鈴木荘の運営が4年目以降も独立採算で続いており、古本マーケット「ふるほん日和」や「鳩の街屋台sweetsストリート」など、商店街組織と連携した活動の展開につながっている。

※10. http://6540.web.fc2.com

［参考文献］

1. 曽我高明「向島のアートプロジェクトと〈モクミツの遺伝子〉」都市計画297号 p.p.64-67 日本都市計画学会 2012年6月

2. 真野洋介「まち居住2007 CASE 005 向島：アートとまちの関係を紡ぎ出す」新建築住宅特集 2008年2月号 p.p.152-155 新建築社 2008年2月

3. 山本俊哉「向島ー路地尊・会古路地・アートロジィ」、「路地からのまちづくり」p.p.92-103 学芸出版社 2006年12月

写真：中里和人

BOKUTO MACHI MISE 2009-2012 | 100 days Project

100日プロジェクト（招聘プログラム）

100日プロジェクト（招聘プログラム）は、2009年度のメイン会期が100日間に設定されたこと、墨東で新しくプロジェクトに取り組むと少なくてもそれくらいの期間が必要になるという実感があったことからネーミングされた、まち見世におけるアーティスト招聘プログラムです。墨東初体験のアーティストが、約3ヶ月の間墨東に通いながら、リサーチ・制作・発表に取り組む形式を基本にしています。制作や発表の場はあらかじめ決められておらず、アーティストは事務局やプロジェクトのサポートスタッフと相談しながら、時間をかけて具体的な活動場所や作品の発表形態を検討します。

いわゆるアーティスト・イン・レジデンス施設にあるような滞在の場が用意されていたり、専属のコーディネーターがいるプログラムではありませんが、普段からまち見世に関わる人が一緒にリサーチに出かけたり、制作場所の提供の申し出があったり、必要に応じてたくさんの人が作業の手伝いに来てくれたりと、まち見世ならではの方法／手法でアーティストの活動が支えられます。

このコーナーでは、2012年度に行われた100日プロジェクト《曳舟湯怪》を中心に、100日プロジェクトとは別の枠組みで招聘したアーティストの活動も合わせて紹介します。

BOKUTO MACHI MISE 2009-2012
100 DAYS PROJECT

100 days Project｜2012

曳舟湯怪

新里碧

文＝高橋りほ＋中村祐希＋編集部

再開発に伴い解体を待つ状態だった地域の名湯「曳舟湯」に着目し、そのタイルや木材を使用した作品制作にアーティストの新里碧さんが取り組みました。新里さんは曳舟湯の廃業に象徴される地域の変化に着目。目に見えて古いまち並みが消えていく一方で、地域が持つ独特な雰囲気は残っていくと考え、その地域らしさを守るシンボルとして銭湯の妖怪「湯怪」を制作しました。会期中は湯怪8種類を地域の銭湯14軒の脱衣所や浴室に展示。公開期間中、各銭湯の利用客に鑑賞されました。会期終了後、一部の銭湯では湯怪を継続して展示することが決定しました。曳舟湯の廃材は湯怪として生まれ変わり、まちが姿を変えつつある墨東で、地域の人に愛される居場所を見つけました。

STORY｜曳舟湯と墨東の銭湯事情

2012年6月17日、曳舟湯は約80年の歴史に幕を閉じました。ご主人の松本伸久さんによれば、松本さんが曳舟湯を継いだのが昭和53年（1978年）。当時の銭湯は家族そろって訪れる場所として大勢のまちの人々で賑わっていました。しかし、その後住宅事情が変化し、自宅用のお風呂の普及やマンションなどの開発工事の増加とともに、客層も少しずつ変わっていきました。松本さんいわく「今のお客さんは自宅にお風呂はあるが銭湯が好きで来る人やお年寄りが中心」だそうです。徐々にお客さんが減っていく状況を心配しながら営業していた頃、曳舟湯のある京島一丁目一帯の再開発の話が持ち上がりました。銭湯の営業について、「どこかで見切りをつけることになると思っていたので、開発の話が線を引いてくれた面もある」と口にした松本さん。10年ほど前に開発の話を受けてから準備が進められ、ついに曳舟湯は大勢のお客さんに惜しまれながら最終営業日を迎えました。

—

30年前、墨東エリアの銭湯の数は100軒を超えていました。開発工事でまち並みがずいぶん変わった今、銭湯の数は減ったものの都内ではまだまだ銭湯の多いエリアといえるでしょう。最近ではコアな「銭湯ファン」が増えているようで、都内の銭湯でスタンプを集めて回る『ぶらり湯めぐりマップ』や、スタンプを集めるともらえるキーホルダーなど、特色ある銭湯グッズが充実しています。古くから利用するまちの人々とまちに馴染みのない銭湯ファン。両者が出会う銭湯は、まちに隠された魅力のひとつなのかもしれません。

曳舟湯外観

曳舟湯のために特別に制作された湯怪と松本さん

曳舟湯
旧所在地：京島1-7-10
建築的特徴：木造宮造り
開業：1932年

曳舟湯と過ごしてきた長い月日を終え、曳舟湯を形成していたタイルや木材は湯の妖怪「湯怪」になった。湯怪たちは新たな湯を求め墨東の銭湯へ散らばった。

1｜迎狸

設置場所：田中湯

玄関の暖簾をくぐると「本日の湯」の掲示とともに、袴を身に着けうやうやしく両手をつく狸の姿が目に入ります。迎狸は「曳舟湯の廃材はさらなるお客さんとの出会いを求め、銭湯の玄関口で出迎える狸に成り代わった」というコンセプトで制作されました。狸が着ている袴は曳舟湯の廃材のタイルや木材で作られています。この作品は《曳舟湯怪》の展示会場となった14ヶ所の全銭湯の中で北端に位置する田中湯でした。墨東の北の玄関口ともいえる銭湯に置く作品として、「墨東に訪れた人々をどっしりと迎える」という意味も含まれているそうです。「狸」という動物を作品のモチーフとして選んだのは、新里さんが本で知った地域の話の中で狸が出てきたことに由来しています。

—

2｜湯怪煙

設置場所：平和湯、良の湯

雲のような形に切られた廃材のアクリル板。その中に見え隠れする湯怪たちの姿。『湯怪煙』は銭湯の煙突から出る煙に乗って曳舟湯から他の銭湯へと移っていく湯怪たちをイメージして作られた作品です。「湯怪煙は煙突からもくもくと立ち上る煙となって湯怪たちを連れてあちらこちらの銭湯に飛んでいく」という作品のストーリーを語った新里さん。よく見てみるとそのストーリー通り、煙の中に他の湯怪によく似た形も見受けられ、ひとつひとつ異なった形をしています。平和湯の展示場所は銭湯の玄関でもあり、通路でもあるという不思議な場所でした。行き来する銭湯のお客さんや地域の方々に紛れて湯怪煙も移動しているのかもしれません。

—

3｜龍雲

設置場所：グランド湯、狸湯、薬師湯

銭湯の浴室には湯があり、そこから湯気が立ち上り、煙突からは煙が出て行きます。銭湯から外へ出て行くものの象徴として、湯気や煙とともに空に立ち上る龍の姿の湯怪が制作されました。3軒の銭湯で展示された『龍雲』は、タイルが貼られた土台で湯気や煙を表現した部分以外はそれぞれ形が異なります。作品の土台が大きいこともあり、それぞれの龍の姿は力強さを感じさせました。各銭湯1点ずつの展示となりましたが、薬師湯では女湯男湯の両方から見ることができるように工夫されました。

1｜迎狸（田中湯）

2｜湯怪煙（良の湯）

3｜龍雲（グランド湯）

4｜羨まし富士

設置場所：三徳湯、大和湯、改良湯

銭湯といえば、浴場に描かれた富士山の絵。ですが、世の中には富士山が描かれていない銭湯ももちろんあります。展示許可をいただいた銭湯を回るうちに、新里さんは「富士山のない銭湯に富士山を置きたい」と思うようになりました。そこから「富士に憧れる廃材が富士山に変身した」という構想が生まれます。とてもシンプルな形と色の作品ですが、曳舟湯の浴室にあったタイルを小さく割り、触れても怪我のないよう周りを丁寧に削って作られています。

—

5｜夢瓢箪

設置場所：寿湯

曳舟湯のシャワーコーナーにあった黄色いアクリル板から作られた作品。「水を浴び続けたアクリル板が植物に成長した」というイメージがもととなっています。新里さんが読んだ妖怪話の中でも印象に残った「部屋の天井から瓢箪がたくさん生えてくる」という描写から着想を得たそうです。脱衣所の窓から見える木々の葉に隠れるように吊るされた瓢箪。その様子はひっそりとしながらも、日を浴びてきらきらと輝いて不思議な存在感を放っていました。

—

6｜美人おかめ

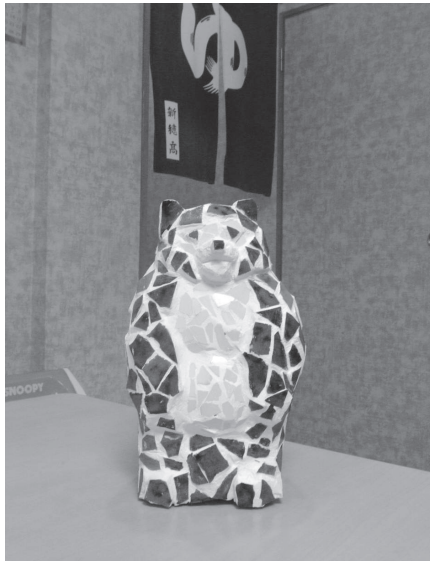
設置場所：おかめ湯

ずっと顔を映してきた鏡が妖怪になるとしたら、人に化けたいのではないかと発想した新里さんは、曳舟湯の脱衣所にあった鏡をおかめの面の形に切り抜いた作品を制作しました。作品はおかめ湯の番台横の支柱に掛けてある、おかめの面の下に設置されました。特に女性客からの関心が高く、会期後

4｜羨まし富士（三徳湯）

5｜夢瓢箪（寿湯）

6｜美人おかめ（おかめ湯）



7｜酒狸（みまつ湯）

8｜河童狸（松の湯）

も展示され続けることになった『美人おかめ』は、「鏡の映りが良い」と評判で周囲を明るく映し出しています。

—

7｜酒狸と狸酒

設置場所：みまつ湯

フロントの受付台に設置された酔っぱらった狸と、冷蔵庫の上に設置された酒瓶に化けた狸の湯怪。「みまつ湯の奥さんと話しているとお酒の話になることが多かった」という新里さんは、酒を題材にした作品を設置したいと考えて制作しました。新里さんは銭湯を何軒も回ることで、それぞれの銭湯の異なる魅力や特徴を感じたといいます。それらが作品にも反映され、みまつ湯では銭湯で働く人の魅力が表現された作品となりました。

—

8｜河童狸

設置場所：寺島浴場、松の湯

頭に丸いタイルをのせた小動物。頭の皿が乾くと死んでしまう河童をもとに着想された作品です。手に瓢箪を吊るした竿を携えたものや、踊ったような様子のものなど、場所によってポーズの異なる作品が展示されました。頭のタイルは、曳舟湯の湯船の底に敷き詰められていたものです。曳舟湯の廃業により、もう濡れることのなかったタイルは、新たなお湯を求めて他の銭湯へ移動する『河童狸』となり生き続けています。

再開発予定の曳舟湯周辺

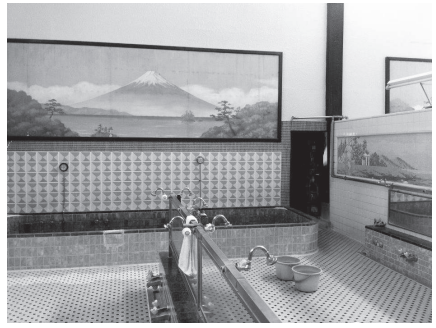
1｜ミーティング

最初の打ち合わせは、メイン会期の約3ヶ月前となる7月半ばに行われました。もともと銭湯好きであった新里さんは、銭湯が多く残るこの地域で銭湯を題材にした作品制作を行いたいと考えていました。まち見世事務局との打ち合わせの際に、京成電鉄押上線連続立体交差事業の一環である曳舟駅前再開発と曳舟湯廃業の話を聞き、曳舟湯を紹介してもらうことになりました。東日本大震災以降、地域の人が再開発に前向きになり、まちに変化が起きていたタイミングで曳舟湯を扱った作品制作は、地域の時勢に合った取り組みとなりました。

—

2｜リサーチ

まだ企画を決めていない段階で、地図を見ずにまちを散歩することからリサーチが始まりました。これを機に「墨田区を初めてちゃんと歩いた」という新里さんは、向島百花園や寺島図書館、国立国会図書館で、地域の特徴や伝承されている昔話を調べました。また、実際に地元の商店に入ることで人とまちの雰囲気を体感したそうです。廃業の話を知って最初に曳舟湯を見学した際、その佇まいに凛とした存在感を感じ、廃材を用いた妖怪の作品制作を発想しました。「曳舟湯に何かが宿っている気がした」という新里さんは、長い間人に使われてきたものに魂が宿ることで銭湯の妖怪が誕生し、その妖怪が銭湯を守っているというストーリーを考えました。作品プランが決定してから、作品制作のために銭湯や妖怪の文献調査が再度始まりました。新里さんは特に銭湯を調べることにのめり込み、地域の銭湯に詳しい地元の方にもヒアリングを行いました。そして、銭湯の妖怪をオリジナルで制作することになりました。



趣ある曳舟湯の浴室内

曳舟湯で作業する新里さん

—

3｜曳舟湯での素材集め

8月下旬に、曳舟湯のご主人・松本さんへ挨拶に伺い、曳舟湯を見学しました。この日は、作品素材の下見も兼ねており、その場で素材の提供についてもご了承いただきました。4日間の短期集中で行われ、猛暑の中、電気や水道が止まっている曳舟湯の室内で、新里さんはトンカチとノミでタイルなどの素材を剥がす作業を行いました。既に骨董的に価値がある素材は残っていない状態でしたが、浴槽や浴室のタイル、シャワーブースのアクリル板、脱衣所のロッカーの板、鍵などが集まりました。

—

4｜各銭湯との交渉

作品を墨東エリア内の銭湯へ展示することを目指し、最初に向島浴場組合の会長さんへまち見世事務局のスタッフと挨拶することから交渉はスタートしました。その後の交渉は新里さんひとりで進め、まち見世とは何かという説明を一から行い、銭湯の理解を得る必要がありました。会長さんに地域の銭湯へ展示交渉を行うことを承諾いただき、飛び込みで19軒の銭湯を回りました。「1回目の訪問ではその場で答えを出してもらわずに、顔を覚えてもらうために銭湯を回った」という新里さん。半数ほど回った時点で、再び会長さんに状況を報告したところ、組合で月1回開催されている会合に参加させてもらうことになり、その場で正式に各銭湯に企画を紹介することができました。その後、作品のスケッチを持って再度各銭湯を回り、展示の了承と配置の

最終確認をしていきました。地道に1軒ずつ説明に回り、交渉は約40日間かかりましたが、どの銭湯も、訪問回数を重ねることで企画に対する反応が良くなっていきました。エリアが広く、軒数も多かったため、この時期が一番苦労したそうです。粘り強い積み重ねの結果、最終的に14ヶ所での作品展示が決まりました。

—

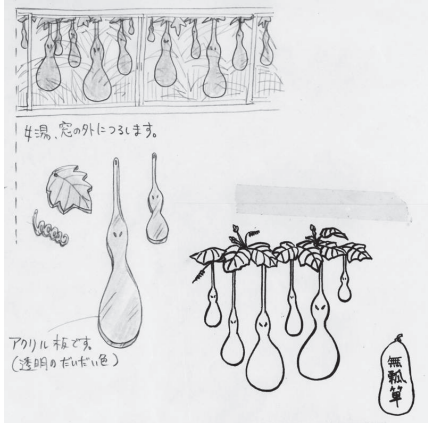
5｜墨東まち見世塾でのトーク

まち見世では、100日プロジェクトに参加するアーティストのことを知ってもらうために、「墨東まち見世塾」(→P.166)のゲストとして迎え、これまでの活動や100日プロジェクトの制作について話してもらうことが恒例となっています。制作も佳境を迎えた10月半ば、今年度の第2回まち見世塾として新里さんを迎えたトーク『100日プロジェクト 新里碧《曳舟湯怪》キックオフトーク』が実施されました。新里さんのこれまでの作品紹介や、曳舟湯怪について、たくさんの苦労話を含めた制作の進行状況が報告されました。

—

6｜制作

曳舟湯で集めたタイルや廃材は、制作作業の場となったシェアアトリエ・floatへ運び込まれました。タイルを分類したり、小さく割ったタイルを触っても怪我をしないようにルーターで削って加工したり、随時準備が進められました。展示会場となるすべての銭湯が確定した10月中旬に本格的にスタートし、展示開始2週間前からはfloatに泊まり込みで制作を進めました。「最初は間借りをさせてもらっている感じがしたが、周りに制作をしている人がいることは緊張感があって刺激になった」と新里さん。タイルやセメントといった素材は新里さんが初めて扱うもので、特に作品にタイルを貼るのに時間がかかりました。時にはフェイスブックで制作の手伝いを呼びかけ、新里さんの友人が手伝いのためにfloatに集まることもありました。曳舟湯のシャワールームで使用されていたアクリル板は、地元で金属加工業を営む方の工場に持ち込み、初体験の町工場の機械でカッティングしました。また、ガラスをおかめの形に切る作業は、ステンドグラスを使った制作をしている友人に協力してもらうなど、様々な協力を得ながら、会期の直前まで作業が続きました。



交渉などに使用した作品スケッチ

墨東まち見世塾『100日プロジェクト 新里碧《曳舟湯怪》キックオフトーク』

floatでの制作

—

7｜搬入

搬入は会期直前に7日間をかけて実施されました。展示エリアが広いなか、各銭湯の営業時間前に搬入するため作業できる時間も限られており、週末には車も出して精力的に搬入・設置が進められました。作業を見守るうちに銭湯のみなさんからは「銭湯を盛り上げていく企画には喜んで協力していきたい」という声もかけてもらえるようになり、次第に展示への期待が窺えるようになりました。

種類別に分けられたタイル素材

松の湯への搬入

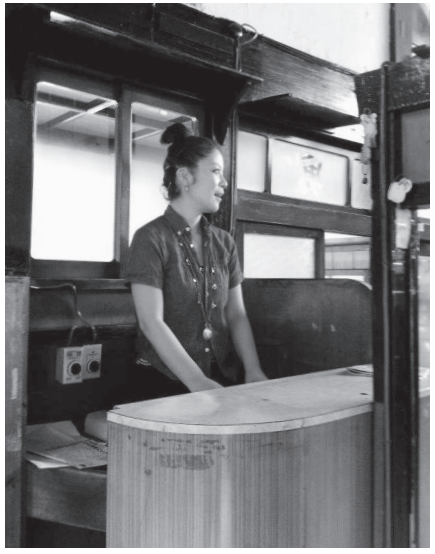
2012	SCHEDULE
7月中旬	地域のリサーチ開始、企画構成
7.19	事務局との初回打ち合わせ
8.9	墨東まち見世企画会議へ参加
8.29	曳舟湯見学
9.6、11〜13	曳舟湯で素材集め
9.11〜	19ヶ所の銭湯との交渉開始
9.13	墨東まち見世企画会議
9.13〜	floatに素材搬入、制作準備開始
10.7	向島浴場組合の会合でプレゼンテーション
10月中旬	floatを拠点とし作品制作開始
10.20	作品を展示する銭湯14軒が決定、墨東まち見世塾でキックオフトーク
10.21	作品めぐり用のマップつきフライヤーが完成
10.23、24	地元の金属加工の町工場で廃材のアクリル板をカッティング
10.27	友人と廃材のガラスのカッティング
10.29〜11.4	銭湯14軒へ作品搬入
11.4〜26	曳舟湯怪作品展示期間
11.16	曳舟湯のご主人へ展示開始のご報告
11.27〜12.1	作品搬出
12.22、23	floatで『曳舟湯怪Workshop』開催

変化の中にある、変わらないもの。

曳舟湯の廃材を用いて作品を制作した新里碧さん。墨東エリアのリサーチから銭湯との交渉まで、自ら足を運び取り組みました。《曳舟湯怪》を完成させるまでの道程と、その中で感じたことを振り返っていただきました。

作品の着眼点について聞かせください

そもそも銭湯が好きだったんです。最近銭湯がどんどん減っていく中で、この地域にはまだたくさん残っているので、題材にできたらいいなという気持ちは漠然とありました。まち見世事務局との打ち合わせで、約80年続いた曳舟湯が営業を終えたばかりという話を聞き、できれば曳舟湯の素材を使いたいとその時点で思いました。銭湯の素材を使って何を作るかは、悩みました。曳舟湯を最初に外から見学したときに、佇まいが凛としていて、銭湯自体に何かが宿っている感じがしたんですよね。この地域に伝わる昔話などを調べていた時に狸に化かされる話もあり、曳舟湯がこれだけ長く続いていたのは、銭湯の妖怪のようなものが曳舟湯を守っていたからではないかと思いました。廃業したときに、銭湯の妖怪たちが次の銭湯を求めて散っていくことも想像しました。廃業してなくなってしまう銭湯の素材が周りの営業している銭湯でまた生きるというコンセプトです。最終的に作品が地域に残っていくことになり、曳舟湯の素材を生かすことを全うできた気がしています。



曳舟湯の番台に上る新里さん

—

制作中はどういうところに苦労されましたか

銭湯へ作品を展示させてもらうための交渉がいちばん大変で、こんなに時間がかかるとは思っていませんでした。最初は、電話ではうまく説明ができないと思い、墨東エリアの銭湯19軒に飛び込みで1軒ずつ回って行ったのですが、その時はまち見世のチラシもなく口頭で企画を説明しました。まず、まち見世の説明をして、その上で自分の企画の説明もするので時間がかかり、もどかしさがありました。でも自分の足を使ってこの場所を知って作りたかったので、制作や交渉を簡略化したくないと思っていました。

—

実際の制作作業について教えてください

制作を始めてからは、本当に時間がありませんでした。素材を仮置きする場所が必要でしたし、搬入作業も数回に分かれたので、floatを制作拠点に使わせていただけたのは助かりました。制作で吉成隆（→P.139）さんに協力していただいたのも、とても安心感がありました。町工場を見るのも初めてだったので、置いてある機械はすごくかっこよかった。展示会場の数が多いので、いろいろな人に助けてもらえなかったら制作は終わっていなかったと思います。

—

作品展示後の反応はどうでしたか

銭湯の反応は、最初に交渉に行ったとき、作品を搬入したとき、作品を展示してからお風呂に入りに行ったときでそれぞれ違っていました。最初は警戒され、作品を持って行ったときは困惑気味でしたが、その後入浴しに行ったときに、銭湯の方がお客さんの反応を話す嬉しそうな様子を見て、やって良かったとようやく思えました。銭湯側で工夫して独自に展示替えされていたことも嬉しかったです。

—

墨東エリアの印象を教えてください

墨田区のイメージがあまりなかったので、知らないところを知るというワクワク感がありました。最初は、コミュニティの仲が良さそうに見えていいなと思う反面、外から入りにくい感じもしました。作品のスケッチをするために入ったチェーン店のレストランで、かなりフレンドリーに接客されて、それが印象的でした。チェーン店でも下町人情が変わらない。みんな隙あれば話しかけてくる。隣三軒が家族のような雰囲気がありました。再開発でまちの風景が変わって、駅前がビルやマンションになっても、この雰囲気は変わらないのだろうと思いました。まちの雰囲気はずっと残る気がします。

—

今後の活動についてお聞かせください

展示がこれだけ多い軒数だと最初からわかっていれば、もっと準備期間が必要だったと感じます。終わってみて、もっとやりたいという気持ちがあります。この地域は制作意欲が湧きます。グランド湯には今後もサロンを展示場所として使っていいと言ってもらえて嬉しかった。薬師湯には東京スカイツリーからでも見える絵を屋上に描きたいという構想があるそうで、私に頼んでくれないかなと思っています。今度は1ヶ所でじっくり制作してみたいです。

floatで制作中の新里さん

平成24年12月22日 floatにて収録

—

新里碧 | Midori NISSATO

1984年東京生まれ。2006年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業後、約4年間広告代理店に勤め、2010年より作品制作を再開。〈信楽まちなか芸術祭〉（2010）、〈あいちの離島 80日間チャレンジ!〉（2011）への参加など、作品の制作・企画は立体・漫画・ご当地グルメ開発など多岐に渡る。作品制作と並行して、イラストレーション・キャラクターデザイン・ノベルティデザイン・プロモーション企画などにも取り組む。銭湯好き。

ウェブサイト：http://sky.geocities.jp/web_midori/BEKKEN-TOP.html

DATA | 実施データ

プログラム名：曳舟湯怪
アーティスト：新里碧
会期：平成24年11月4日（日）～11月26日（月）
会場：墨東エリア内14軒の銭湯（田中湯［墨田5］・みまつ湯［墨田4］・狸湯［墨田2］・三徳湯［八広6］・寿湯［八広6］・大和湯［東向島3］・寺島浴場［東向島6］・グランド湯［八広4］・平和湯［八広1］・おかめ湯［八広1］・良の湯［東向島2］・松の湯［東向島1］・改良湯［押上3］・薬師湯［向島3］）

関連プログラム：曳舟湯怪Workshop
日時：平成24年12月22日（土）、23日（日）
会場：float（文花2-6-3）

曳舟湯怪のフライヤー

LATER | その後

曳舟湯怪の会期終了とともに行われた搬出。ですが、一部の湯怪たちはお客さんや銭湯主の声を受けて、会期後も展示されています。例えば『迎狸』を展示した田中湯の法京さんは、曳舟湯怪の説明を受けたときから会期が終わっても作品は田中湯に残したいと思っていたそうです。「土地開発のために仕方がないけど、銭湯の数が減ってきているのは寂しい。この作品があれば、なくなった曳舟湯のことを思い出して、銭湯業は厳しい状況だけど頑張ろうって思えます」と語り、新里さんが周辺の銭湯に向けて心を込めて作品を作ってくれたことを喜んでくださっていました。

—

残された作品は会期中の展示場所とは別の場所に置かれるなど、その銭湯に住む「湯怪」として居場所が与えられています。また、会期中に銭湯の様子を見て回る新里さんに「展示するものとは別に、自宅などに飾るためにもう1つ作ってほしい」というリクエストもあったそうです。ひょっとすると、今後も新作の湯怪が生まれるかもしれません。曳舟湯の廃材から生まれた湯怪たちは、墨東というまちで多くの人たちに愛される場所を見つけたようです。

会期後も作品が見られる銭湯（平成24年12月現在）
おかめ湯（美人おかめ）、グランド湯（龍雲）、三徳湯（羨まし富士）、田中湯（迎狸）、狸湯（龍雲）、みまつ湯（酒狸と狸酒）、薬師湯（龍雲）、大和湯（羨まし富士）

EPISODE | こぼれ話

曳舟湯怪Workshop
会期後の12月に2日間、「みんなで『湯怪』をつくろう！」と題してfloatを会場にミニ湯怪を作るワークショップを開催しました。「余ってしまった廃材がもったいない」という新里さんに、floatの吉川晃司さん（→P.43）が開催を提案したことから実現しました。土台となる材料やタイル、ホースなど曳舟湯の廃材を手に取る参加者からは「どんなものを作ろうかな」という会話が聞こえていましたが、いざ作業に取りかかると自然と無言に。真剣な参加者の方々に、新里さんはひとつひとつの材料について廃材をもらいにいった曳舟湯でのエピソードを語ったり、湯怪作りのアドバイスをしたりしていきます。曳舟湯での長い歴史や昔懐かしい思い出とともに、湯怪たちは新たな居場所へ旅立っていきました。

floatでのワークショップ

—

《曳舟湯怪》を盛り上げた『薬師ゆ通信』
薬師湯の月刊広報誌『薬師ゆ通信』の号外で、展示中の曳舟湯怪の記事が大々的に取り上げられました。誌面はラミネート加工され、薬師湯の浴室内にも掲出。新里さんは「キャプションを渡したら、薬師湯でストーリーをさらに膨らませて号外を作ってくれたことがとても嬉しかった」と振り返ります。薬師湯はフェイスブックやツイッターなどのソーシャルメディアでも曳舟湯怪のPRを展開しました。「最初に企画の話を聞いたとき、良いイベントだと思った。お客さんは面白がってくれる」と薬師湯の長沼秀三さん。情報を出した後の反響も多く、曳舟湯怪を盛り上げました。

『薬師ゆ通信』号外

ふたつの通りに面しており、ガラス戸から入って、公園へと通り抜けられる、元プレス工場を改装した空間。新里さんの100日プロジェクトでの制作拠点としても利用されたシェアアトリエ兼住居兼イベントスペースである〈float〉を紹介します。

—

曖昧であるからこそ、柔軟で開かれたスペースに

floatは、設立メンバーらの話し合いにより「ある目的のためだけの場所にしたくない」という思いから、「限定された用途をもたせない」というコンセプトのもとに設立。半ば曖昧な目的のまま発進したところから「ふわふわと漂っている」という意味で「float」と命名されました。

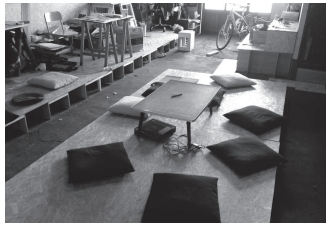
公開は2011年の8月、当時のメンバーで行った展覧会がはじめてでした。もっとも、そのときのfloatは元工場を借りた場所というだけで、内装は工場のまま。同じ年の10月から開催されたまち見世の会期に合わせて、集まった人たちと協力して公開リノベーションを行ったり、公開制作を行うオープンアトリエを実施しながら（→P.123《リノベーションカフェ》）、徐々にその姿が形作られていきました。

float
所在地：文花2-6-3　建築的特徴：元工場
主用途：アトリエ・住居・イベントスペース
開設：2011年8月
設立メンバー：飯塚貴士、川原卓也、三五茜、図師雅人、牧田愛、筒井佳樹、吉川晃司
リノベーション協力：西川練
運営メンバー：川原卓也、佐藤圭、図師雅人、中里洋介、筒井佳樹、吉川晃司
ウェブサイト：http://f-l-o-a-t.info

float外観

［リノベーションのこだわりポイント］

通り抜けられる空間
建物が面する東西の道路両側に出入口のあるfloatは、まちの通路にもなる。「誰でも来て通っていっていい」（吉川）という開かれた空間へのこだわりが感じられる


自由に配置できる床
可動式の床で、floatのそのときどきの使い方に応じて配置できるようになっている。チラシ用の設置棚も床の高さを調節して作られた

コミュニケーション
メンバーと意見交換を重ねながらリノベーションを進行。まち見世にも《リノベーションカフェ@float》というかたちで参加し、そのプロセスを公開した

新里さんの制作場所として提供した経緯は？

僕はまち見世の事務局にも関わっているのですが、リサーチや制作で新里さんがかなりこちらに通うことになりそうだったので、活動しやすくなればと思い提案しました。float自体はまちに開いているつもりですが、メンバーの中で意識的にまちに入り込んで制作する人がいるわけではないので、新里さんの活動はまちとfloatという拠点をつなぐ新しいきっかけを作ってくれたと思います。

—

floatのメンバーについて教えて下さい

設立当初は7人で運営していましたが、途中入れ替わりもあって、現在の運営メンバーは6人です。住居やアトリエ、イベントスペースとして、それぞれが自分の目的に合わせてfloatを使っています。

—

目指しているfloatのあり方は？

住んでいる人が開いている「住み開き」とはまた違う、最初から開いている「開き住み」ともいうような空間を目指しています。「自分たちが住んでいるのは公園だ」くらいに考えていて、公園のように誰でも気軽に来られるスペースになったらいいですね。

floatのメンバー（中央が吉川さん）

COLUMN #01

墨東まち見世の原点を振り返る

文＝曽我高明
Text: Takaaki SOGA

鳩の街通り商店街の中程にある〈チャレンジスポット!鈴木荘〉。その2階で向島学会が運営する4畳半一間の〈アートスポット鳩や〉では、2008年の秋から2009年の春にかけ、ささやかなスタジオプログラムが実施された。短期間ではあったが、その後のまち見世につながる試みとして、この場を借りて少しだけ振り返ってみたい。

—

「鳩や」のスタジオプログラムに関わったのは、向島学会理事の遠藤裕子、大崎元、嘉藤笑子、末永健治、友野健一、渡辺慎二、そしてぼくに加え、当時大学院生の遠山元気の8名であった。墨東エリアでは、2000年の〈向島博覧会〉以降、まちの外からアーティストが少しずつ移り住み様々な活動を行っていたが、ぼくらはそうした動きをフォローする中で、アーティストと地域の出会いを継続的につくる仕組みが必要だと痛感していた。鳩やのプログラムで意図したのは、「住む」ことと短期の「イベント」の中間ぐらい、墨東エリアでの軽い「お試し期間」のようなものだ。若いアーティストに一定期間鳩やをスタジオとして無償提供し、通いながらプロジェクトを行ってもらう。その後彼らが気に入ってまちに住むも良し、例えそうならなくとも、彼らの活動を通して、地域も良い刺激を受け取るに違いない。手狭ながら商店街に面した鳩やの空間は、まちの日常とアーティストの距離を近づけるのにふさわしい場所と思えた。

—

2008年秋、まずは手始めにアーティストの小林史子を招き、1ヶ月ほどの期間で最初のプログラムを実施する。小林は鳩の街通り商店街の店舗や幼稚園などの協力を得て大量の椅子を集め、鳩やの室内にまちの空気感が漂う、密度の濃いインスタレーションを制作した。続く2回目のプログラムでは、期間を年末から翌年3月までの約3ヶ月に設定し、アーティストの公募を行った。まさに100日プロジェクトである。ファイル審査の末、岡山から《向島おしょくじプロジェクト》で応募した三宅航太郎が選ばれた。3ヶ月の期間中、鳩やを「おしょくじ営業所」と称して地域内外から20名を数えるサポーターを集めるなど、三宅はユーモラスなアイデアや優れたマネジメント力を駆使して、近隣60軒の飲食店を巻き込むプロジェクトを見事にやり遂げた。

—

三宅航太郎のプロジェクト終了後、まち見世の事業が始まり、鳩やでのプログラムは休止となったものの、そこで集まったサポーターの何名かは、まち見世のサポーターとしても大いに活躍することになった。アーティストと地域が出会う機会の提供。まちの日常とアートの距離を近づける拠点。そして、自律的かつ持続的に運営可能な、無理のない規模の支える仕組み。以上3つを柱にした鳩やの活動は、まち見世の4年間を経て、地域で様々な拠点や活動が定着しつつある現在もなお、大切な原点としての意味を失ってはいない。

曽我高明｜1958年東京生まれ。早稲田大学文学研究科修士課程修了。97年に向島エリアで、現代美術製作所をオープン。国内外のアーティストの企画展を開催するかたわら、アートを活かしたまちづくりにも取り組んでいる。特定非営利活動法人向島学会 副理事長。墨東まち見世事務局。

P45左上｜「おしょくじ営業所」スタッフの集い、左下｜《向島おしょくじプロジェクト》参加店における『おしょくじの会』風景、右｜小林史子〈アートスポット鳩や〉におけるインスタレーション風景

100 days Project | 2009

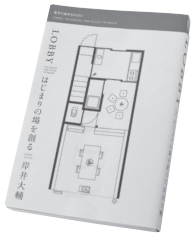
墨東まち見世ロビー

岸井大輔 Daisuke KISHII

メイン会期中の100日間、京島地区の商店街の店舗に滞在しながら、まち見世および地域の案内所の機能を果たしつつ、来訪者・地域住人・アーティスト・まち見世関係者が気軽に出会って話せる場として、ノンストップの活動を行いました。会期中はコンテンポラリーダンス・トークイベント・展覧会・ワークショップなどほぼ日替わりで多彩なプログラムを展開。活気ある商店街に面したロケーションや、誰とでも気さくにコミュニケーションが取れるアーティストの人柄なども手伝い、ロビーは文字通り来訪者と地域をつなぐ窓口として大きな役割を果たしました。会期終了後は、映像上映のための〈橘館〉としてサポーター出身者を中心に構成された実行委員会※により活用が進められたり、翌年度以降も〈墨東大学〉の京島校舎(2010-2011)やまち見世案内所(2012)として活用されました。

※現在は京島周辺での上映プロジェクトとして活動中

会期：平成21年9月1日(火)～12月9日(水)
会場：墨東まち見世ロビー(キラキラ橘商店街内)



※関連書籍として、東京の条件BOOK1『LOBBY―はじまりの場を創る』が東京文化発信プロジェクト室より発行されています。(2010年3月)

商店街に臨むロビー

西田シャトナーおりがみ展

ミセビラキ(小室陽一)

100 days Project | 2009

Memorial Rebirth in 京島・キラキラ橘商店街

大巻伸嗣 Shinji OHMAKI

まちなかに無数のシャボン玉を発生させ、そのまちの今を記憶に刻むパフォーマンス作品。国際展〈横浜トリエンナーレ2008〉をはじめとして、国内外各地で展開されています。墨東エリアでの実施にあたり、アーティストは地元のサポーターとともにまちを歩きながらリサーチを行い、下町情緒の溢れる京島地区の商店街を会場として選びました。開催当日は、商店街での本番前にシャボン玉を発生させながら、サポーターが屋台で京島の路地・公園・まちづくり用地などを練り歩き、地域住民とコミュニケーションをはかりました。会場での作品設置作業では多くのサポーターが参加し、商店街関係者とともに準備や安全管理にあたりました。パフォーマンスが始まると、空へと解き放たれた無数のシャボン玉が商店街を覆い尽くし、集まった人々から歓声が上がりました。その一変した風景を目にした人やプロジェクトに関わった人は、この日のまちの姿を記憶に留め、またふとした瞬間にそれを思い起こすのかもしれません。

実施日：平成21年11月22日（日）
会場：京島 キラキラ橘商店街

キラキラ会館での準備

屋台で練り歩き、パフォーマンスを告知

100 days Project | 2010

by the Window “墨東バージョン”

池田光宏 Mitsuhiro IKEDA

これまでに作家が各地で行ってきた、様々な建物の窓に人影の映ったアニメーション風の映像を投影することでそのまちにユニークな夜の風景を生み出すプロジェクトの墨東バージョンを制作。かつては夜のまちとして栄えた鳩の街通り商店街にある旧アパートと、〈墨東まち見世2010〉メイン会期中に案内所として活用していた一軒家の窓が活用されました。上映する映像には、地域の協力者らが出演して撮影されたものや、建設中の東京スカイツリーをイメージした影絵などが用いられ、墨東ならではの内容で見る人の目を楽しませました。また、案内所での上映展示に合わせて、各地で取り組んできたプロジェクトのドキュメント展や、作家がギャラリーなどでの活動をきっかけに結成した「アート系カレー部」によるイベントも実施。表現を楽しむ集いの場を提供しました。

上映展示

実施日：平成22年11月13日（土）、14日（日）、19日（金）、20日（土）、21日（日）

会場：鈴木荘2階窓面、まち見世案内所（旧アトレウス家）

---

by the Windowシリーズ・ドキュメント展

実施日：平成22年11月19日（金）、20日（土）、21日（日）

会場：まち見世案内所（旧アトレウス家）

関連イベント：カレーの市民（カリー）Vol.2

実施日：平成22年11月21日（日）

出演：池田光宏、ザ・ビークル（吉田剛、河原三紀）、笹原友香、田中英樹、笠原出、寿時利夫、北條元康

鈴木荘での展示

東京スカイツリーをイメージした映像

カレーの市民（カリー）Vol.2

P.50上 | まち見世案内所での展示
P.50下 | 展示に使用された映像

100 days Project｜2010

トーキョー・テレパシー

山城大督 Daisuke YAMASHIRO

建設中の東京スカイツリーを望む八広地区のアトリエを拠点として、墨東エリアに「東京のとあるまち」という俯瞰した視点を持ち込み、そこに流れる時間を意識させる複数の写真や映像作品を展示。並走するふたつの電車を使って撮影された映像や、このまちで日常生活を送る方々の協力を得て撮影した、秒針の刻む音を背景に静かにカーテンが揺れる映像は、その眼差しを持つ者やそこに映る者と鑑賞者の日常に、それぞれ異なる時間が流れていることを意識させるものでした。アトリエの屋上からは、展示作品や会場で配布されるテキストで暗示される東京スカイツリーを見ることができました。また、予約制で来訪者をまちなかへと誘う体験型の作品も展開。指示に従い路地と商店街を抜けてたどり着いた公園で、このまち、あるいは日本のどこかにいるであろう見知らぬ誰かと電話で会話を交わしながら再び空を眺め、ある風景を目撃するというものでした。3月11日に発生した東日本大震災のため、3日間のみの公開となったプログラムです。

会期：平成23年3月9日（水）～21日（月・祝）
会場：SOURCE.sight（SOURCE Factory内）
※3月12日以降のプログラムについては、東日本大震災の影響により中止

映像作品《High Touch》

映像作品《TOKYO TELEPATHY》

リサーチの様子

P.52上｜屋外作品《TOKYO TELEPATHY》
P.52下｜映像作品《Spectacle of Time》

100 days Project | 2010

墨田区在住アトレウス家

長島確 Kaku NAGASHIMA

向島百花園側の木造家屋にかつてギリシャ劇の一家が暮らしていたという設定で、墨田のまちの今に寄り添いながらも戯曲の世界観が入り交じる、独特の演劇的な時間を演出するプロジェクトを10ヶ月に渡って展開。3回の公演という形で公開※されました。家に刻まれた住人の痕跡は演者の物語に、隅田川の花火は戦争の砲弾にたとえられ（Part1）、おせち料理はギリシア風にアレンジされました（Part2）。部屋によって流れる時間の設定が変わり、参加者はそれをつかまえるようにシーンを巡り歩き（Part2）、現実のまちの中へも繰り出す※など、「実際にあるものとフィクションとが二層のレイヤーのように重なり合い、そのおかげでふつうだと見えないいろいろなことが感じられ、考えられるようになる」（長島）ことを狙ったプロジェクトでした。参加者にはアトレウス家からの手紙を模した公演の案内状や、季節に合わせてニュースレターなどが送付され、墨田のまちへの想像力を引き出す手がかりとなりました。

※Part3×4は東日本大震災の影響により中止

実施日：［Part1］平成22年7月31日（土）〜8月1日（日）
［Part2］平成23年1月13日（木）〜16日（日）
［Part3×4］平成23年3月16日（水）〜20日（日）
会場：旧アトレウス家および周辺

出演：福田毅、武田力、稲継美保、聞谷洋子、山崎朋、立川真代、石田晶子、東彩織、堀切梨奈子、西島慧子／國武葵、北條元康、小林賢弘、大橋加誉、藤井さゆり、坂上翔子、原友里恵、吉中詩織、宮武亜季、冨田了平［Part1］／大谷能生、佐藤慎也［Part2］／石田龍太郎、堀内里菜、馬渕かなみ、和田匡史［Part3×4］
コンセプト・構成・演出：長島確
コラボレーター：福田毅、武田力
レトロクッキング：EAT&ART TARO
写真・映像：冨田了平
ロゴデザイン：福岡泰隆
ドラマトゥルク：佐藤慎也、横堀応彦［Part1］
演出助手：宮武亜季
制作：戸田史子［Part1/Part2］、西島慧子［Part3］
企画：mmp（ミクストメディア・プロダクト）

写真：冨田了平

100 days Project | 2011

Lat/Long-project “I’m here. ここにいるよ。”

谷山恭子 Kyoko TANIYAMA

3.11の被災地を訪れた作家は、大地と自分の関係の深淵な揺らぎを経験した後、何気ない日常のかけがえのなさを改めて感じ、私たちの日常に感謝の意を表する本プロジェクトに取り組み始めました。GPSの装置を使ってまち歩きを重ねながら各所で緯度と経度を計測、小数点以下がゼロになるキリの良いポイントを探し、その場所に存在している公園やお店などに、マップを片手にまちを歩きながら見ることのできる様々な作品を設置しました。喫茶店のコーヒーカップや和菓子屋のどら焼き、植物園の梅の木、洋装店のショーウィンドウの洋服に飾られた蝶ネクタイ、作家お手製のポストカードを郵便局に持ち込むと特別に郵便局の名前の入った消印を押してもらえるなどの仕掛けがあり、来訪者は作家のささやかな手仕事とその場所を示す緯度と経度の数字を目にしました。いくつかの作品は会期後も残され、現在でもその場所へ足を運ぶことができます。オーストリアや横浜、高松などでも展開されている、「私たちの日常に感謝し、いつもと変わりない日々を祝福する」プロジェクトです。

プラン展示

会期：平成24年3月9日（金）～18日（日）

会場：現代美術製作所

墨東エリア内の作品設置ポイント

和菓子司埼玉屋、珈琲店浮浪雲、玉屋洋服店、爬虫類館分館、玉ノ井カフェ、現代美術製作所、墨田聖書教会、向島百花園 梅、京島のたから広場、京島郵便局、東向島ふじ公園、宮元児童遊園

※京島のたから広場は京島向島路地園芸術祭×Lat/Long-project コラボレーション作品

P.48下、P49 写真：貝塚純一

埼玉屋のどら焼き

玉屋洋服店

爬虫類館 分館のカップ＆ソーサー

COLUMN #02

旧アトレウス家のこと

文＝長島確
Text: Kaku NAGASHIMA

墨東にアトレウス家がやってきたのは2010年6月のことでした。向島学会の佐原さんの紹介で向島百花園の間近に家を借りることができ、まち見世関係者やプロジェクトに興味を持ってくださった近所の方々と掃除をして、引越そばを食べました。その日はちょうど白髭神社の大祭に当たっていたので、家のすぐ前にも露店が連なり、すだれ越しに「スーパーボール」や「広島焼」のカラフルな文字が踊っていました。夜にはお神輿まで担がせてもらいました。

—

やってきた、といっても、アトレウス家はプロジェクトの初めから「もういない」設定なのがミソでした。ギリシャ悲劇に登場するこの一家がかつてこのまちに暮らしていたとしたら、と無茶な仮定をすることで、彼らの目をとおして家やまちを再発見しようと思っていました。だから借りた家には最初から「旧アトレウス家」と名づけました。史跡みたいでちょっといい感じでしたが、地元の大工の北條さんが作ってくれた文化財っぽい看板が効きすぎて、その後は観光客がたびたび覗きに入ってきて、説明に窮することもありました。

—

翌年3月までの10ヶ月間、アトレウス家の過去の暮らしを想像する一方、そこを拠点としていろいろな変化を眺めました。花火大会の爆音を間近で聞き、真夏の暑さも、夕方の川風も、台風も経験し、秋にはまち見世が開催され、年末には鐘ヶ淵の方から鯛焼屋さんが越してきたり、幼稚園が建て替えられたり、年が明けて、せっかく買った籠植えの七草をネズミにすっかり食べられたり、向かいにあった3階建ての会社がなくなったりしました。400mに満たなかったスカイツリーも伸びきりました。

忘れがたいのは、やはり3月11日の震災です。ちょうどその日、プロジェクトのメンバーは、5日後に迫った公演に向けて、昼から近所の路上でリハーサルをしていました。アトレウス家の歴史をたどりながら、近くの路地を縦横無尽に歩きまわるようなイベントを計画していたのです。リハーサルを終え、いったん旧アトレウス家の2階に戻り、ミーティングをしていたとき、揺れがきました。最初は「まだ平気か?」というような変な余裕があったのですが(その前の週、近くの中学校で地域の防災イベントがあり、メンバーは起震車で震度7を体験済みだったのです)、慌てて飛び出し裏の駐車場に集まりました。隣近所のお宅からもわらわらと人が出てきて、あ、平日の昼間にこんなに人がいたんだと、自分たちのことを棚に上げて思いました。頭上をヘリコプターが飛び、もう一度大きな余震がきました。

—

まち見世の方々からも連絡が入り、ひととおり無事を確認し、夕方には大半のメンバーは毛布にくるまって徒歩で北千住の学生の下宿に移動、EAT&ART TAROさんと長島も歩いて都心横断の帰途につきました。隅田川沿い、真っ暗に静まりかえった首都高が印象的でした。

—

その後、まち見世のシーズンもさらに2度過ぎて、鳩の街の喫茶エデンが閉店したり、白髭神社そばの古いアパートが全部取り壊されたりしましたが、旧アトレウス家はまだあそこにあります。

長島確｜日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、コンセプトの立案から上演テキストの編集・構成まで、身体や声とともにあることばを幅広く扱う。ベケットやサラ・ケイン、ヨン・フォッセらの戯曲の翻訳のほか、さまざまな演出家や劇団の作品に参加。ウェブサイト：http://thoa.gr

写真：冨田了平

墨東まち見世論考｜2

消費されない アートプロジェクトを求めて

橋本誠 Makoto HASHIMOTO
（アートプロデューサー、墨東まち見世編集部長）
→P.138

墨東エリアでは2000年頃より、まちなかを舞台にしたアートプロジェクト（＝アーティスト等の活動）が幾度にもわたって行われてきたが、まち見世ではこの流れを踏襲しつつも、単純に屋外空間という意味での「まちなか」ではなく、そこで生活を営む人々の日常に寄り添う「生活圏」ならではのアートプロジェクトともいうべき活動が年々顕著になっていった。その主役となったのは、本書でも大別している「100日プロジェクト」に取り組み地域外からの視点を持つアーティストはもちろん、地域のことをよく知る住人企画者や拠点運営者ら「ネットワークプロジェクト」に関わる人々だ。それぞれに活動の性質は異なるが、多様性が共存しながら関わり合い、新たな価値観や人と人との関係性、日常を豊かに生きる術を生み出してきたことが、まち見世の魅力であったと思う。

しかしながらその魅力は、普段から墨東エリアの豊かな活動の存在を知る人々の間では共感を得やすい一方で、それ以外の人々には伝わりにくいものかもしれない。まち見世が地域コミュニティにもたらした幸福な影響は金善美氏の論考（→P.130）に譲るとして、ここでは100日プロジェクトのような、招聘アーティストが生活圏でアートプロジェクトに取り組む意義について考えてみたい。なお、筆者は2009～2011年度は、東京文化発信プロジェクト室の担当者としてまち見世に携わり、2012年度は、本書の編集プロジェクトを実践しながら一歩引いた視点で状況整理と振り返りを行ってきたつもりである。

—

100日間の盛り上げ方

2009年度に参加した岸井大輔（→P.46）と大巻伸嗣（→P.48）は、それまで墨東エリアになかったタイプのプロジェクトを展開したアーティストである。

岸井は、現実のまちに人々が存在し、関わり合う状態そのものを「演劇」と捉え、そこに自らが介入することを「演出」と称してまちなかで10年来活動をしていた。その立ち振る舞いは非常にしなやかで、演出という言葉とは裏腹に、作為を感じさせないものであった。しかし実際は、商店街に面した《墨東まち見世ロビー》の空間が、通りからどのように見えるのか、興味を持ってくれた人と何をきっかけにコミュニケーションを図るのか、またそこに他の参加アーティストやサポーター、地域の住人が居合わせたときにどのような会話を提供して行動を促すかなど、彼なりの計算にもとづいた仕掛けで実践されていた。同じように「もの」ではなく「こと」を生み出す美術作家である藤浩志の言葉をかりれば、劇作家ならではのアプローチで現実を「いじっている」状態がそこには現れていた。岸井によると、ほとんどが些細な内容ではあるものの、100日間で80のイベントが生み出されている。そのひとつひとつには、アートプロジェクトにありがちなアーティスト等の「やりたい」だけではなく、サポーター等の「やりたい」や地域側の「関わりたい」が明確にあるものばかりで、そこには確かに豊かなストーリーが存在している。エンパワーされた人や、見出されて（かたちを変えるなども含めて）地域に残った拠点の多さがそんなプロジェクトの充実を証明していると言えるだろう。

対照的に、大巻の《Memorial Rebirth in 京島・キラキラ橘商店街》は、丁寧な下準備を行いつつも瞬間芸的にコア期間のピークを盛り上げるプロジェクトとなった。商店街のど真ん中に機材を設置し、数十分の間だけシャボン玉により景色を一変させるパフォーマンスは、見た目にも強烈なインパクトを与え、心を揺さぶるアートとして一見非常に分かりやすい内容だ。しかしこれは、墨東エリアにお客さんを呼び込むことが最終目的の「イベント」ではない。大巻は、シャボン玉というマテリアルを用いているがために宿命的に抱える誤解を受けつつも、プロジェクトに関わる人々へ丁寧にそのねらいや自身の考えを伝え、きちんと協働することで、墨東ならではのプログラムに育て上げることを強く意識して取り組んでいた。当日の風景を目にした人すべてにそのプロセスを伝えることはできなかったかもしれないが、少しでもそこに関わった人には、この時の京島の風景とともにその記憶が強く刻まれたことだろう。目に見えるものや残されたものではなく、かたちの無い体験のようなものこそがこのプログラムの価値だったのである。

岸井と大巻は、タイプは異なれど言葉通り魔法使いのように、100日間という限定された会期を盛り上げる役を見事に担ってくれたと思う。まち見世はその後、「メイン会期」という概念こそ残したものの、活動を通年でとらえるようになったため、関わる人々の日常との接点の作り方を意識したプログラムが重視されるようになっていった。このような条件のもと、どんなアーティストの活動に意義を見出せるのかを考えながら、以降のプログラムは進められることになった。

—

地域との距離の取り方

前述の通り、2010年度の招聘プログラムでは、まち見世の通年展開との関係性を意識しアーティストのコーディネートを行うことになった。長島確（→P.54）の《墨田区在住アトレウス家》については、2009年度に東京文化発信プロジェクト〈学生とアーティストによるアート交流プログラム〉の一環として長島等が谷中にある民家を舞台に取り組んだ〈戯曲をもって町に出よう：『エレクトラ』〉の手法を持込む実験的な意味合いが強く、関係性を築きながらもまち見世からは一定の距離を保つ展開となった。

池田光宏（→P.50）と山城大督（→P.52）については、事務局メンバーと話し合いながら「100日プロジェクト」と銘打つ名のもとにコーディネートし、活動時期をずらすかたちにして、通年的にプログラムが動いている状況を生み出した。彼ら3組の取り組みは、地域やネットワークプロジェクトとの関係性の取り方こそ共通項が多かったが、アートプロジェクトならではの「距離」の取り方で2極化していたように思う。

長島と山城は、墨東エリアという地域性に関するリサーチや、ネットワークプロジェクト関係者とのコミュニケーションそのものには積極的でありながら、それを作品へと昇華させるにあたっては、あえてその成果や関係性を一度突き放して、あくまでもよそ者だからこそ持ち込むことができる視点や手法を意識していたようである。長島であればギリシア劇、山城であれば「東京」といった、呼称としては明確でありながらその実をつかみにくい概念のようなものと、木造家屋や墨東エリアの具体的なイメージ・風景とを重ね合わせることで、何かを浮かび上がらせるような試みであった。おそらくは、彼らのプログラムを体験するためにはじめて墨東エリアを訪れたような来場者と、普段から地域で生活を営む人、出演者や協力者と

して関わった地域やまち見世の関係者とでは作品の捉え方が全く異なったに違いない。今思えば、作品を体験した人の反応の違いをすくいあげること自体をプロジェクト化することで見えたものもあったかもしれない。特に長島のプログラムについては、インターネット上でレビューやブログ記事などを見ることができるので参照されたい。

池田のアプローチは、本人の性格に似て非常に前向きで親しみやすいもので、プログラムの性格を用いてまち見世や墨東エリアの要素を次から次へと取り込んでいくという距離の取り方であった。上映展示会場には、墨東では定番とも言える〈チャレンジスポット!鈴木荘〉と、この年のまち見世の活動拠点ともなった長島の〈旧アトレウス家〉を活用し、作品に使用する映像の撮影会もワークショップ的に参加者を募って楽しく開催。作品には直接関係しないものの、本人が所属する「アート系カレー部」によるイベントまで実施した。これはともすると、アートが地域を盛り上げるツールとして消費されてしまうのはいかがなものか、という定番の批判まっしぐらのコースである。しかし、いざ墨東エリアの暗闇に色鮮やかな映像が浮かび上がるさまを目にすると、私自身も心が踊るうれしさがあったし、地域住人も含めて多くの鑑賞者が作品に惹きつけられ、そこで誘発されるコミュニケーションも含めて素直に楽しむ風景を目にすることができた。《by the Window》はシンプルでありながら、これだけの力を持つ完成度の高い作品なのだと言うことができるのだろう。

—

ともに創り、体験する価値

2011年度、2012年度に招聘した谷山恭子(→P.56)と新里碧(→P.28)によるプログラムは、まち見世に関わるネットワークの充実も手伝い、コラボレーション要素や地域性への応答という意味で非常に充実した内容となった。ふたりはスタイルこそ異なるものの、コンセプトをストーリーやビジュアル表現にうまくのせて伝える能力に優れており、また墨東エリアそのものに魅力を感じてくれるのではないかという期待のもとにコーディネートが行われた。

この頃になると、招聘プログラムのマネジメントも墨東ならではの手法が確立されて、まずは事務局で墨東エリアやまち見世に関するブリーフィングやリサーチ活動のコーディネートを行う。谷山と新里は、これらを非常に楽しんでいる様子であった。公式なリサーチとは別に、彼女たちがふらりとひとりでまち歩きに行ったり、ネットワークプロジェクト関係者などへ声がけをしたりすると、どこからともなく活動に興味を持った人が数人現れて、それぞれの視点で自然と地域に関する情報を与えてくれるのもまた良かったようだ。皆、招聘アーティストが何を考え、何をしようとしているのかに興味があるのである。また、発表時期の前にプロジェクトの構想と経過報告、これまでの自らの活動を「墨東まち見世塾」で話してもらう機会を設け、彼らへの理解と交流の場をつくることも恒例となっていった。

谷山はこの見えざる地域資源を早い段階から体感していたのか、リサーチや制作のスケジュールを100日間の中でうまく計画していた。同じ場所を訪れるにしても、生活を通してリアルにその場について語ることのできる者との同行は、かなり意味を異にする。彼女の作品は、ポイントをめぐるだけでも心踊るまち歩きができる魅力があったが、それぞれの場所で作品に関わる人との会話にありつくことができたら、きっと彼女とのやり取りの中でその人が考えたことや、直接関係がなくても地域を知ることのできる小話などが引き出せるに違いない。それは、作品をきっかけにはじめて墨東エリアを訪れた人にはもちろん、普段からここで生活を営む人にとっても新たな地域への眼差しや、うれしい出会いのひとときを提供することは間違いないだろう。

新里は、本書でも詳しく紹介している通り、失われつつある墨東エリアの風景を象徴するもののひとつである曳舟湯の廃業に着目し、粘り強いコミュニケーションを重ねて14軒もの銭湯に「湯怪」という不思議な存在にかたちを変えた曳舟湯の姿を出現させた。言葉やスケッチでは伝えにくいその構想を銭湯主などに説明するのは困難であっただろうが、それでもぶれることのない「湯怪」のストーリーとイメージを頭の中でしっかりと描き出す想像力と、プロジェクトを完遂させる強い意志があったからこそ実現できたことは間違いない。また、実際に作品を制作するにあたって、拠点であるfloat(→P.42)や町工場主の吉成隆さん(→P.139)のような存在に協力を得ることができたのも重要なことであった。

—

消費されないアートプロジェクトを求めて

全国で様々なアートプロジェクトが行われる中、単にサイトスペシフィックな作品や、表面的に地域性をなぞった作品、地域に根ざしていても驚きに欠けるものが目に付きはじめている。まち見世のような生活圏におけるアートプロジェクトであれば、なおのことその真価は問われる。その地域にしかない何かに寄り添いながら、どのようにそれを表現し、どのような人々に、どのような手法でその価値を伝えていくことができるのか。この問いは、イベントとして消費されないアプローチを模索するどの現場でも永遠に課題だろう。

まち見世では、墨東というリアルな場に作品を埋め込む挑戦をしてくれた7人のアーティストの活動と並行して、その名のもとに豊かなネットワークと普段からの活動が醸成され、それらが相互に好影響をもたらす状況が生まれている。7人の強度のある表現、体験を可能にするのは、自らの構想を実現させたいという強い意思だけではなく、プロジェクトに関わってくれた人、あるいは関わってくれたかもしれないたちに、彼らの想像を越える何かを提示したいという思いや関係性だと言ってもいいだろう。彼らの活動が近所づきあいでの基本でもある言葉「持ちつ持たれつ」を自然なかたちで実現しながら、まち見世というネットワーク的な運動態のある場だけで実現可能なプロジェクトを生み出すことができているのであれば、素敵なことではないだろうか。

100日プロジェクト｜招聘アーティストプロフィール

岸井大輔｜Daisuke KISHII

1970年生まれ。演劇の素材を人間の集団ととらえ、他ジャンルで追究された創作方法による形式化が、演劇においても可能かを問う作品群を制作発表している。PLAYWORKS主宰。代表作に『P』、『potalive』、『文』、『東京の条件』。

ウェブサイト：http://plaza.rakuten.co.jp/kishii

大巻伸嗣｜Shinji OHMAKI

1971年岐阜県生まれ。東京藝術大学美術学部彫刻科准教授。ECHO(資生堂ギャラリー、東京画廊、岡本太郎美術館)、Liminal Air(東京ワンダーサイト、ギャラリーA4)など、展示空間を非日常的な世界に生まれ変わらせ、鑑賞者の身体的な感覚を呼び覚ます、ダイナミックなインスタレーション作品を発表している。

ウェブサイト：http://www.shinjiohmaki.net

池田光宏｜Mitsuhiro IKEDA

1969年横浜生まれ。東京藝術大学大学院修了。パブリック・スペースにささやかな仕掛けを施し日常を異化するプロジェクトやインスタレーションを中心に制作・発表を行っている。2003年、2006年〈大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ〉、2008年〈Akasaka Art Flower 08〉などに参加。

ウェブサイト：http://www.mitsuhiroikeda.com

山城大督｜Daisuke YAMASHIRO

1983年大阪生まれ。岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー(IAMAS)修了、京都造形芸術大学芸術学部卒業、東京藝術大学大学院映像研究科博士後期課程在籍。「移動／同期／習合」をテーマに、その場でしか体験できない《時間》を作品として展開。ユニットNadegata Instant Party(中崎透＋山城大督＋野田智子)としても活動。

ウェブサイト：http://www.yamashirodaisuke.com

長島確｜Kaku NAGASHIMA(→P.59)

谷山恭子｜Kyoko TANIYAMA

1972年愛知県生まれ。武蔵野美術大学造形学部大学院修了。場所の歴史や特徴を生かし、空間的な作品をつくっている。2005年『ARCHITYPES』展(カナダ・オーストラリア・東京)、2009年〈大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ〉、2010年、2013年〈瀬戸内国際芸術祭〉などに参加。

ウェブサイト：http://www.kyococo.com

新里碧｜Midori NISSATO(→P.39)

BOKUTO MACHI MISE 2009-2012 | Network Project

ネットワークプロジェクト

ネットワークプロジェクトは、事務局が主導する100日プロジェクトのような招聘プログラムだけではなく、日頃からまち見世の企画や運営に関わっているアーティスト・アート拠点・団体などが自発的に取り組んでいる活動の延長でまち見世に参加することのできるよう、2010年度より整えられた、参加企画をつなぐ仕組みです。それぞれが自分たちなりのスタイル・スケジュールで企画に取り組みますが、その多くはメイン会期に合わせて実施されます。来訪者は様々な場所で行われる個性的なプログラムを巡りながらまちの魅力を感じることができ、参加企画間では相互理解や連携を深めて、地域のまちづくりや文化的活動を豊かなものにしていくきっかけとなっています。

このコーナーでは、2012年度に行われたネットワークプロジェクトにおける4つの特別企画を中心に、その活動の多様性や継続性、地域に根ざした雰囲気をご紹介します。

※2009年度は招聘プログラムとネットワークプロジェクトの明確な分類がありませんでしたが、それまでに墨東エリアで活動を行ってきた人や拠点による企画が多く行われました。

BOKUTO MACHI MISE 2009-2012
NETWORK PROJECT

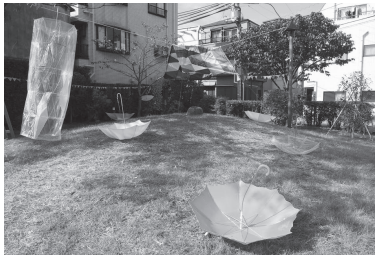
文=橋本誠

墨東エリアの様々なアート拠点や活動ならではの特徴をキーワードでご紹介します。

住み開き

住居やアトリエの一部をギャラリーやイベントスペースにして、土日や夜間のみ、あるいは予約制でプログラムを実施している拠点が多く存在しています。「住み開き」提唱者の言葉を借りればそれは、「日常生活文化に近いところから、人や街に対して何らかユニークなアクションを仕掛けていく、またそこに関わって行くこと、それもまた『アートを実践する/アートに触れる』という行為」(アサダワタル)なのかもしれません。

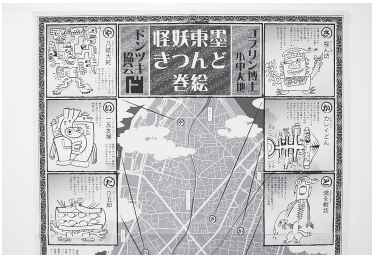
写真:旧S家で行われた《〈きおくレストラン〉と〈リノベカフェ〉》(2011)



まちなか

公園や路上、普段は活用されていないまちづくり事業用地、商店街の一角、お店のショーウィンドウなど、アート拠点ではない場所を活用して行われるプログラムがあります。その狙いは、墨東ならではの風景を活かすためであったり、プログラムのことを知らない地域住人や偶然の来訪者の参加を促すためであったりと様々です。企画者やアーティストがその場へどのように向き合っているのか、という興味が広がります。

写真:一寺言問集会所前広場などで行われた《雨水基地》(2012)



コラボレーション

新しいつながりや企画を期待するアート拠点と活動場所を探している企画者やアーティスト、実現したいアイデアを持つアーティストと技術のある地域のものづくり職人、ジャンルは異なるけれども何か一緒にできそうなアーティストや企画者同志、アートと伝統芸能…。それぞれの活動だけではなく、時にはコラボレーションによる、多様なプログラムを目にすることができます。

写真:「ドンツキ協会」と小中大地による『墨東妖怪どんつき絵巻』(2012)

参加型

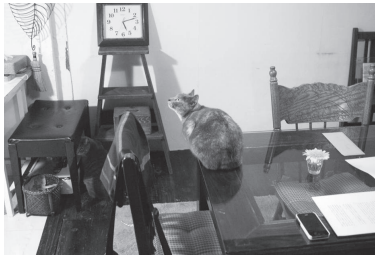
ワークショップ形式であったり、作品の素材集めが行われたりするなど、企画者やアーティストとともに、集まった参加者や来訪者がともに作品づくりに取り組むプログラムがあります。地域住人の活動や表現をすくい上げるようなものもあります。仕掛け手から鑑賞者へという一方通行の表現ではなく、双方向に、様々な人の手が関わりながら思いもよらないものが生まれることが魅力です。

写真:《サンタさんやって来て!プロジェクト》(2010)でのくつ下集め

部活的

期間限定の企画ではなく、継続的にミーティングやイベントを重ねる部活的な動きがあります。町工場の職人やアーティストらの集う「自転車部」は、まち見世以前から活動中。また、2011年度のネットワークプロジェクトから生まれた「ドンツキ協会」は、まち見世の新しいネットワークによる参加者を得て、広がりのある活動をしています。2009年度のまち見世をきっかけにできた「三国志部」なるものもあるそうです。

写真:自転車部



日常生活

墨東エリアならではの生活の営みを取材活動などにより表現する企画や、地域の日常に溶け込んだ路地園芸の魅力に注目した芸術祭、雨水利用やまちづくりの発想を生かした活動など、日常生活そのものや、そこに見出せるクリエイティビティに注目した活動もポイントのひとつです。「墨東まち見世さんぽ」のようなまち歩き企画では、地域の日常風景も垣間見ることができます。

写真:KO《わたしの小さな生活》(2011)

カフェ

様々な表現の場で、人々をつなぐ機能としてのカフェが目立ちます。ikkAや東向島珈琲店など、地域コミュニティにとっては馴染みのある場で企画されるプログラムや、《ウクレレ絵本カフェ Live Love Laugh!》(→P.124)のように、カフェ機能のない場で工夫されるイベントなど。floatでは、プロセスを公開しながら進められたリノベーション関連企画の数々をまとめ、《リノベーションカフェ@float》と称していました。

写真:EAT&ART TARO《レトロクッキング2010》(2010)

39アート in 向島

2001年に現代美術製作所で開かれた開発好明個展の際にはじまった、毎年3月9日をアートの記念日として楽しもうという〈Thank you @RTの日〉(通称:39ART)。2010年にチャレンジスポット!鈴木荘のチクタク商店がこれに参加したことをきっかけに、翌年からは多くのネットワークプロジェクト関係者などが共同で〈39アート in 向島〉を仕掛け、マップ制作なども行う自主的な活動に発展しています。

写真:〈39アート in 向島〉ロゴ　デザイン:樋口裕一

Network Project｜2012（特別企画）

墨東文庫［街頭紙芝居編］

～まちで見つけた物語、まちで語る物語～

ちっち＋木村健世と墨東文庫編集室
文＝児玉幸代＋山内敦史＋編集部

2011年度のネットワークプロジェクトから生まれた《墨東文庫［鳩の街編］》に描かれた物語をもとに、ワークショップ形式で紙芝居を作成し、物語の舞台である鳩の街通り商店街の一角で口演を行うプロジェクト。墨東文庫を制作した木村健世と編集室メンバー、紙芝居師ちっちがともに企画した。ワークショップは編集室が置かれる私設図書室〈こすみ図書〉を主会場として、あらすじ作り、絵の作成、色塗り、口演の練習・実演と5回にかけて行われ、社会人を中心に毎回違うメンバーが参加。そのため何人もの意図が入り交じり、誰もが予想しない不思議な仕上がりとなりました。商店街のミニ公園に自転車と箱舞台を設えて行われた口演には、多くの見物客がかけつけ、地域住人や通りがかりの人にも楽しんでいただきました。

ABOUT｜墨東文庫とは

「大きなものやイベントに目が行ってしまいがちだが、自分たちが住むまちには人々の営みによって生み出されるたくさんの物語がちりばめられている…まちは文庫だ」と考える木村健世さんが、その思いを京島地区でまちを歩くための文庫目録という形にしたのがはじまりです。翌年には、鳩の街通り商店街にある〈こすみ図書〉に「墨東文庫編集室」も誕生し、鳩の街編が制作されました。

—

墨東文庫［京島編］

取材から編集まで、すべてを木村さんがひとりで手がけました。「メディアの発達により価値や情報が与えられっぱなし」な状況に対して「地面の割れ目とかを発見したり、まちを徘徊するのが好き」だと言い、キラキラ橘商店街を中心とした複雑な路地と、昔から存在し続けている建物とで形成される下町・京島での取材は「とても濃厚な時間だった」と振り返っています。はじめは、初対面のお店の人に話しかけることさえ怖かったけれど、完成した文庫を渡しに行くとその場で読み「新鮮だ」と喜んでもらえたことなどがとても嬉しかったそうです。（→P.117）

—

墨東文庫［鳩の街編］

京島編を制作した際の体験が、「とても楽しかった→楽しさを共有したい→みんなで取材したい」という思いの変化を経て、「鳩の街編」の企画に至ります。こすみ図書とタッグを組み、集まった編集部員がオリジナルの腕章をつけて複数のチームで鳩の街通り商店街を中心に取材を実施。その体験を共有しながらそれぞれに物語を書き上げ、ひとつの本として完成させました。（→P.122）

墨東文庫と京島の風景

墨東文庫［京島編］

墨東文庫［鳩の街編］ワークショップ

こすみ図書外観

昆野純子

こすみ図書
所在地：向島5-48-4
建築的特徴：元店舗
主用途：図書室・イベントスペース
開設：2010年10月
運営者：昆野純子
ウェブサイト：http://kosumitosyo.blogspot.jp

鳩の街通り商店街にある元お茶屋の空き物件に移り住んだ昆野純子さんが、「アートと文化が触れ合う場所」をコンセプトに開設。準備段階から《こすみ図書リノベーションプロジェクト》(→P.114)として2010年のまち見世に参加して以来、様々な人が関わる場となってきました。メインターゲットは社会人。本は貸し出しせず閲覧のみ。土日を中心に上映会やワークショップなども開催しました。また、まちのイベントなどの拠点ともなっていて、子供からお年寄りまで様々な人が訪れます。ともに墨東文庫編集室を立ち上げた木村さんは、こすみ図書のことを「いろんな人が出入りし、助けてくれる、居心地の良いスペース」と評しています。

—

実施イベント例
ふわゆる上映会…週末にみんなでご飯を作って、一緒に食べて、映画を見る企画。
ビブリオバトル…参加者が自分の好きな本をプレゼンし、1番読みたい本を選びチャンプを決定。

—

昆野純子 | Junko KONNO
大学時代、研究室のアートプロジェクトに関わり、卒業後は一般の会社に就職。5年後、大学の仲間との飲み会で、「アートは回りくどくて効率悪い」などの話題から疑問を抱き、久々に展覧会やアートプロジェクトを回ったそうです。その中でまち見世に出会います。《墨東まち見世ロビー》(→P.47)を行っていた岸井大輔さんのワークショップで「普通の生活をしながらアートに関わるには?」と質問した結果「墨東に住む」のがよいのではないか、ということで、まち見世関係者とともに物件を探し、現在の場所に引っ越したそうです。

木村健世 | Takeyo KIMURA
「パブリック」アーティスト。大学では建築を学ぶが、よりダイレクトに「まちを知り、まちを楽しむ」ための方法としてパブリックアートの手法を模索しはじめ、2001年にアーティストグループ「フタボンコ」を結成。〈代官山インスタレーション〉(2011)、〈越後妻有アートトリエンナーレ〉(2003,2006)などに参加し、まちをフィールドにアートプロジェクトを展開しています。2008年から個人名義で活動。〈墨東大学〉(→P.117)の講義『墨大カレー考』から生まれた「カレーキャラバン」プロジェクトメンバーでもあります。
ウェブサイト：http://takeyokimura.net

木村健世

—

紙芝居師ちっち | Chicchi
ヤッサン一座に所属するプロ紙芝居師で東京都のヘブンアーティストとして個人活動も展開。東京・下町を中心とし、全国で活動しています。いつも自転車で現れ、どこから来てどこに行くのか誰にも分からない、神出鬼没の存在。経歴も紙芝居師になった理由も謎だが、「近距離で双方向の『紙ニュケーション』をとりながら、独特の場を客とともに作りあげ、大切なナニカをおもしろく共有したい」と語り、演者も観客も世代を超えてともに「いのち輝く」紙芝居のあり方を目指しています。今回のように、物語紙芝居を何人もの手で分業しながら作るのは初めての試みで、まちの人たちと一緒に作業できるのがとても楽しかったとのことでした。
ウェブサイト：http://chicchinochi.blog133.fc2.com

紙芝居師ちっち

企画チームの結成

前年のまち見世を通して制作した「鳩の街編」の発行を7月に控え、これをベースにさらに楽しいプロジェクトへと発展させたいという思いを、木村さんと昆野さんは抱いていました。一方、ちっちさんは個人の紙芝居活動の企画で初めてまち見世に参加しようとしていましたが、普段と同じように街頭口演をするだけではアートプロジェクトに参加する意味がよくわからないと思い、企画会議で「紙芝居師である私とどなたか一緒に何かをやりませんか」と投げかけていました。それを聞いた昆野さんが木村さんに「ちっちさんと組んで、墨東文庫をもとにした紙芝居を作るのはどうか?」と提案。木村さんもそれは面白くなるだろうと感じ、3人のチームが生まれました。

参加者の募集

これまでに「墨東文庫」の制作に関わってくれた編集室メンバーへの声がけを行い、新しいメンバーを集めるためのフライヤー制作と配布に取り組みました。フライヤーづくりでは、時間がない中でどんなメインビジュアルにするべきか3人とも頭を悩ませ、以前から関わりのある墨東エリアに暮らすデザイナーに相談しました。彼の提案で同じく墨東エリアで活動する写真家に撮影を依頼。こすみ図書の前で3人と墨東文庫、ちっちさんの紙芝居自転車すべてが収まった、みんなが納得するビジュアルが完成しました。刷り上がりを見た3人はその出来によりいっそうやる気が出たそうです。

—

こすみ図書と企画チームの3人　写真：川原卓也

第1回：実演体験・絵コンテ作り（10月13日）

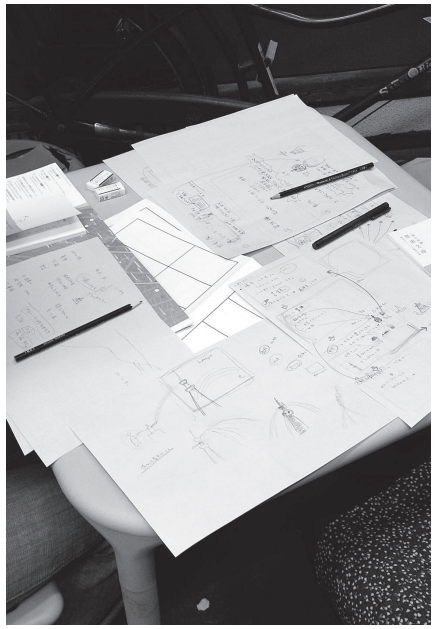
1回目の参加者は5人。自己紹介の後に墨東文庫の説明がありました。そしてまずはみんなで、街頭紙芝居の世界を物語で描いたちっちさんによる『あの日の夕陽の日』の実演を鑑賞します。自転車の荷台に取り付けられた紙芝居の舞台で、拍子木を叩きながら独特のリズムで演じるちっちさんにみんな惹き付けられ、通りがかりの人もちらほらのぞいてくれます。続いて木村さんが「京島編」収録の『そらの木』をベースに見本として作った紙芝居を披露。そして紙芝居作りが始まりました。墨東文庫を読んで、多数決で『空中路地』と『群青』のふたつを紙芝居化することになりました。ふたつのチームにわかれて木村さんの紙芝居をお手本にストーリーを考えていく。といってもそのやりかたは自由です。どんな人物を登場させようか、冒険の話にしようかな、感動的な話にしようか…と、妄想を膨らませながら絵コンテを描いていきます。

—

第2回：絵コンテ作り（10月20日）

参加者は少なめながら、前回から続けて参加し、この1週間で考えたストーリーや絵コンテを持って来てくれる熱心な方もいました。『空中路地』と『群青』チームそれぞれで作業を進めるのですが、参加者が増えたり減ったり入れ替わったりで、メンバーが変わっていくのがこのワークショップの面白いところ。悩みながらも何とか絵コンテを完成させました。

ストーリーを考えていく参加者たち



絵コンテ

第3回：下絵描き・色塗り（11月14日）

前の週にテレビ番組でまち見世特集が放送され、墨東文庫も取り上げられたので、その録画を観ることから始まりました。前回仕上げた絵コンテをもとに下絵を描いていると、ご近所のSさんが飛び入りで見学に。こすみ図書に貼られているチラシを見て、プロの紙芝居師がいるのかと興味を持ってくれたそうです。下絵ができたらペン入れ隊がペン入れを、という具合にゆるやかな分担作業で色も塗っていきます。時間も忘れて延長し、7時間に及ぶ作業に。ほとんど筆や絵の具を使ったことのない参加者ばかりでしたが、何とも個性のあらわれる素敵な紙芝居になってきました。見学だけのつもりだったSさんも、勧められるがままにタコの絵を描かされたそうです。

口演の練習の様子

第4回：台本づくり・口演の練習（11月18日）

色塗り作業の続きをやっていると、参加者のほかにたくさんの人たちが入れ替わりで様子を見に来てくれて、いつの間にか色を塗りはじめている、という光景がよく見られました。まち見世関係者や、よく顔を出す近所の子供や、アサヒ・アート・フェスティバルに参加している尾道の方たちなど。おばさんのエプロンの色はピンクかなあと、みんなは淡いピンクを想像して話していたのに、何の躊躇もなく派手なピンクを塗る人がいたり、自分の描いた下絵を別の人が綺麗に塗ってくれていたりと、作業をリレーしていく楽しさやどうなるかわからない面白さがありました。参加者は遅くまで居残りで塗り続けて、同時に台本書きと口演の練習も始めます。いつの間にか見学だけ、と言っていたSさんも練習に参加していました。

絵コンテをもとに色を塗る参加者たち

—

第5回：街頭口演（11月24日）

「紙芝居がはじまるよー!」と拍子木を叩きながら紙芝居自転車を引いて、鳩の街通り商店街での呼び込みの後に、はとほっとミニ公園で2回の口演を行いました。1回目はSさんが『空中路地』を、Tさんが『群青』からタイトルを変えた『井戸水大冒険』を、ちっちさんが木村さん作の『そらの木』を、という順番で披露します。はじめてのSさんTさんは緊張した様子、ちっちさんはさすがの表現力でお客さんを惹き付けていました。その後ちっちさんに抑揚をつけた読み方や拍子木の叩き方をアドバイスしてもらい、2回目はTさんが『井戸水大冒険』、Sさんが『空中路地』、ちっちさんが自作の「鳩の街編」収録『墨東黄譚』(『夕暮れのバナナ』より)を口演します。子供から年配の方まで、およそ50人くらいの観客を前に大盛況で口演を終えました。

はとほっとミニ公園での街頭口演

DATA | 実施データ

プログラム名：墨東文庫［街頭紙芝居編］～まちで見つけた物語、まちで語る物語～

企画者名：ちっち＋木村健世と墨東文庫編集室

紙芝居つくりワークショップ

実施日：平成24年10月13日（土）、20日（土）、11月4日（日）、18日（日）、24日（土）

会場：こすみ図書（向島5-48-4）

紙芝居の街頭口演

実施日：平成24年11月24日（土）

会場：鳩の街通り商店街・はとほっとミニ公園

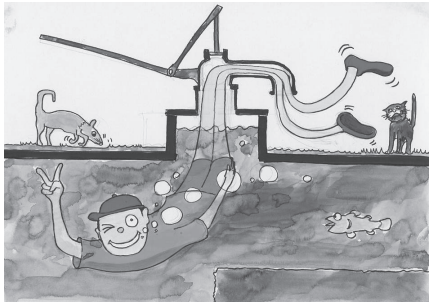
墨東文庫［街頭紙芝居編］のフライヤー

EPISODE | こぼれ話

『空中路地』を口演するSさん

街頭口演の熱も冷めやらぬ数日後、30人ほど集まってのお疲れ様会が行われました。まずは昆野さん、木村さん、ちっちさんによる簡単な挨拶の後、あちこちでにぎやかに会話が弾みます。しばらくするとSさんが『空中路地』の口演を始めたことにみんな驚きながら観覧し、最後にひとりずつ感想を話しました。「紙芝居の作り方がリレーのバトンタッチみたいで、どうなっていくかわからないわくわく感があった」「鳩の街編の取材・編集に参加したけれど、あの話がこんな紙芝居になって驚いた」「墨東文庫自体が木村さんから始まり昆野さん、ちっちさんと、人とつながることで進化しているので、次はどうなるのか楽しみ」など。これを聞いていた店員さんからも突然、「紙芝居なんて55年ぶりくらいだけどいいもん見せてもらった。ポスター貼るのでもなんでも協力するから言ってくれ」という言葉をもらったことが、これまでの墨東文庫を象徴するあたたかい出来事に思えました。

STORY | 紙芝居になった墨東文庫



『井戸水大冒険』（『群青』より）

絵・文：ワークショップ参加者

ここは、東京都墨田区向島。小さな井戸がたーくさんあるまち。ここに、一人の少年がいます。少年の名は「みずお」!! みずお君はこの小さな井戸が大好き―。井戸の水道網にはいりこんだ少年が、商店街の色々な人や場所を巻き込んで冒険する物語。

『空中路地』

絵・文：ワークショップ参加者

ここのまちの子どもたちに靴はいらない。なぜ？ どこへ行くにも、窓から窓へひとっとび。僕たち子どもには、大人に見えないヒミツの通路がある―。窓をつたって友だちと時空を越えた様々な場所へ行き、友だちや料理を家に持ち帰るハートフルストーリー。

『そらの木』

絵・文：木村健世

隅田川と荒川に挟まれた三角形のまちの片隅に、おじいさんが営む一軒の古びた写真店がありました。「大きなタワーがこのまちにできるらしいのぅ」―建設中のタワーを写真に収めるおじいさんの夢の中には、楽しくも切ない思い出がたくさん詰まっていて…。

『墨東黄譚』（『夕暮れのバナナ』より）

絵・文：ちっち

とある下町のバー「ねぇ、買ってぇ」「昔はプラダじゃなくバナナだったんだ…」やんちゃに遊びまわった少年時代。かつて路地裏の奥には子供達が踏み入ることを禁じられた世界があった。色鮮やかなタイル壁の家々。ひとりの少女と出逢う物語の行方やいかに…？

Network Project｜2012（特別企画）

私たちがおすそわけできること

あをば荘の人々

文＝金善美＋本村恭子＋編集部

2012年10月にオープンした墨東エリアの新たな拠点〈あをば荘〉によるデビュー企画。集合住宅の一角を借りてリノベーションを始めた段階から、ご近所さんに話しかけられたり、いろいろなものをもらったりした経験がきっかけとなって、「おすそわけ」をテーマにした企画が生まれました。単にあをば荘を見てもらうだけでなく、地域の新参者としてこれからご近所さんとどう関わっていくのか、そもそも人や地域と関係を結ぶとはどういうことなのかを話し合ってみたい。こうした趣旨の下、会期中は無休で、リノベーション後の空間を生かした展示や演劇上演などの参加作家による企画を中心に「ご近所付き合い」について考えるピロートークやご近所さんをゲストに招いた『ご近所ラジヲ』など多様な参加型企画が行われました。

SPOT｜あをば荘

墨田区文花の静かな住宅地、店舗と住居を合わせた2階建ての集合住宅の一角に〈あをば荘〉はあります。1階は家賃を共同に分担する8人のメンバーたちが美術や演劇、農業などそれぞれの関心に基づく企画を考え発表する展示スペースで、2階はシェアハウスとして使われています。設立のきっかけは、このシェアハウスの住人である佐藤史治さん・安藤達朗さんがそれぞれ墨東エリアのアート活動に参加したり見に来たりしたことでした。安い家賃、アート活動に関わる人のネットワーク、密なご近所付き合いのあるまちの雰囲気に惹きつけられたふたりは墨東エリアで魅力的な物件を見つけました。さらに「何か面白そう」「やりたいことができそう」とふたりの出身大学である筑波大学の同級生や後輩、明治大学の大学院生、東京藝術大学の学生が加わったことで、今のあをば荘が誕生しました。複数のメンバーが出費を共同に分担し、企画・発表の権利も同等に持つという「あをば荘システム（？）」も面白いですね。

あをば荘外観

あをば荘
所在地：文花1-12-12
建築的特徴：元1階店舗型集合住宅（長屋）の一角
主用途：イベントスペース・住居
開設：2012年10月
設立メンバー：佐藤史治、安藤達朗、石田由佳、岡野恵未子、亀海史明、輿水愛子、本村恭子
リノベーション協力：スタジオまめちょうだい
ウェブサイト：http://awobasoh.com

あをば荘内部

EXHIBITION | 佐藤史治＋原口寛子《SHOW ROOM》

〈あをば荘〉のリノベーション過程で記録した映像や音声を再構成したインスタレーション展示。何もなかった空き家が現在のあをば荘に生まれ変わるプロセスを見せつつ、これからの未来を摸索する内容となりました。ドアをガラガラーと揺らしながらリノベーションの映像を撮影していたとき、「あなたたち、何してるの？」と不思議な目で聞いてきた隣の理容室のHさんは、今もよく遊びにきてくれるご近所さんです。会期中は、昨日の出来事を再演する『昨日の今日』というパフォーマンスも行われました。

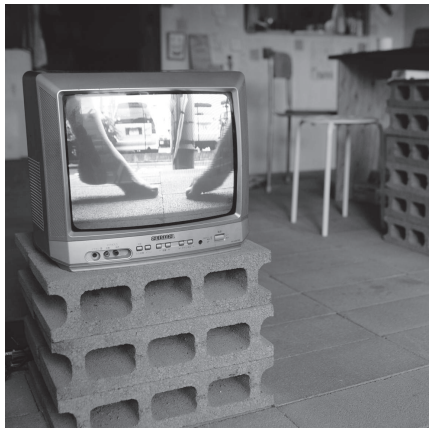
今回の展示の構想が芽生えたのは、あをば荘のリノベーションが始まる直前だったそうです。オープンにあたって「何か展示をやりたい」と思いつつも具体的な内容まではなかなか決まらず、「とりあえず素材を集めよう」と思ってリノベーションの様子を撮り始めたのが会期の3ヶ月前。先に映像素材があり、後からその使い道を考えるという、今までとは異なる制作手法で苦労も多かったようですが、結果的にはリノベーションの記録を通して自然とあをば荘の過去と現在、未来を見通すことができる、オープンにふさわしい企画となりました。

—

佐藤史治＋原口寛子 | Fumiharu SATO+Hiroko HARAGUCHI

お互い個人でも活動しているふたりが2011年7月に結成したユニット。以来、遊びや習癖をベースとした映像インスタレーションの制作を行っています。まち見世では、2011年に古民家を使用した展覧会《とくべつなあくび》(→P.121)でも参加。

ウェブサイト：http://satouharaguchi.tumblr.com



展示風景（1階）

展示風景（2階）

展示風景（階段室）

P.82 写真：藤田奈々子

EVENT | 小芝居集団コーンポタージュ《眠れない夜のねごと》

会期後半の毎週末、布団を敷き詰めた2階の居住空間を舞台に行われた演劇作品。パジャマ姿の役者たちが見せるコントの内容は恋愛、夢と現実、スカイツリーまで多様で、20人規模の小さな客席は爆笑したかと思えば時々しんみりしたり。もともと劇場以外の場所で公演することが多いコーンポタージュですが、主宰で演出担当の石川カズキさんが大事に考えるのは、その場所で行う必然性。今回もあをば荘のリノベーション作業から参加し、銭湯に行ったり近所の人々と会話したりするなど、墨東エリアという場所に合った内容や演出を工夫しました。同じく場所にこだわりながら作品作りを続けている劇団「トリのマーク（通称）」に続き、墨東エリアの楽しみがもうひとつ増えそうな予感です。

—

小芝居集団コーンポタージュ | Short Conte Company CORN POTAGE

筑波大学人形劇団の有志により2005年に結成された劇団。人形や映像、iPhoneなど多様なツールを活用した小芝居（コント）を制作・発表している。劇場のみならず、ギャラリーや一軒家、ライブハウスなどでも公演を行っている。

ウェブサイト：http://www.conpota.com

公演風景

観客もパジャマを着て楽しんだ特別公演『下町パジャマナイト・コーンポタージュを飲みながら』

オープニングパーティー（おひろめ会）

佐藤史治＋原口寛子の作品が展示される中、あをば荘に関わるメンバーによる挨拶や自己紹介があり、パーティーの傍らでは「ご近所ラジヲ」の収録も行われ、これから約1ヶ月の会期の間に起こる出来事を予感させるものでした。そして、この日振る舞われた料理のほとんどは、あをば荘が入居している集合住宅「青葉荘」の人たちからの「おすそわけ」でした。ご近所さんからの美味しくて心温まる手料理とともに、和やかで賑やかな時間を過ごすことができた、あをば荘にふさわしいおひろめのときでした。

ヒガムコ夜の部

EAT&ART TAROさんが企画した東向島珈琲店での連続トークイベント（→P.126）のゲストとして、あをば荘の安藤達朗さんが出演しました。美味しいお酒や食事とともに始まったトークは、訪れた人たちとの対話形式で、あをば荘を始めた経緯や現状、これからの展望の話が進みました。あをば荘に興味を持ってくれた方々はもちろん、安藤さん自身にとってもあをば荘について考える良い機会となったようです。「日々の出来事をまるごと受け止める」というあをば荘の活動のスタンスを共有することができた夜でした。

オープニングパーティー（おひろめ会）

ヒガムコ夜の部

ご近所ラジヲオンエア中のサインボード

ぼくらのチャブ台・イン・あをば荘

ご近所ラジヲ

ぼくらのチャブ台・イン・あをば荘

同じネットワークプロジェクト参加企画でもある、『ぼくらのチャブ台（ボクちゃぶ）』（P.124）をあをば荘でも開催。座談会のように人々に自由に集まってもらい、その場の会話や映像をインターネットで放送しました。「おすそわけ企画」というテーマで、集まった20人以上の人々とあをば荘でやりたい企画についての話に始まり、日常でのおすそわけ実践まで話は縦横無尽に拡がり、楽しく濃密な2時間となりました。

ご近所ラジヲ

「ご近所の人たちとラジオ放送を行う」というコンセプトによる、あをば荘の継続的な活動のひとつです。近所の人が、「芸術」をテーマにパーソナリティーを務め、あるときは、お隣の理容室の奥さんが「恋」について語ったり、また公開収録として、大学の先生をゲストに「ご近所づきあい」や「おすそわけ」について、町内会システムや腐女子の視点で話した、様々な話がラジオ収録されました。大きな枠組みをあえて作らないことによるのびのびとしたトークがご近所ラジヲの魅力のひとつです。

COLUMN | あをば荘はじめて記／本村恭子

どんな出来事にも「はじまり」があるように、〈あをば荘〉も様々な道のりを経て、誕生しました。ここではあをば荘のメンバーでもある編集部の本村が、あをば荘がはじまるまでの出来事をご紹介します。

—

墨東に自分たちのスペースがほしい

設立メンバーの佐藤くんが墨東エリアに関心を持ち始めたのは、向島にあるスタジオ・シェッラハルの栗原さんのお誘いから、2011年度のまち見世に佐藤史治＋原口寛子として参加したのがきっかけでした。また、安藤さんもこの企画を通じて、まち見世や墨東エリアについて知ることとなります。その後、自由に表現できる場所を作りたいと意識するようになったふたりは、大学の先輩であるfloatの吉川さんから周辺のアート活動の話を聞き、あをば荘の立ち上げに乗り出しました。ふたりはちょうど新しい住居も探していたことから、大学の同級生や後輩、メンバーの知り合いを誘い、住居兼共同スペースを作ることに決めました。どのような空間にしていきたいのか、それぞれに意見交換を重ねました。「せっかく拠点を構えるのであれば、のびのびワクワク、楽しく企画や発表ができる場所にしたい。」近い将来に向けて、夢が膨らむメンバーともども、活動開始です。

—

物件を見つける

まずは栗原さんと吉川さんの案内のもと、物件を探しました。墨東エリアは、私も含め多くのメンバーにとって初めての土地でした。商店街で食事をして、雑貨を買うなど寄り道をしつつも、路地裏を散策する中で下町風情溢れる雰囲気に惹かれていきました。決めた物件は、吉川さんが前から注目していた建物。集合住宅としての佇まいが面白く、また立地

物件探し

リノベーションの様子

もこれまでの墨東エリアのアート活動から少し離れた新しいエリアで、メンバーも気に入りました。

—

リノベーション

6月頃から物件を借り、7月から9月末の間の週末を中心にリノベーションを行いました。今回は即興的な要素が強く、共同作業を通じて自由に製作しました。当初は、吉川さんら「スタジオまめちょうだい」の協力のもと、メンバーのみで進める予定でしたが、実際には、まちの人たちも手伝ってくれるという嬉しい出来事が起きました。中には、作業に毎週参加し、後に「ご近所ラジヲ」に出演して、パーソナリティーを務めた人もいます。作業中に通りがかりの人たちが覗いていくこともあり、存在を知ってもらういい機会にもなりました。リノベーションやこのエリアでの活動が、墨東エリアに関心を持っている人たちへの新しい刺激となり、この場所での活動に繋がってくれれば、と吉川さんは話していました。

—

ご近所付き合い

リノベーションの最中、メンバーのひとりが近所になっていたゴーヤを眺めていたところ、お隣さんが外に出てきて会話が盛り上がり、ゴーヤをもらうことになりました。現在も続くご近所づきあいのはじまりです。お菓子や食べ物のおすそわけをもらったり、1階で作業をしていると声をかけられたりすることもしばしば。実際の生活や活動を通して、ご近所づきあいの密度の高さを感じます。また、同じ墨東エリアで活動しているオルタナティブスペースの運営者やアーティストとの日常的なご近所づきあいも、この土地の特徴です。まち見世のメイン会期前後に開催される企画会議への参加を通して、新参者である私たちもその幅を広げていくことができました。会期前には、熨斗（のし）袋に見立てた《私たちがおすそわけできること》のフライヤーとともに、あをば荘のロゴが入ったタオルを持って、ご近所の皆さんに引っ越しの挨拶へ行きました。ここで周辺の人たちにあをば荘がどのような場所で、どんな人が住んでいるのか知ってもらうこととなり、メンバーも同じ集合住宅にあるお店を利用するなど、顔馴染みとしての関係が形成されていきました。

—

おひろめ会（オープニングパーティー）

イベントの準備に協力してくれた人たちへの感謝を込めて関係者へ向けて行うパーティーではなく、多くの人々へのおひろめを兼ねてオープニングパーティーを開きました。当初は同じ集合住宅の居酒屋さんへ料理を注文し、メンバーが手料理をふるまう予定でした。しかし、引っ越しの挨拶等のおかえしとして、他の住人の方たちから料理の差し入れをもらい、おすそわけの料理でパーティーを開くことができました。まち見世の関係者のみなさんをはじめ、あをば荘の立ち上げ時から協力してくださった方たちが出席され、会場内に人が入りきれないほどの大盛況で、メンバーともども感慨深いものがありました。

—

新しい場所で一から関係性を作るのは難しく、時には勇気が必要なことかもしれませんが、時に考え、時に流れに身を任せることで、少しずつあをば荘らしさをこの地で根付かせることができたらと思います。生まれたばかりのあをば荘、これからアートに限らず、様々な分野で新しい企画に挑戦していきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

あをば荘とメンバーたち

DATA | 実施データ

プログラム名：私たちがおすそわけできること
企画者名：あをば荘の人々
会期：平成24年10月19日（金）～11月25日（日）
会場：あをば荘（文花1-12-12）

佐藤史治＋原口寛子《SHOW ROOM》
会期：平成24年10月19日（金）～11月25日（日）

小芝居集団コーンポタージュ《眠れない夜のねごと》
実施日：平成24年11月3日（土・祝）・4日（日）・10日（土）・11日（日）・17日（土）・18日（日）・23日（金・祝）・24日（土）

関連プログラム：オープニングパーティー（おひろめ会）
実施日：平成24年10月21日（日）

関連プログラム：ぼくらのチャブ台・イン・あをば荘（ぼくちゃぶ×ご近所ラジヲ）
実施日：平成24年10月27日（土）

関連プログラム：アートと地域のピロートーク（仮）
実施日：平成24年11月9日（金）
ゲスト：清水永子（墨東まち見世事務局/「楽の会」代表）、寺門陽平（キワマリ荘運営メンバー）

関連プログラム：ご近所ラジヲ 公開収録
実施日：平成24年11月11日（日）
ゲスト：石田喜美（常磐大学専任講師）ほか

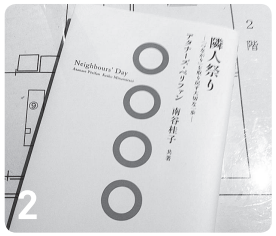
関連プログラム：ヒガムコ夜の部（ゲスト出演）
実施日：平成24年11月20日（火）
会場：東向島珈琲店

挨拶用の「熨斗」にもなるデザインのフライヤー

DATA | おすそわけ12選

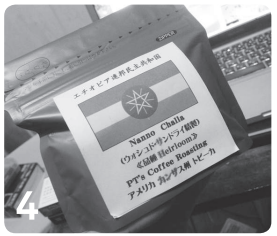
《私たちがおすそわけできること》のテーマであり、あをば荘ができるまで、そしてできてからも日々、様々なかたちで生まれたあをば荘への「おすそわけ」の数々をご紹介します。

ご近所さんからの多肉植物



企画の参考になりそうな本

隣りの理容室からいただいたマンガ



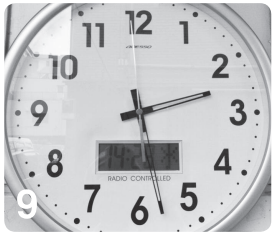
不動産屋さんからのコーヒー豆

友人の家にあったお茶

おにぎり

もらいタバコ

折り紙の技術



理容室の入口にかけられた時計

クリーニング屋さんで病院を教えてもらう

オープニングパーティーの品々

近所の友人から引越祝い

Network Project｜2012（特別企画）

「どこにいるかわからない」展

下平千夏＋大橋加誉

文＝及川裕子＋横田伶未＋編集部

八広地区にあるアトリエ＆展示スペースを運営するアーティスト下平氏と地元住民の大橋氏によって立ち上げられた企画。ふたつのアートスペースをメイン会場として、その道中の空き家や空き地、路上などを繋ぐようにして作品が展示される展覧会で、若手アーティスト9名が参加しました。展覧会期前には滞在制作期間が設けられ、アーティストたちはプロセスを公開しながら制作活動にあたりました。展覧会期間には、地図や作品解説の記載されたリーフレットを手に歩く鑑賞者の姿が見受けられました。関連プログラムとして、まち歩きやアーティストトーク、ゲストを招いてのトークなども実施され、まちの歴史からアーティストの社会的現状に至るまで、様々な視点で墨東と現代アートの理解を深める機会となりました。

PERSON｜下平千夏＋大橋加誉

下平千夏｜Chinatsu SHIMODAIRA

1983年、長野県生まれ。2007年に武蔵野美術大学の建築学科を卒業するも、美術を志して東京藝術大学大学院（修士課程先端芸術表現専攻）へ進学。大学院の同輩等とともに墨東エリアで〈SOURCE Factory〉を構えたのをきっかけにまち見世にも例年参加してきました。町工場が点在するものづくりのまちに刺激を受けながらアーティストとして制作活動に励み、まちから何か受け取るばかりではなく、自分たちの表現をどのようにしてまちの人へ届けられるか、といったことも真剣に考えています。与えられた場そのものを作品化することを得意とし、これまでにも空き家、廃校のプール、倉庫跡地などで作品を展開。全国の様々な地域で活動しています。

大橋加誉｜Kayo OHASHI

東京都墨田区で生まれ育ち、まち見世がはじまる直前から、向島百花園近くの古い木造一軒家に猫とともに住んでいる自称・普通のOL。絵が好きだったことから、鳩の街通り商店街で画家のアトリエとして使われていた鈴木荘に興味を持ち、〈アートスポット鳩や〉で滞在制作をしていた三宅航太郎の《向島おしょくじプロジェクト》に参加。地元に住む同世代のサポーターとの出会いや、まちに根ざした作品への興味から地域の魅力にも目を向け、様々な形でアーティスト等とともに活動することになります。まち見世にはサポーター（2009）、事務局（2010）、企画者（2011、2012）として参加。2010年より、3月9日前後に一斉にイベントを行う〈39アート in 向島〉を自ら周囲の人に参加を呼びかけて実施しています。

下平さん（左）と大橋さん（右）

SPOT | 現代美術製作所

かつてはゴム製造加工メーカーの工場として、長年使用していた建物をリノベーションしたアートスペース。まち見世事務局のひとりである曽我氏がディレクターを務め、大岩オスカール、タムラサトル、三田村光土里、パルコキノシタ、開発好明、KOSUGE 1-16、池田晶紀、増山士郎、タノタイガら、キャリアを問わず実力のあるアーティストの活動を紹介し、墨東におけるアート活動の発信源を担ってきました。まち見世においても、藤井光展(2009)、KOSUGE 1-16展(2009)、谷山恭子展(2012)が行われたほか、ネットワークパーティーや企画会議の会場として使用されることもあり、欠かせない拠点となっています。また、墨東エリアでは恒例となってきた〈39アート〉への参加を先駆けて行っています。

現代美術製作所
所在地：墨田1-15-3
建築的特徴：元電気安全用ゴム製品工場
主用途：ギャラリー
開設：1997年10月
運営者：曽我高明(ディレクター)
ウェブサイト：http://www.c-a-f.jp

SPOT | SOURCE Factory

八広地区にあるアトリエ＆展示スペース。かつてのソース(SAUCE)工場兼住居であり、長らく空き家とされていた建物を、現代美術作家である上田尚宏・下平両氏が改修し、SOURCE([名] 根源、期限)を制作・発信していく場としてオープンさせました。2階建て(＋屋上)の建物で、まちに馴染むように佇んでいます。基本的に、制作活動はかつて工場だった空間で、展示は住居とされていた空間で行っています。オープン当初は2名であったメンバーも今では6名になり、様々な作家が活動を行うオルタナティブなスペースとなりました。まち見世での参加企画のみならず、不定期での展示活動なども随時行っています。

SOURCE Factory
所在地：八広1-39-18
建築的特徴：元ソース工場
主用途：アトリエ
開設：2009年1月
運営者：下平千夏
ウェブサイト：http://sourcefactory.web.fc2.com

EXHIBITION | 展示作品

内海昭子《Untitled Fiction》
現代美術製作所
まるで本当の部屋かと思わせるような空間が作られ、その部屋の中には窓とカーテン、そして座って眺めるための椅子。窓の向こうには美しい自然が映像で投影され、時間とともにその景色が動いていることに気付かされるインスタレーションを行いました。カーテンも風に揺られ、まるで本当に外の景色を眺めているかのような感覚に。「部屋という空間内における感覚の歪みを提示する」(内海)ことで、「どこにいるかわからない」感覚をおぼえる作品でした。

—

西岳拡貴《Fall map ~area SUMIDA~》
現代美術製作所
墨東エリアの街灯の下に水をまき、その水に反射した光を撮影し、地図上に落とし込む行為。そうして得られた光の集合体は、この地域の形を浮き彫りにします。彼の活動は、美術を「純化」する行為であり、「美術が美術とよばれる以前のさまざまな原初的なものごとの驚きや起こりとはなんなのか」を探る試み。作品を通して、このまちの新しい見え方を提示しました。

—

太田祐司《かれの居場所》
現代美術製作所
嘘自体を作り出して、それを現実のように表出することで、嘘なのか本当なのかという問い自体の無意味さや、真偽に対する価値観を揺るがす太田氏の作風に違わず、今回も嘘／本当をテーマにした作品。作家本人が地元の床屋で散髪をし、従業員と「恐竜の幽霊を見た」という嘘から始めた会話を録音。それを店舗の外観映像や恐竜の化石のようなオブジェとともにインスタレーションするという内容でした。

内海昭子《Untitled Fiction》

西岳拡貴《Fall map ~area SUMIDA~》

太田祐司《かれの居場所》

木村泰平《Round1》

SOURCE Factory

部屋に入ると、積み重なった壊れた家具やテレビ。横ではそこに至るまでの破壊の過程を写した映像が流され、以前の姿から現在の姿に至るまでの経緯を見ることができました。老朽化した木密地域のまちの風景から着想を得た印象を鑑賞者に与えるインスタレーションで、家の物理的な構成要素から、家ではない別の形相を立ち上がらせる試みがなされました。

—

有賀慎吾《Pole Pieces 2012》

現代美術製作所、SOURCE Factory、路上

「ポールは作品を設置するためにそこにある」と思い込んでみるところから自作のオブジェを路上のポールに設置していくというもの。雨風の影響で壊れかけたオブジェの中には住民の方から「痛いよ!」と書かれた札をつけられていたものも。突如まちの中に現れた異物的なオブジェに対するまちの人の反応も見られる作品でした。会場では、作品のラフやオブジェ設置をめぐる交渉過程の映像を展示しました。

—

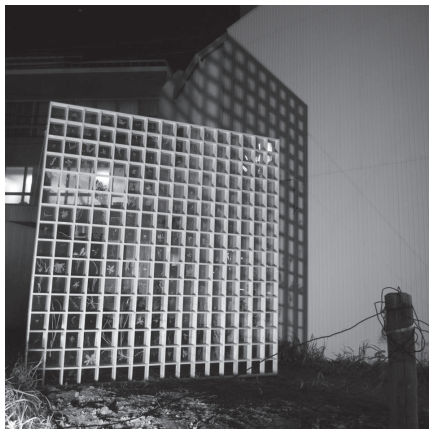
戸井田雄《認識／Being》

空き地

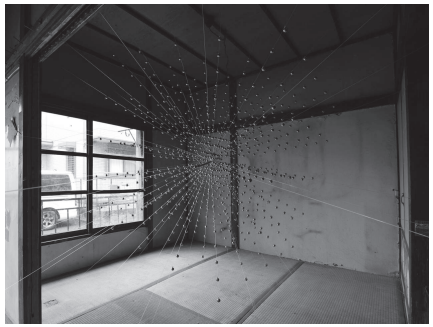
空き地に生えた雑草を素材に大型のオブジェを制作。格子状に組まれた木枠のひとつひとつに種類の異なる雑草を置き、押し花のように封じて展示しました。場所が幹線道路のバス停前であったこともあり、作品を眺めてはパンフレットをとる人の姿も多く見られました。「幼い頃には何でも『あった』空き地は、いつからか何にも『ない』場所になった」と話す戸井田氏。普段あまり意識しない「空き地」や「雑草」が鑑賞の対象になった作品でした。

木村泰平《Round1》

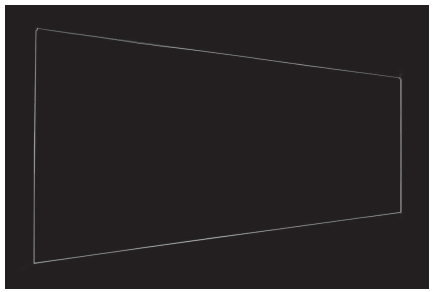
有賀慎吾《Pole Pieces 2012》©栗原汐里



戸井田雄《認識／Being》



下平千夏《風がとほりぬける》©北村光隆



下村千成《sightseeing room》©北村光隆

田原唯之《最も関わりのある場所》©北村光隆

下平千夏《風がとほりぬける》

みどり荘

八広地区にある長く使用されていなかったアパートの1階部分を使った作品。割れた窓ガラスや隙間のある壁、閉まり切っていない扉…機能を失い、時間が止まったかのような空間を放射状に貫くようにしてワイヤーが広がり、そこに付けられた無数の鈴が、今にも鳴り響き出しそうなインスタレーションでした。日が暮れると室内の灯りとともに存在感を放ち、窓越しに道行く人の目を惹きつけていました。

—

下村千成《sightseeing room》

犬屋敷

今後カフェなどイベントスペースへとリノベーション中の建物で、かつての住人と当時の家の様子が映された8mmフィルムを編集した映像投影と、鳩小屋だった3階の空間そのものを作品化。暗室に仕立てられた3階に上がると、床・壁・天井まで引かれた光の直線だけが目に飛び込んできます。どこまで足を踏み入れることができるのか…室内では知覚を揺るがされた鑑賞者たちの声が響いていました。

—

田原唯之《最も関わりのある場所》

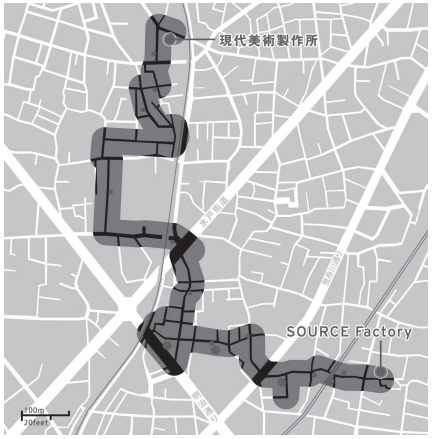
山崎貸家

空き家1階の天井をぶち抜き、地域で集めた不要な家具を2階の天井近くまで高く積み上げたインスタレーション。それら内部からは水が溢れ、部屋全体を使った空間演出がなされました。びっしりと積まれた家具は、それを用いていた人の暮らしの気配を漂わせ、その隙間から流れ出る水が、主を不在にした部屋からその不気味にも思える空気をどこか別の居所へと誘うような印象を与える作品でした。

どのような経緯でふたりで企画をすることになったのでしょうか

下平｜SOURCE Factoryをオープンして皆で墨東に来るようになった時から、まちを使った展覧会を、このいわゆる東京の下町でやったら絶対面白いと思っていました。地方のアートプロジェクトではいろんな形でやっていたけど、東京でやってみたいという気持ちがありました。でもまち見世が始まって、自分たちで仕掛けなくてももっと大きな動きがあることを知りました。4年目を迎えてまち見世が節目の年になり、当初と変わってきている状況に対して思いがありました。企画や参加者がどんどん増えていく一方で、アートというものが100日プロジェクトくらいにしか必要ない、という雰囲気が出てきている気がします。まち見世が始まった2009年の空気みたいなもの、アーティストが来て、まちをいきなり掘り返しちゃうみたいな感覚は絶対必要だと思う一方で、無くてもいいものでもある気がしていて。

いろんなタイミングが重なって、私たちのことをまち見世初年度から知ってくれている大橋さんや曽我さんに相談しました。大橋さんは「今年は何もやらないつもりだから、手伝いますよ」と言ってくれて、そこから始まりました。でもやるのにはいろいろな条件をクリアにしなければいけなくて、それが整理できていなかったので大変でした。何がいちばんやりたいのかとか、助成金も取りたいとか。お金はだめだったのだけど、それもとても勉強になりました。



現代美術製作所とSOURCE Factory間のルート

大橋｜まち見世も最近だと新しい人たちが活発に動いていて、昨年度に関しても私の出る幕はないかな、という感じでした。でも、まちの人との共働とか直接的なコミュニケーションを目指すものだけではなく、何かしっかりした表現だとか、予想外のものを見たい、仕掛けたいという思いはあって、結局KOというペンネームで小説を用いた企画を自分でやりました。今回、千夏さんとこの企画をやるにあたりお互いの考えを初めて話し合ったのですが、共感するところが多くて。私たちはそれぞれまち見世に対して違う距離の取り方をしていたけど、同じタイミングで同じようなことを感じていたような気がします。同じようにまち見世の動きを最初から知っている人だからできる話とか、心の開き方もあったと思います。

—

作品の展示場はどのようにして決めたのですか

下平｜ルートの始まりのメイン会場として、現代美術製作所とSOURCE Factoryは最初から決めていました。メイン会場それぞれをスタートとして、散漫としている会場をルートでつなぎ、それらを繋ぐカチッとした動線を作ることで、まちの中をゾーニングして、見えない空間みたいなものをそのエリアに起き上がらせたいと思っていて。その範囲内にある空き家や空き地で借りられるところを、まち歩きをしていろいろリサーチしました。時間が全然なくて、夜も歩きました。そこで出てきたのが今回の場所です。メイン会場の他に建物を3ヶ所、空き地1ヶ所という結果になりました。

大橋｜みどり荘は2010年から大家さんとのお付き合いができていたので、今回も相談して使わせていただきました。犬屋敷はオーナーが京島でバーをやっている知人の方だったので早い段階で押さえてもらって。戸井田さんの空き地はリサーチで見つけました。周辺住民の方々から大家さんを聞き出して、訪ねてみたら使わせてもらえることになりました。もちろんここにたどり着くまではいろいろあって、すごく魅力的だけど駄目だった空き地もありました。山崎貸家はリサーチ段階から見つけていましたが、当初はまだ本当に必要としてはいませんでした。ふたつのメイン会場・みどり荘・犬屋敷・空き地これらが出揃ったときに田原さんが「やりたいことが実現できる、新しい会場を探したい」と相談してくれて、ずっと気になっていた山崎貸家に交渉に行った、ということがありました。

—

実際にトライしてみて印象的だったことがあれば、教えていただけますか

下平｜犬屋敷では、会場を地元の人が楽しめるように作ってくれていて、休憩所にもなったし、ありがたかったです。下村さんの作品も期待以上の完成度で、展覧会の中のキーになりました。最初彼女は現代美術製作所を希望していたので、会場が犬屋敷に決まったときに、心配をしていました。会期中、オーナーさんとの運営などのやり取りも任せているところがあったので、本当に大変だったのだと思います。そのような苦労以上に、反響が大きかった気がします。見にきてくれた人は衝撃を受けて帰ってくれました。私が展示したみどり荘の反応でも、かなり面白くて。元々30年位は暗くて、廃墟状態みたいな建物だったので。そこにいきなり電気がついて、女の子がひとりで作業しているから、地元の人はとにかくすごいびっくりしていました。廃墟のような場所に入ることで近所の人の日常が少し変わった気がします。

展示会場となったみどり荘

大橋｜田原さんの展示会場の山崎貸家には、地元のご老人たちがみんなで誘い合って見にきてくれました。そういう方々が、有賀さんが作った目玉の作品などを素直に面白がっていて、これが芸術か、みたいな感じで。拒否反応が意外とそんなに無かったという印象でした。まち歩きを作家さんと出会えるようにセッティングして、生の声で案内してもらうようにもしました。

下平｜まち歩きをすることで公開制作が見られる機会をつくったので、地元の人やたまたま来た人に見てもらえたならいちばんうれしいと思っています。

平成24年12月26日 曳舟にて収録

DATA | 実施データ

プログラム名：「どこにいるかわからない」展
企画者名：下平千夏＋大橋加誉
アーティスト：有賀慎吾、内海昭子、太田祐司、木村泰平、下平千夏、下村千成、田原唯之、戸井田雄、西岳拡貴
滞在制作期間：平成24年10月19日（金）～11月9日（金）
展覧会会期：平成24年11月10日（土）～25日（日）
会場：現代美術製作所とSOURCE Factoryをメイン会場とした、その2点を繋ぐ道中の空き地、空家等
企画協力：栗原汐里、杉田香純、長友人、平野昌太郎、北條元康、吉成隆、アトリエ犬屋敷、現代美術製作所、SOURCE Factory、株式会社富士、みどり荘、村田商事、山崎貸家

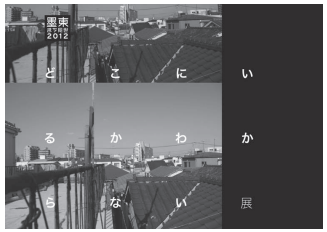
まちあるき
実施日：平成24年11月3日（土・祝）、18日（日）、25日（日）

オープニングパーティー
実施日：11月10日（土）
集合場所：SOURCE Factory

ゲストトーク「現在地を探るVol.1,2」
実施日：平成24年11月16日（金）［Vol.1］、23日（金・祝）［Vol.2］
会場：現代美術製作所
ゲスト：五十嵐太郎（東北大学大学院工学研究科教授）、真野洋介（東京工業大学社会理工学研究科准教授）［Vol.1］、小川希（Art Center Ongoing 代表）［Vol.2］

アーティストトーク「アーティストの現在地」
実施日：平成24年11月18日（日）
会場：現代美術製作所

「どこにいるかわからない」展 フライヤー



会期中に配布されたリーフレット

VOICE | 展覧会によせて

向島の街並みは、国内でも類を見ない繊細な道と狭小建築群により構成されている。都心郊外地であった向島は、かつての都市開発（基盤整備や区画整理）の恩恵を受けず、田畑であった土地にそのまま工業化の波を受け入れた。畦道や、無秩序な建物の隙間がそのまま道となった特異な景色には、都市開発による公私を明確に隔てる境界線が生まれなかった。曖昧な境界線は、ここに住む当事者たちにしか把握できない、流動的で多様な人付き合いのカタチ「寛大さ」を生み、街並を作っていった。
しかし現在、再開発で訪れる新しい住民たちとの関わり、インターネットが生む新しいコミュニケーションの浸透、いつかくる災害に対応できない地域という現実による新たな再開発の流れにより、変化する街並と共に「寛大さ」は姿を消しつつある。
芸術はこの街の曖昧な境界線を露にする役割を担っている。鑑賞者は本展覧会を通じこの街に迷い込む。作品達を介して様々な境界を経験し、変化そのものに立ち会うだろう。長い時を経て残されてきた「墨東の道」に今を映し出すアートが並立することで、日常の時の切端に鮮やかなシークエンスを焼き付けたい。まるで地形を這う様に導かれ、作品達と共に曖昧な境界線上を彷徨う時に、変化の途上、どこにいるかわからない「今」を発見する。

下平千夏

今回の展覧会タイトルは、「どこにいるかわからない」。
この「どこにいるかわからな」さは、ここ数年で急激に変わっていっているこのまちの現状のことでもありますが、一方で、現在の自分、世代、わたしを取り巻く社会、時代を俯瞰したときの「どこにいるかわからな」さでもあります。しかしそれはごく個人的なものなのか、多くの人が感じているものなのかわかりません。
まちなかで作品を作る／観ることは、その「場所」と「瞬間」をポイントするものだと思っています。わたしはこの「まち」の「今」をポイントすることに必要性を感じています。それは「まちのため」ではなく、わたし達の未来のためです。
それをすれば、この「どこにいるかわからな」さをもっと仔細に捉えることができるのかもしれない。現在地を確かめることができるのかもしれない。これはわたしの漠とした「どこにいるかわからな」さに対する、ひとつの態度／反応であります。
この「ポイント」に立ち会ってくださったことに、感謝を込めて。

大橋加誉

※「どこにいるかわからない」展 リーフレットより原文のまま抜粋

Network Project｜2012（特別企画）

ロジ展「はためくわたしたち」

yahiro 8

文＝野村美里＋小室優＋編集部

八広4丁目にある住居兼アートスペース〈yahiro 8〉や周辺の中学校美術部・児童館・介護老人保険施設などでワークショップを開催し、参加者の手によって作られた旗を近隣の路地などに展示しました。ワークショップでは、ご近所の方にいただいた布などを再利用。参加者は選んだ素材で自分の名前の1文字をかたどって配置し、オリジナルな自分の旗「マイ旗」を制作しました。これらが随時増えるなか展開された『マイ旗展示』では、色とりどりの旗が路地やお宅・お店の軒先を飾りました。展示最終日に実施したまち歩きでは、旗とともにご近所の紹介が行われるなど、素材集めから展示に至るまで、日頃からご近所付き合いを大事にするyahiro 8ならではの企画でした。

〈yahiro 8〉とは、2010年秋より八広で活動している、元町工場を改装した住居兼アートスペースの名称で、そこに暮らすおふたりのユニット名でもあります。ダンスアーティスト・ヨガインストラクターのオカザキ恭和さんと、広告デザイナー・イラストレーターの木村吉見さんのご夫婦が2008年より移り住み、暮らしながら自分たちの手でスペースを改装しました。土間や梁など建物が元々持っていた特徴を活かしながらも、板の間を張る範囲、壁を塗る範囲や色、棚の残し方など、何をどこまで残し、加えるのかをひとつひとつ丁寧に考えて、個性が強く出過ぎないニュートラルな空間を作りました。平日にはオカザキさんのヨガ教室を定期的に開き、週末を中心に季節ごとに1回程度の頻度で、イベント・ワークショップ・レクチャー・展示などを開催しています。

—

オカザキ恭和｜Yasuka OKAZAKI

コンテンポラリーダンサーとして、近年は劇場空間だけでなく路地などを舞台としてダンス作品を制作しています。また、踊る身体をつくるために始めたヨガのインストラクターでもあり、拠点のyahiro 8でヨガ教室を開催。知的障害者のためのダンス指導も行っています。

—

木村吉見｜Yoshimi KIMURA

グラフィックデザイナー・イラストレーター。yahiro 8の2階を事務所として雑誌広告や編集ページ、パンフレットなど主に紙メディアを中心に活動中。まち見世関係では他にも、自転車部の部員、ドンツキ協会の理事としても活動しています。

yahiro 8外観（上）、yahiro 8内部（下）

yahiro 8
所在地：八広4-10-1
建築的特徴：元町工場
主用途：住居兼アートスペース
開設：2010年秋
運営者：木村吉見・オカザキ恭和
ウェブサイト：http://yahiro8.seesaa.net

まちで集めた不要な布地や革などを素材に、その場で「マイ旗」を作るワークショップをメイン会期中にyahiro 8で4日間実施したほか、まち見世案内所や近隣施設でも出張開催しました。ワークショップ初日。会場のyahiro 8にはやわらかくゆったりとした時間が流れていました。外からは近所の子供たちが走り回っている足音が聞こえてきます。木村さんとオカザキさんのリードのもと、参加者はおしゃべりをしたり、旗を作ったり。まるでまちの人たちが集まる公民館のよう。のんびりとした雰囲気とみんなの笑顔があふれるワークショップでした。

—

「マイ旗」の作り方

1. 自分の名前から1文字を選ぶ
   例：きむらよしみ → よ
2. ベースになる布地を選ぶ
3. ハギレを選んで文字のカタチに切る
4. 貼る

—

旗の素材はご近所の方からいただいた使わない布や革の廃材を再利用しています。「布は、近所の酒屋の常連さんから。たまたま衣装を作る方だったそうで、端切れをどんといただきました。」「革は、ご近所の革加工工場墨田キールさんから。廃材といってもサンプルで少しだけ色が合わなかった程度の上物の本革です。」（木村）などなど、地元に密着しているyahiro 8だからこそのご近所エピソードを聞くことができました。

ワークショップ時のyahiro 8

「マイ旗」づくり

旗に使われた素材

1｜八広はなみずき児童館

子供たちのストレートな発想がとても新鮮だったそう。「たとえば、ある子が両面テープを布に貼ったらシワの上をまたいで貼ってしまった。この両面テープはかなり強力。さてどうするか。大人はまぁ慎重に剝がそうとするでしょうね。さて、この子は、というと一瞬考えたあと、シワをまたいでいる部分のテープ下にハサミを入れてテープ自体を分断したのです。ハッ！としました。」（木村）

笑顔でくしゃくしゃになりながら語ってくださいました。

—

2｜吾嬬第二中学校美術部

オカザキさんのヨガ教室にいらっしゃったお客さんのつながりでワークショップを行うことになった通称「あづ2」美術部。文化祭が終わった時期で疲れているかと思いきや、簡単に旗のコンセプトを説明しただけで、既にみんなやる気満々だったそうです。目新しい革だとかフェイクファーだとか、素材が気になってしかたなかった様子。爆発して作ってください！

—

3｜墨東まち見世案内所

yahiro 8で行ってきたワークショップの流れもあってか、たくさんの人が参加してくれました。今回できあがった旗はシンプルなものが多い印象を受けました。会場が狭かったせいもあるのでしょうか？そういえば、できあがった旗にも、制作日や会場によって流行のようなものがあるとオカザキさんが言っていました。

「最初に旗を作った人とそれを見ながら作った人とで、何となく関係性ができる。まわりに誰かがいて、自然に関係性が生まれるような、社会にもよく似ている。それは旗を自分に重ね合わせているから。違う日に作ったら違う旗になる。」うーん、深いです。

その他、介護老人保険施設「龍岡会」でも出張ワークショップを行いました。

1｜八広はなみずき児童館（左）　2｜吾嬬第二中学校美術部（右上）　3｜墨東まち見世案内所（右下）

EXHIBITION｜マイ旗展示

1｜11月3日快晴・風良し。yahiro 8と周辺の路地などを使ったマイ旗展示が始まりました。前日から設置方法を考えてホームセンターで資材を購入。あたたかな日差しの中、無事第1段の設置が完了しました。111枚のマイ旗が気持ち良さそうにはためく様子に、前を通るご近所さんが物珍しそうな顔で見上げています。お祭かい？ 運動会かい？ 木村さんとオカザキさんの説明が始まりました。秋空の下、人も旗も笑っています。

—

2｜あづ2美術部の皆が制作したマイ旗。革の廃材で作った旗は、1枚の大きさが縦横1メートルもあり、バッサバッサとはためく姿は大迫力です。その威風堂々とした立ち振る舞いはまるで旗の王様のようです。日常ではなかなか見ることができない光景に、思わず見入ってしまいました。

—

3｜雨の日のマイ旗たちは、yahiro 8の1階スペースに一時避難です。室内は壁も天井も旗でいっぱいで、まるで異国のお祈り風景のよう。いつものyahiro 8とは一風変わった雰囲気が漂います。耳を澄ますと雨音が聞こえてきました。心地のよい自然のBGMは、なんだか旗たちの話し声のようにも聞こえます。ヒソヒソ話だったり大にぎわいだったり。明日のロジさんぽのことで盛り上がっているのでしょうか？

1｜yahiro 8周辺路地のマイ旗展示

2｜吾嬬第二中学校美術部のマイ旗展示

3｜雨の日に一時避難するマイ旗

EVENT｜マイ旗をめぐる旅。ミニロジさんぽ

1｜マイ旗がはためく「マイ旗ストリート」を散歩する、スーパーショートまち歩きは、雨による順延で展示最終日の実施となりました。屋内に退避していた200枚を越える旗たちがいっせいに路地へと飛び出し、溜っていたうっぷんを晴らすかのように勢いよくはためいていました。木村さんとオカザキさんの旗にまつわるエピソードを交えながらの楽しいさんぽが始まりました。

—

2｜八広はなみずき児童館分室には、児童館に通う皆が作ってくれた旗が並んでいました。5日後には運動会があり、今回作られた旗も会場を彩るそうです。yahiro 8から徒歩30秒のグランド湯。入り口の上にはためく旗には「い・い・ゆ・だ・な・あ・は・ん」の文字。完成した60枚の中から銭湯に合う楽しい言葉を見つけ出して並べてみたそうです。最終ポイントはご近所のオアシス？ 酒屋の茨木屋さん。ここも児童館の皆の名前から取りました。「さ・け・の・み・ニャ」とりあえず一杯いっとく？

—

3｜実は路地でのマイ旗、19日午後まで展示を1日延長していました。というのも、出張ワークショップを行った「龍岡会」の方々が路地にはためくマイ旗を観にいらっしゃるため。お天気がちょっと怪しかったのですが、時間になると雲間から太陽が顔を出しました。皆さん自分の旗がはためいているのをニコニコしながら見上げていらっしゃいました。龍岡会のおじいちゃん、おばあちゃん、ありがとうございました。マイ旗は、隣の旗と並んで単語になり、言葉になりました。路地の空ではためくたくさんのおしゃべりは、道行く人たちを笑顔にしてくれました。

1｜スーパーショートまち歩き

2｜酒屋「茨木屋」での展示

3｜「龍岡会」の方々が訪問

活動をはじめたきっかけは何ですか？

オカザキ｜元々、ダンスをしたり、ヨガを教えていたので、自分の稽古場が欲しいという想いが最初にありました。ある程度の広さがあり、家でもある場所があったらいいな、と。谷中にBrick-oneというスペースがあるのですが、1階がスタジオで、上は住居になっていて。そのスタジオで、何回か踊らせてもらったことがあり、暮らしとつくることが密接につながっているのは面白い、という経験がありました。それで自然に、自分の稽古場であり、作品づくりをする場であり、ある時はまちの人と何か一緒に作ったするような場所が欲しいと思っていました。

ちょうど2010年度のまち見世に合わせて、お披露目イベントを開催しました。オルタナティブスペースや、ギャラリー、スタジオなどを主催している知人を招いて『町の中のアートスペースについて考える』という座談会方式のトークイベントを開催したのが最初です。

—

これまでの活動や今回のロジ展の中で、大事にしていることはありますか？

オカザキ｜ここがまちの中にある、という意識は最初からありました。まちの人たちが気軽に来られるような場所にしたかったんですよね。たしか、最初の頃、ここが公民館みたいになったらいいな、と言ってました。公演をやったのは、2010年の《町影》（→P. 117）が初めて。この辺りでは、盆踊りで河内音頭を取り入れていて、錦糸町ではそのお祭りが盛大に開催されてます。面白くてノリがいいので、踊り子さんである近所の熟年おじさんに、一緒に作品の中で踊って欲しいと頼んで、下町や祭りを素材にしたダンスの作品をつくったんです。下町がテーマでしたが、暗転できるように暗幕を張ったのでクローズドな空間でした。オープンにしていた方が、通りすがりの人たちが覗いて見てくれやすいんですよね。

2011年の夏、本のアートを手がけている方と知り合い、10数ヶ所で展覧会をする「Tokyo Book Art Week」というのに参加しました。その時は、ちょうど夏だったこともあり、入口も窓もフルオープンにして、インスタレーションの中で踊るということを試みたんです。そうすると、やはりまちの人たちが、観てくれるんですよね「何やってるの？」って。それから、ここは土間だし、場所の特性も生かして外と中が交流する場にしよう、まちの人が関われる作品をつくろうって思うようになりました。その後、まちの人が作品に登場するということを最初に試みたのが、『ペタン道』（→P.119）。白いベニヤを床に敷き詰めて、土間も板間も真っ白にして、靴で入って路地だと思って通り抜けて足跡をつけてください、というコンセプトで。

木村｜スタンプ台みたいなのを入り口に置いて、ペタペタと自由に足跡を残してもらいました。僕たちが何かを作るのではなく。

オカザキ｜ちょっと仕掛けるという。その延長から今回の《ロジ展》でも、まちの人が関われる作品づくりということと、もっと外に出てみることを意識しました。外で旗がはためいてる、しかもその旗はまちの人が作ったものっていうのをやってみたかったのです。

—

今回でいえば中学生などとは、どのように接点を作ったのでしょうか？

オカザキ｜ヨガ教室をやっているので、ご近所の方が来てくれるんですが、話の中で「うちの息子が美術部で」とか、そんな会話から、中学校のPTAの企画で、お母さんのためのヨガ教室を1回だけやらせてもらったことがあるんです。そうやって、PTAの方や先生と少しつながりが出来ていきました。「まちの人」の中で最も分からない存在が中学生。大人でも子供でもないような不思議な存在のこの子たちの中に、例えば10年、20年経った時に、もしかしたら私たちのようなことをする子が潜んでるかもしれない。じゃあ思い切って先生に話してみようと。

オカザキさん（左）と木村さん（右）

木村｜一般的にアート的な活動をしていると、そこから抜け落ちてしまうような、絡みにくいような人たちっていると思うんですよ。高校生や中学生って、あまりこういう活動に参加してこなかったりとか。もっと小さい子はわーって入ってきたりするけど。小さいお子さんとか家族連れ、あと年配の方たちも入ってきてもらえるようなことができると、よりいいかなと思っています。

—

このまちに来てから変わったことはありますか？

木村｜ここに住むようになって、プライベート重視というか、外から見られない、聞かれないようにすることや、ガードすることは必要じゃないと感じるようになりました。

オカザキ｜例えばここを劇場のステージのように真っ暗にして何かしようとしても効果が薄い。家自体が木造だから、2階の窓もシャットアウトしないと難しいし、音も筒抜けなんですよね。閉じる意味ないよねって思って。自分じゃ操作できない環境、周りが自然に入り込んでくるってことが、逆にここの良さなのかな。

木村｜ここで作家さんにやっていただくにしても、この環境を豊かな要素のひとつとして取り入れていただく作品づくりの方がいいと思います。

オカザキ｜もともと人と会って話すのは得意ではないけれど…筒抜け感が強いせいか、この古い木造家屋で暮らしていると、皆さくっとドアを開けて入ってきたりして。このまちに住んでみて、今では気軽に声をかけられるようになり、だんだん人っていいなと思うようになりました。まちに暮らす人たちに影響されて変わってきたなぁ、と思います。

—

まち見世とはどのように関わっていますか？

木村｜行き詰まっているときほど話し合いに参加すると、ヒントがもらえたり、新しい発想がでてきたり。みんなと話ができる場は大切ですね。企画はそれぞれでも、いっしょに動いている感じになれるのがいい。他の人の企画には、できるだけ行きたいのですが、自分たちが山場のときだと、行けないときも…。忙しいときの集まりにはどちらかが顔を出して報告しあったりしています。まち見世の企画会議は、下町の縮図的、井戸端会議的な感覚で参加できるというか。あれやこれや状況や意見を聞きながらゆっくり進んでいくのは、なんかいいですね。困っていると、誰か手助けしてくれるような風土もあって。そういうやわらかい会議の場が、まち見世や、企画に参加するひとたちを自然と育ててきているんじゃないかな。

平成24年11月17日 yahiro 8にて収録

DATA | 実施データ

プログラム名：ロジ展「はためくわたしたち」（マイ旗展示）
企画者名：yahiro 8
会場：yahiro 8周辺、墨田区八広4丁目界隈の路地やお宅やお店の軒先
実施日：平成24年11月3日（土・祝）～18日（日）の金・土・日
企画協力：墨田区立吾嬬第二中学校美術部、龍岡会 櫻川介護老人保健施設、八広はなみずき児童館、アドマーク、茨城屋、グランド湯、サトウ化成、墨田キール、墨田聖書教会、住中浩史、北条元康
Special thanks：山内敦史（OUR FAVORITE COFFEE SHOP）

ロジ展フライヤーのイラスト
イラスト：木村吉見

マイ旗をつくろう。のんびりワークショップ
会場：yahiro 8
実施日：平成24年10月27日（土）、28日（日）、11月3日（土・祝）、4日（日）
—
会場：墨東まち見世案内所
実施日：平成24年11月10日（土）

マイ旗をめぐる旅。ミニロジさんぽ
実施日：11月18日（日）
集合：yahiro 8

関連プログラム：出張ワークショップ
①八広はなみずき児童館
実施日：平成24年10月22日（月）、11月7日（水）
—
②医療法人社団 龍岡会 櫻川介護老人保険施設
実施日：平成24年10月中旬から11月初旬にかけて数回
—
③墨田区立吾嬬第二中学校美術部
実施日：平成24年10月25（木）、30日（火）、11月1日（木）

写真：中里和人

BOKUTO MACHI MISE 2009-2012

ネットワーク プロジェクト一覧

※2009年度については、招聘プログラムとネットワークプロジェクトの明確な分類が無かったため、それまでに墨東エリアで活動を行ってきた方や拠点による企画を記載
※2012年度の参加企画は各企画者が主催

向島おしょくじプロジェクト

企画者：三宅航太郎
会場：アート＆カフェこぐま、墨東まち見世ロビー、インフォメーション屋台

おみくじを引くようにして墨東エリアの飲食店情報が得られる「食事」の「おみくじ」＝「おしょくじ」。年始に〈アートスポット鳩や〉のスタジオプログラムとして始まり、以後もサポーターが中心となり継続するプロジェクトを《墨東まち見世ロビー》やまち見世のインフォメーション屋台などでも展開しました。

小窓

企画者：ティトス・スプリー
会場：ティトス・スプリー邸

アーティスト自身が墨東エリアに借りている小さなトタンぶきの家の外壁に、映像作品を上映する小窓を設置しインスタレーション展示を実施。また作品のコンセプトを現実化するため、家の外観をデジタルプリントした布で実際の家と同じサイズの構造物を制作。東京都庁周辺や江戸東京博物館で公開撮影を行いました。

向島缶詰アーカイブ

企画者：EAT&ART TARO
会場：東向島珈琲店 Pua mana

地域の食のアーカイブをつくるプロジェクト。チラシやインターネットの告知などを見て応募してきた地域内の20軒以上の家庭に出張し、食卓を一緒に囲みながら家庭料理をその場で缶詰にしていきました。出来上がった缶詰は記録写真とともに丁寧にパッケージした上で、ドキュメント展において一般公開しました。

芸術、起源、デモクラシー

企画者：藤井光
会場：現代美術製作所

渋谷区の宮下公園に建設される予定の有料スケートボードパークを暗示するインスタレーションに合わせて写真やオブジェ、映像作品を展示。特定地域の市場価値を高める都市ブランディングという手法、そしてその中で積極的な役割を演じさせられる文化・芸術の役割について再考を迫る作品となりました。

スタジオ・シェッラハル

企画者：栗原汐里／平岡直子
会場：スタジオ・シェッラハル

民家を手直しした住まいとスタジオを兼ねた栗原汐里と平岡直子のスペース。夏に始動したスタジオスペースと住居スペースにて、ふたりの作品を紹介する個展と、美術家の小火を招いた展覧会を開催しました。また、池田みどり（池田晶紀＋三田村光土里）による映像インスタレーション（→P.113）の展示会場としても協力しました。

演劇公演「島あつめ」

企画者：トリのマーク（通称）
会場：アート＆カフェこぐま

3年前から鳩の街通り商店街にある古い木造長屋に移り住み、懐かしさの漂う空間を活かしてアートカフェを運営しながら活動を続けている劇団による公演を実施。暮らしの中で折々に収集してきた小さなエピソードを、独自の視点で編集し、ゆったりとした時間の流れる不思議な味わいのある作品として上演しました。

向島Nightseeing & まち見世路上幻燈会

企画者：中里和人
会場：SOURCE.sight（SOURCE Factory）、墨田聖書教会

向島らしさを留める夜のまち並みに注目、暗闇の視点「Nightseeing」から路地の魅力を再発見するプロジェクト。夜の路地を撮影して、やがてタワーの下に埋もれていくまちの光景を発掘し、撮影した写真を展示しました。また会期中には同様のワークショップや夜の向島を体感してもらう路上幻燈会を開催しました。

個展「モンスター」＆世界初! 消しゴム野外彫刻展

企画者：パルコキノシタ

会場：アートスポット鳩や（鈴木荘）、純喫茶エデン、工房鳩ノ目、アート＆カフェこぐま、東向島珈琲店

元アパートの狭小空間に多数の新作平面作品を飾り個展を開催。会場にはこたつが置かれ、来場者は和みながら座って作品を鑑賞しました。会期中には、墨田区の消しゴム工場「ヒノデワシ」から提供を受けた消しゴムを使い、地域住民を対象としたワークショップを開催。商店街の喫茶店などに展示しました。

玉ノ井プロジェクト

企画者：水内貴英

会場：株式会社牛久工務店1F

玉ノ井地区における長期的な活動を視野に入れながら、地域のリサーチを目的としたプロジェクトの第1弾を実施。地元の建設会社のショールームを活用し、期間限定の「玉ノ井ひと休み書庫」をオープンしました。墨東エリアをテーマにした本棚を備え、立ち寄った人が自由に本を読むことができるスペースとなりました。

京島路地園芸術祭

企画者：京島路地園芸術祭実行委員会／村山修二郎

会場：墨田区京島3丁目界隈（キラキラ橘商店街など）

身近な植生に注目しつつフィールドワークや制作に取り組むアーティストが、京島地域の暮らしに息づくアートと言うべき路地園芸術をテーマに企画開催。路地植物をめぐるスタンプラリーと路地園芸術の人気投票、ワークショップで制作した鉢灯籠による灯りのイベント、シンポジウムなど多岐に渡るプログラムを行いました。

amplitude 鳩の街／光

企画者：北川貴好

会場：チャレンジスポット!鈴木荘

近隣の住民に呼びかけて集めた使用済みの電球約700個を組み合わせ、光る造形作品を制作。鳩の街通り商店街の空き店舗でインスタレーション展示を行いました。一定の間隔を置いてゆっくりと点滅を繰り返す作品は、それがかつて照らしていた家庭や商店などの記憶を甦らせるとともに、かつての鳩の街を暗示していました。

Test track “Mukojima”

企画者：KOSUGE1-16

会場：現代美術製作所

路地のまちに特化した新型自転車を開発するというコンセプトのもと、試作自転車用のテストコースを大規模なインスタレーションとして制作。実際にアーティストが地域をリサーチして明らかになった様々な路地、坂道などの各種「難コース」を1ヶ所に集約し、様々な素材によってほぼ実物大に再現しました。

続・ふと木歩という名をおもう

企画者：杉田このみ

会場：アートスポット鳩や（鈴木荘）

大正時代に向島に住んだ薄幸の俳人・富田木歩の作品と生涯を取材し、前年に制作した短篇映像の続編。前作で十分に紹介できなかった俳句作品や埋もれたエピソードにスポットを当てながら、隅田川周辺の情景を織り込んだ朗読ドラマとして制作、発表しました。

SOURCE四人展

企画者：上田尚宏、下平千夏、勅使美千代、小林真太郎

会場：SOURCE .sight（SOURCE Factory）

30年ほど前にソース工場であった場所を改装し、2009年の始めにスタートした八広にある共同アトリエ。まち見世に参加するにあたり、アトリエ入り口脇のスペースを約2ヶ月かけて改装し、新たに作品展示のためのスペース〈SOURCE .sight〉としてオープン。アトリエアーティスト4名によるグループ展を開催しました。

映像インスタレーション 写真集「池田みどり」

企画者：池田みどり（池田晶紀＋三田村光土里）

会場：スタジオ・シェッラハル

2人の作家が架空の女性「池田みどり」の存在を様々なかたちで表現するプロジェクト。夜の路地を舞台に、謎めいた物語の断片を演じる女性のポートレートを撮影し、向島のまちが変化する中で失われつつある独自な空気感や匂いを表現に留め、また撮影した写真を用いて映像インスタレーション展示も行いました。

おしょくじプロジェクト

企画者：三宅航太郎＋おしょくじ営業所
会場：墨東エリア各所
助成：すみだコミュニティプログラム

前年に始まった「おしょくじ」の内容を充実させるため、新たに京島地域で食べ歩きワークショップを取り入れながら制作を行いました。京島商店街での完成披露パフォーマンス、《橘館presents シネマサーカス in 旧曳舟中》での出張プログラムなども行いました。

こすみ図書リノベーションプロジェクト

企画者：昆野純子（こすみ図書）＋平岡直子（PARCO DRAW STUDIO）
会場：こすみ図書

前年度のまち見世がきっかけで鳩の街通り商店街に引っ越してきた昆野氏が、鈴木荘にアトリエを構える平岡氏とコラボレーションし、借りている住宅付き店舗をアートスペースにリノベーションするプロジェクト。公開ワークショップ形式で進められ、他企画とのコラボレーションやオープニングパフォーマンス等も行いました。

子まちづくり

企画者：ティトス・スプリー
会場：京島エリア空き地、東向島児童館

子供の視点でのまちづくり＝「子まちづくり」をテーマに、主として京島周辺の子供たちを対象に行ったワークショップシリーズ。プレイベントとして『フォトサファリ in 京島・向島』を開催。メイン会期には、京島エリアの空き地を会場として、ダンボールを使って実際に子供のまちをつくるワークショップを行いました。

「サンタさんやって来て!」プロジェクト

企画者：靴郎堂本店
会場：アートスポット鳩や（鈴木荘）

クリスマスにサンタさんからプレゼントを貰うために欠かせないモノ、それは「靴下」。地域の各所に住まう人からいらなくなった靴下を収集し、それを素材に愉快で楽しい巨大靴下を公開制作。完成作品をクリスマスに鳩の街通り商店街でお披露目しました。

自転車部シネマカフェ

企画者：自転車部
会場：墨田聖書教会

ゆるい自転車好きが集まって、おもしろ文化活動をつくり出す家庭科系自転車部が、築65年、米軍兵舎のコンセットハットを改築した教会でカフェイベントを開催。第66回ヴェネチア国際映画祭短編コンペティション部門正式招待作品『自転車』を上映し、脚本家・渋谷悠氏によるトークイベントも開催しました。

スカテンnight fever

企画者：枕橋茶や、スカテン／定点観測実行委員会
会場：枕橋茶や

スカイツリーの建設過程を撮影した定点観測写真をアニメーションにして、枕橋のたもとで大型スクリーンに投影。ゼロから成長するタワーの映像と、現実のタワーを見比べることで、鑑賞者に変わりゆくまちの現在と過去を同時に体験してもらいました。

すみだ百花蜜プロジェクト

企画者：すみだ百花蜜プロジェクト実行委員会
会場：都立隅田川高校
助成：すみだコミュニティ・プログラム2009

ニホンミツバチを通じて、地域の生態系を「少しずつ」改善していくことを目的とした活動を展開。メイン会期中に『ミツバチ内覧会』『蜜源植物MAP作り』『ミツバチTシャツワークショップ』、在来植物を使った路地園芸の展示などを実施しました。

すみだフリオコシ ～フリの現場・現場のフリ～

企画者：鈴木一琥、高垣達郎
会場：浜野製作所 プレス金型工場2階

墨田に多くある町工場を見学し、その魅力をリポート。個々の町工場の音、リズム、作業工程の中に潜む「フリ」（振り付け）を型におこし、共有するプロジェクト。町工場というこの地域の歴史から、アート・工場・そこに暮らす住民との前向きな相互関係を考えさせられるようなパフォーマンスを行いました。

第二回・京島路地園芸術祭

企画者：京島路地園芸術祭実行委員会／村山修二郎
会場：キラキラ会館前広場、向島百花園、おやすみ処「橘館」、京島・向島野外各所

路地と園芸植物による日本でも独特な風景が見られる京島地域。前年度に続いて路地園芸ポイントを巡るスタンプラリーと、地域とプロジェクトをつなぐ「移動式路地園芸術」により、アートと植栽に関わるイベント、ワークショップなど、住民参加型の企画を行い、地域の中に潜むさらなる可能性や魅力を見出しました。

玉の井SHOW ROOM

企画者：水内貴英
会場：玉の井SHOW ROOM

前年度のまち見世をきっかけにして、地元工務店のショールームで月に1度様々な企画を行ってきた活動を、メイン会期中は拡大版として開催。展示・ダンス・ワークショップ・トークなどのほか、地元商店街によるまちおこし組織と連携した企画を実施しました。

寺子屋住まい隊

企画者：ひと・まち・住まい方研究室（NPO法人向島学会内）
会場：すずらん勉強会（学習塾）
一般社団法人住まい・まちづくり担い手支援機構「2010年度 住まい・まちづくり担い手事業」

「向島に住み続けたい」方々が住み続けられるための共生のあり方や、「向島に住みたい」方々に対して住まいを提供できる仕組みなど、これからの住まいのあり方を考える全5回の連続勉強会を行いました。

平岡直子個展 家をつくる青年

企画者：平岡直子（PARCO DRAW STUDIO）
会場：PARCO DRAW STUDIO（鈴木荘）

油絵を制作するアーティスト平岡氏のアトリエを公開して、「家をつくる」感覚をテーマにした油絵・インスタレーション作品の制作展示を行いました。また、展示と並行して〈こすみ図書〉立ち上げのワークショップを指導、実際にまちなかで「家をつくる」活動にも関わりました。

墨東大学

企画者：bockt
会場：墨東大学京島校舎（旧墨東まち見世ロビー）
東京アートポイント計画「学生とアーティストによるアート交流プログラム」

まちや地域コミュニティとの関わり方を「大学」というメタファーで理解し、日常生活や社会関係のあり方を考えるプロジェクト。墨東エリアを人びとが集いのびやかに語らう「学びの場」として設計・演出し、コミュニケーションの誘発を試みました。

ぼくとうとぼく

企画者：北村伊知郎
会場：まち見世案内所（旧アトレウス家）

「人はなぜ働くのだろう。」いまさら人に訊けなかったり、なかなか言葉にできない「働くこと」の意義を、映像作品の制作を通して問いかけたプロジェクト。町工場や商店街など、働く姿を間近に感じられる墨東エリア。そんなまちで出会った人々との交流の中で、自分にとっての「働くこと」を見つめ直しました。

墨東文庫

企画者：木村健世
会場：キラキラ橘商店街周辺

人々の営みによって生み出される物語が積層したまちを、小説の集合体／ひとつの「文庫」として捉え、普段は目に見えない墨東を体験するプロジェクト。まちで集めた物語を詰め込んだ「墨東文庫目録」を制作、配布し、来訪者にまだ見ぬ地域へのまなざしを提供しました。

町影【machi kage】dance & music & film

企画者：yahiro 8
会場：yahiro 8
構成・振り付け：オカザキ恭和
ダンス：オカザキ恭和、岩崎一恵　演奏：松本マサル
映像：二宮直也　踊り：すみだ河内音頭同好会

かつて町工場だった会場に墨田の変わりつつあるまち並みを投影。このまちに息づく、残していきたい消えてしまうかもしれないものたちを、映像と音とダンスで映し出すパフォーマンスを行いました。

向島・路上幻燈会＆蜃気楼テレビ

企画者：中里和人＋東京造形大学大学院生

会場：墨東エリア各所

復刻した江戸時代の幻燈機を用いて向島の路地裏を劇場に変える、まち空間演出イベント『路上幻燈会』。ピンホールの原理を利用した装置をかぶり、まちなかを散策する『蜃気楼テレビ』。ふたつの古くて新しい視覚覚醒装置を使い、もうひとつの知らない向島のまちを発見しました。

文字屋＆書道戦隊スミレンジャー

企画者：曽我卓史

会場：墨東エリア各所

向島出身・在住の書道アーティスト曽我卓史による移動型ワークショップ＆パフォーマンス。2009年のまち見世から活躍している屋台で墨東エリアを移動しながら、書道家3人によるワークショップ『文字屋』と『書道戦隊スミレンジャー』のパフォーマンスを展開しました。

レトロクッキング2010

企画者：EAT&ART TARO

会場：東向島珈琲店 Pua mana

リノベーションプロジェクト中のこすみ図書などからレトロな魅力のある昭和40年～50年代の料理本を集めて、喫茶店の一角に展示。また、掲載されている「鰹のどら焼き」や「ホットロールサンドイッチ」など、今では見かけない気になるメニューをレシピ通り忠実に再現するワークショップも数回にわたって行いました。

橘館 presents シネマサーカス in 旧曳舟中

企画者：橘館実行委員会

会場：旧曳舟中学校

2009年のまち見世サポーター有志が中心となった実行委員会が企画しました。地元出身の吉田浩太監督による、墨東エリアを舞台に撮影した短篇映画『墨田区京島三丁目』ほか1作品、入江悠監督の『SRサイタマノラッパー』を上映。両監督によるクロストークや映画出演者によるライブパフォーマンスを行いました。

一生の一冊

企画者：旅する本屋・放浪書房

会場：アートスポット鳩や（鈴木荘）

人生の節目や岐路で影響を受けた本。それはまさに「一生の一冊」となります。墨東エリアで活躍するあの人の一生の一冊を展示。本を通じて、人に出会い、まちに出会う「人生の図書館」を演出しました。絵本の読み聞かせイベントも行いました。

紙のバイキングconeruジャケット展 @coneru

企画者：雑貨のギャラリーconeru

会場：coneru

「coneruジャケット」として選んでもらえる表紙のイラスト、絵画、写真などをA4サイズにした作品を展示しました。鳩の街通り商店街の紙工房 堂地堂で『紙のバイキングconeruジャケット』を同時開催。2拠点を結ぶ展示が人の移動を促しました。

〈きおくレストラン〉と〈りのベカフェ〉

企画者：鈴木真由子＋ERT&ART TARO＋住中浩史

会場：旧S家

住んでいた人の記憶と風情あふれる日本家屋。そこに初めて訪れたアーティストふたりと、生まれてからその傍らで暮らしてきた鈴木さん。昭和33年を再現した『きおくレストラン』、平成23年の今のこの場所を考えた『りのベカフェ』、それぞれの視点から同じ日本家屋を舞台にしたふたつの食イベントを展開しました。

Shall we 路地?

企画者：yahiro 8（オカザキ恭和、木村吉見）

会場：yahiro 8近くの路地

路地をテーマにふたつの企画を実施しました。『ペタン道』…yahiro 8の1階を自由に通り抜けられる“まっさらな路地”にして、来場者が足跡をつける参加型インスタレーションを実施。『路地ダンス案内：ようこそフラワーロードへ♪』…フラワーロードとひそかに名付けられたyahiro 8脇の路地で、オカザキ氏がダンスパフォーマンスを行いました。

隅田川しあわせ巡り

企画者：一軒家カフェikkA
会場：一軒家カフェikkA

向島地区にあるカフェギャラリーで、三囲神社や今戸神社など、隅田川周辺の神社・パワースポットで出会った小さな「しあわせ」の写真展を開催。見る人にまちめぐり気分や「しあわせ巡り」の寄り道を提供しました。

SOURCE .sight exhibition vol.7,8,9

企画者：SOURCE Factory
会場：SOURCE .sight（SOURCE Factory）

勅使美千代『数えられない宇宙』／渋谷友香理『なくしてもいいもの。なくしやすいもの。なくしてまたみつけるもの。』／謝花翔陽、三木仙太郎、宮坂直樹、横山昌伸『meuble, immeuble』メイン会期中に3組のアーティストの個展を連続して開催しました。

第三回・京島＋向島路地園芸術祭

企画者：京島路地園芸術祭実行委員会／村山修二郎
会場：向島百花園、京島・向島野外各所

2009年、2010年に引き続き、アートに特化した路地園芸をテーマとして京島と向島のまちなかで行う自由参加型の芸術祭を開催。植巡りスタンプラリーや路地園芸ツアー＋お茶会、路地園芸術座談会を行いました。また、墨田区の路地から出来る東日本大震災復興支援の活動も実施。路地園芸の植物を寄贈いただき、被災地仮設住宅にプレゼントと同時に植木市を開催し、植物を通じた交流も行いました。

“たのしい事件”実現プロジェクト

企画者：“たのしい事件”実現プロジェクト準備会
会場：yahiro 8

ちらっと事務局による企画《ちらっとでも〜》と連携して、シンプルでスケールのでかいパフォーマンス、例えば1万人が足並み揃えてケンケンパ♪といったアイデアを公募。その実現を目指して“たのしい事件”実現プロジェクト実行委員会が発足しました。

チャリティーガチャガチャ〈ガチャレンジ!〉

企画者：ふるほん日和＋すみだ川ものコト市
会場：紙工房 堂地堂＆甘夏書店（鈴木荘）

玉手箱のような遊べる観光案内所・お土産自販機をコンセプトとして実施。〈すみだ川ものコト市〉と連携し、向島界隈でチャレンジを続けるアーティスト・ショップ・企業・団体の情報やちょっとしたグッズを「ガチャガチャ」にして設置。東日本大震災復興支援のためのチャリティ企画を展開しました。

ちらっとでも「ボクトウでやりたい!」と思ったことをみんなが出し切ることで、なにがおこるのか?

企画者：ちらっと事務局
会場：こすみ図書、ユートリヤ エントランスホールほか

ちらっとでも思いついた、思いついていた「墨東でやりたいこと／実験」などを投書やメール、まち見世屋台を活用した「回収」など様々な方法で集め、実現へ向けて活動する試み。集まったアイデアはウェブサイトや生涯学習センターでの展示で公開されたほか、『やりたいこと実現検討会』も開催されました。

とくべつなあくび

企画者：スタジオ・シェッラハル
会場：旧S家

佐藤史治＋原口寛子による日本家屋で展開された映像インスタレーション。同様の手法で別会場にも展示されました。古い家具などに潜むようにして仕掛けられた映像には、ふたりによるいたずらな行為の記録に幾通りものオノマトペがアフレコされています。観客はふたりの声が響くなか、家の中をめぐり歩きました。

ヒガムコ Sound Table

企画者：EAT&ART TARO＋東向島珈琲店Pua mana
会場：東向島珈琲店

地元の人気カフェのテーブルに音楽プレーヤーを設置。中にはお店のカウンターで日夜繰り広げられている常連さんの会話が収められており、それを盗み聞きをしてしまうという設定で、お茶を味わいながらまちで起きている裏話などを楽しむことができる体験型サウンド作品でした。

ビブリオバトル inこすみ図書

企画者：こすみ図書

会場：こすみ図書

持ち寄ったお気に入りの本を順番に紹介し、いちばん読みたくなった「チャンプ本」を投票で決めるゲーム型イベントを開催。「芸術・文化」をテーマとして、本を通じた語らいの場を提供しました。

物々交換本棚〈ブックツリー〉

企画者：ふるほん日和

会場：アートスポット鳩や（鈴木荘）

スカイツリーよりひと足先に、「物々交換本棚」〈ブックツリー〉が墨東に登場。読み終わった本や誰かに読んでもらいたい本を提供すると、そこにある本と交換できるルールにより本棚を日々成長させました。

墨東文庫［鳩の街編］みんなで探すまちの物語

企画者：木村健世＋こすみ図書

会場：こすみ図書、その周辺

まちには人々の営みによって生み出されるたくさんの物語がちりばめられています。これらの物語を集め文庫目録にまとめるプロジェクトが「墨東文庫」シリーズです。今回は一般参加により鳩の街で取材を行い、このエリアで様々な活動を展開する〈こすみ図書〉を拠点としながら編集活動を行いました。

“妄想”自転車部カフェ

企画者：自転車部

会場：墨田聖書教会

おいしい珈琲とお菓子を味わいながら、向島名物の「ポストかき氷自転車」のような、ユニークな機能のついた改造自転車を妄想するイベント。漕ぐと豆挽きが回って、コーヒー豆が粉になる「豆挽き自転車」のプロトタイプを披露したほか、かき氷自転車と関連資料の展示・映像上映・妄想サイクリングMapづくりなどを行いました。

モノつくりっ手…

企画者：紙工房 堂地堂

会場：チャレンジスポット!鈴木荘

鈴木荘に入居する堂地堂が、日々の営業のかたわらで取材を重ね、職人・アーティストなど様々な職業に就く人たちの手にある、そこにしかない皺や傷に注目した写真展を開催。墨田のまちで働く人たちの手、その手でつくられているモノの写真を通して、このまちのものづくりの面白さを紹介しました。

リノベーションカフェ@float

企画者：float

会場：float

元々プレス工場だった空間を利用したオルタナティブスペースをお披露目しつつ、ギャラリーやイベントスペースとして運営していくための空間づくりを公開。メイン会期終盤には、コンテンポラリーダンサーと篠笛奏者のコラボレーションによるパフォーマンスや、公開作品制作を行ってきた四方謙一の展示などを行いました。

労働コンプレックス研究所 in 墨東まち見世2011

企画者：北村伊知郎（労働コンプレックス研究所所長）

会場：ヨネザワエリカのオフィス（鈴木荘）

「働くこと」に対して、鬱屈とした感情をいくつも持ち合わせた状態、「労働コンプレックス」を研究。会場では白衣をまとい、来訪者の「労コン」を診察。まちでは、「あなたは労働コンですか？」と街頭インタビュー。そして墨東から世界に“Manifesto of Working complex”を発表しました。

わたしの小さな生活

企画者：KO（大橋加誉）

会場：非公開（自宅）

「わたしの家に遊びに来てください」 申し込みをすると招待状が届き、そこに書いてある指示に従うと無人の古い一軒家に辿り着く。そこで出会うのはたくさんの猫と、その家に暮らす架空の「わたし」の短編小説。ステージとなる実在する路地裏の一軒家で、このまちでの生活と小説を体感する、完全予約制の体験型プログラム。

RPS企画写真展

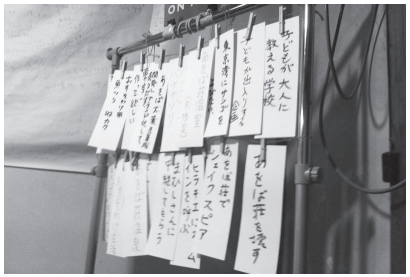
企画者：Reminders Photography Stronghold（RPS）
会場：Reminders Photography Stronghold（RPS）

東向島に新しくオープンした、写真に特化したアートスペース。亀山亮写真展『AFRIKA WAR JOURNAL』を中心に、『Curatorial Talk 二人の写真家 イン・アングと古賀絵里子』『ポートレイト｜Tatsuki vs. Arbus』といったトークイベントを開催しました。

雨水基地

企画者：樋口裕一（スミカ造形美術）＋Houko（CASA PROJECT）
会場：一寺言問集会所、すみだ環境ふれあい館ほか
制作協力：筒井佳樹

使われなくなった傘や、家屋の打ち壊しで出た生活廃材、土・砂・炭・植物などの天然資材を墨東エリアで収集し、雨水を見るための装置を制作。雨水利用の先進地域である東向島で、屋外での公開制作を行ったため、多くの地元の方の目にとまりました。



いいね!企画

企画者：ちらっと事務局×くちべた喫茶
会場：ユートリヤほか

前年度の《ちらっとでも〜》に引き続き、墨田区の約10ヶ所に回収箱（宅配牛乳受け箱）を設置して「その場所または墨田区などでやりたいこと／やったらおもしろそうなこと」を回収しました。トークイベント『ぼくらのちゃぶ台』も重ね、数多くの「やりたいこと」を収集。生涯学習センターのエントランスホールで、発表展示しました。

ウクレレ絵本カフェ Live Love Laugh!

企画者：向島こひつじ書房×STUDIO-GOE
会場：墨田聖書教会

墨東エリアの各所で、大人のための「こどもの本の読書会」などを企画する向島こひつじ書房による企画。移動図書館やUSTREAMでの読み聞かせなどを行うオオグリとしょかんのセレクトによる絵本と、会場となった教会の牧師さんによるウクレレを楽しめるカフェイベントを行いました。

神出鬼没・まち見世語り「ちっちの紙芝居」

企画者：紙芝居師ちっち
会場：キラキラ橘商店街、すみだパークスタジオ、すみだ産業会館サンライズホールスカイツリー周辺など

墨東エリアのあちらこちらに出没して、下町ならではの大衆文化・街頭紙芝居の世界を披露しました。併せてBOKU-to-TekuTekuまちみてマップやチラシの配布も行い、まち見世の広報活動にもつなげました。

すみだノートリンク

企画者：紙工房 堂地堂
会場：紙工房 堂地堂（鈴木荘）

ネットワークプロジェクトに参加した各企画者とコラボレーションし、オリジナルノートを作り、展示しました。そのほか、墨田にあるお店や団体等のキャラクターを生かしたノートも数多く制作しました。

第四回・京島路地園芸術祭

企画者：京島路地園芸術祭実行委員会／村山修二郎
会場：京島・向島野外各所、キラキラ会館前広場、墨東まち見世案内所、第四吾嬬小学校

まち見世初年度から路地園芸術祭を継続して開催。これまで見出した20ヶ所の路地園芸術スポットをマップで紹介するとともに、謎解きをしながら路地を巡る仕掛けを実施。全部で5ヶ所の謎解き文字ポイントを探し、言葉を読み解いた人には、路地園芸術記念品として特製カードが手渡されました。また、墨田からの復興支援の活動も継続しています。

玉ノ井カフェ文化祭

企画者：玉ノ井カフェ
会場：玉ノ井カフェ

畑のない墨田のまちで、幻の伝統野菜「寺島なす」を復活させるプロジェクトと、そこから広がる地域のまちづくり活動を、パネル展示や映像などで紹介。永井荷風や滝田ゆうなどの作品で有名な墨東エリアに新しいまちのファンをつくるべく、商店街や町会の関係者の集う寺島・玉の井まちおこし委員会のメンバーにより実施されました。

ドンツキ学講座＆墨東“妖怪どんつき”クエスト

企画者：ドンツキ協会

会場：下町ストリーム

どんつき（袋小路）について知り、関心を深めるためのUST REAM講座『ドンツキ学講座』を実施。また、ゴブリン博士・小中大地氏の協力のもと、墨東の個性的などんつきを観察しながら、新たな墨東の妖怪伝説をともに考え、ともに旅する『墨東“妖怪どんつき”クエスト』を開催しました。

ヒガムコ夜の部

企画者：EAT&ART TARO

会場：東向島珈琲店

向島のアート活動の歴史をよく知る自身がホストとなり、こすみ図書、float、haus、あをば荘など地域で新たに活動を始めている拠点の関係者をゲストにトークを開催。昔あったというカフェの「夜の部」を新しい形で復活させました。

float:NINJA「人形忍者映画撮影の会」

企画者：飯塚貴士（float&ワッヘンフィルムスタジオ）

会場：float

floatの立ち上げメンバーのひとりであり、人形とミニチュアセットなど昔ながらの特撮技法を使ってB級テイスト漂うインディペンデント映画を作り続ける飯塚氏の撮影を公開するイベント。人形を操るエキストラなどとして撮影を体験できるワークショップも行われました。

墨東でねこをみる（それが、まちをみることになる）TOUR

企画者：点線のオルタナティブスペース

会場：向島周辺

東武スカイツリーライン曳舟駅に集合し、まずは鳩の街通り商店街を見学。その後、猫のように“きまぐれ”に散策するツアー。墨東の猫に会えるかどうかも“きまぐれ”のようなものですが、たくさんの猫に出会うことができるまち歩きとなりました。

LAVA JP

企画者：haus

会場：haus

ブラジルの実験的グラフィック・デザインシーンで活躍するデザイナー、ラウル・ルナを招聘し、サンパウロ・ベルリン・東京の3都市を結ぶ国際的ソロ・エキシビジョンを開催。消費されたアイコンやモチーフを再利用することで再構築される、新たな価値観のミックスを根底にした作品を展示しました。

労働コンプレックス2012秋

企画者：北村伊知郎（労働コンプレックス研究所所長）

会場：非公開

労働コンプレックスに関するエビデンスをつくるため、某会社組織に所属。アルバイトから契約社員、そして正社員に登用されるまでのプロセスを自ら検証。給与額に始まり、残業や出張、休日出勤に対する手当ての交渉、アフター5における先輩や上司との関係性構築まで、様々な臨床研究を行いました。

路地ダンス vol.3 八広1丁目

企画者：オカザキ恭和

会場：八広1丁目38〜39付近の路地

パフォーマーが魅力を感じている、このまち独特の路地空間でのダンスパフォーマンスを実施。〈yahiro 8〉で活動し、生活しているオカザキ氏だからこそできる公演で、身体表現に興味のある人だけでなく、その他の表現を行っている人や、まちとの付き合い方のヒントを得たい人にも見ごたえのある内容でした。

［2012年度｜特別企画］

墨東文庫［街頭紙芝居編］

〜まちで見つけた物語、まちで語る物語〜

企画者：ちっち＋木村健世と墨東文庫編集室

会場：こすみ図書、はとほっとミニ公園

→P.70参照

私たちがおすそわけできること

企画者：あをば荘の人々　会場：あをば荘

→P.80参照

「どこにいるかわからない」展

企画者：下平千夏＋大橋加誉

会場：SOURCE Factory、現代美術製作所、空家など

→P.90参照

ロジ展「はためくわたしたち」

企画者：yahiro 8

会場：yahiro 8、墨東まち見世案内所、八広4丁目周辺

→P.100参照

BOKUTO MACHI MISE 2009-2012 | Bokuto Machi Mise Network

墨東まち見世ネットワーク

墨東まち見世論考｜3

墨東まち見世と東京下町のコミュニティ

金善美 Sunmee KIM
（一橋大学 大学院社会学研究科 博士後期課程）

はじめに

まち見世が行われた4年間は、舞台となった墨東エリアにとって多くの変化が訪れた時期でもあった。住宅の老朽化や高齢住民の増加、防災上の危険などが依然として課題に残る一方で、東京スカイツリーの開業とともに再開発と観光地化という流れが加速化してきたのである。そしてこのような変化の中、当初は木造密集市街地の衰退を懸念したまちづくり組織の「実験」として始まった墨東エリアのアートプロジェクトをめぐる環境も今、大きく変わりつつある。

本稿では、まち見世を地域社会の変化という文脈の中で位置づけ、ひとつのアートプロジェクトとして地域のコミュニティにどのような変化をもたらし、また墨東エリアをとりまく外部環境の変化とどのように連動しながら展開されてきたのかを考えてみたい。この4年間、さまざまな活動や人のつながりを生みながら繰り広げられたまち見世が残した変化をアーティストや地域住民、ボランティアなど現場の関係性に即して検討することで、墨東エリアにおけるアートの存在意味を再確認し、また、今後のアートプロジェクトのあり方を摸索する土台を作ることが本稿の狙いである。

本題に入る前に、簡単に筆者の自己紹介をしておこう。社会学を学ぶ大学院生である筆者は2008年から墨東エリアに興味をもち、ボランティアスタッフや観客として関わりながら、東京下町の地域社会の変化とまちづくりの一環としてのアートプロジェクトの実践について研究を行ってきた。

—

墨東エリアにおけるアート

近年では東京スカイツリーという新たなランドマークで知られることも多い墨東エリアの歴史は、明治以降、産業化・都市化の流れにともなう工業の集積とともに始まった。住宅・工場・商店が混在する密集市街地として発展してきた墨東エリアの人口密度は高度経済成長期にいたるまできわめて高く、「どこの何者か分からない」他人同士が近接距離で共存せざるをえない環境の中で濃密な近所付き合いや人情深さなど、今日においては「下町らしさ」とよばれる独特な地域文化がかたちづくられてきた。こうした墨東の地域性はおもに戦前から高度経済成長期にわたる時期に形成されたものであるが、今日にいたっても依然として墨東エリアの地域イメージを強く規定している。

東京東部のほかの下町エリアと同様、工場労働者や零細自営業者などブルーカラー層を中心とする同質的コミュニティが作られていた墨東エリアに転換期が訪れたのは、1980年代以降である。すでに1960年代末から始まっていた産業空洞化の流れがますます本格化し、長期にわたって地域経済が沈滞する中、下町コミュニティの解体や人口減少、空き家の増加が懸念されるようになった。一方、工場跡地などを中心に部分的な住宅地化が進み、都心で働くホワイトカラー層の流入が始まった。日本を代表するものづくりのまちとしてのかつての地域色は薄まり、職業もライフスタイルも大きく異なる新－旧住民が同じ空間に共存する中、少しずつまちの変化は進んできた。現在の墨田区の統計を見ると、区内の工場数はピーク時の9700件（1970年）から近年では3800件まで減少している反面（『新・墨田区工業振興マスタープラン』墨田区、2009年）、マンションに住む住民の数は墨田区区民全体の約7割にいたる（『墨田区分譲マンション等実態調査報告書』墨田区、2008年）。

こうした状況の中、防災まちづくりの一環として1990年代後半に始まったアートプロジェクト〈向島博覧会〉などは、それまで「衰退していくまち」「さびれたまち」と思われがちであった墨東エリアを、魅力的で個性ある木造建築のまちとして再発見した試みであった。行政ではなく住民主導のまちづくりとして始まったこと、大規模の財源を持たず草の根ベースで続けてきたこと、何より若手アーティストがまちに移住し、自ら墨東エリアの住民となってきたことは、他のアートプロジェクトの事例とは異なる、墨東ならではの特徴といえる。好きに改修できる物件や安い家賃、ボヘミアのような雰囲気を求めるアーティストと、下町の地域社会に興味を持ち、祭りや商店街のイベントなど地域活動に積極的に関わる若者の存在を歓迎する地域有志・まちづくり組織の関心が一致し、相互協力・共存する関係性が作られたのは2000年代半ば以降のことである。住民の消極的容認や参加の低さという限界を抱えつつも、少しずつ外部のアートファンやまち歩きの人々などを墨東エリアに惹きつけ、隠れたアートのまち、あるいはちょっと変わった下町として認知されていたのがまち見世以前の墨東の状況であった。

まち見世のサポーターと「墨東まち見世インフォメーション屋台」

—

墨東まち見世がもたらした変化

2009年から始まったまち見世は、このような活動の流れを受け継ぎながらも、それまでの墨東のアートとは大きく異なる環境条件の中で始まった。東京都との共催、大規模な予算や会期の長さ、参加アーティストの数にいたるまで、墨東のアートの歴史においてもっとも大がかりなプロジェクトとなったのである。このような手法が墨東らしいアートのあり方かどうかについては今後議論の余地があるかもしれないが、いずれにしても、まち見世は墨東エリアにおけるアートが以前とは異なる新たな段階に入ったことを意味する出来事となった。まち見世がもたらした変化や地域社会の変化と連動しながら展開されてきた様子を、以下の3点にまとめたい。

—

1｜地域活動の一つとしてのアート

以前に比べて豊かな財源を持ち、4年間の持続性が担保されたプロジェクトは、活動の幅を広げ、地域内でアートの認知度を上げることを可能にした。自治体である墨田区、墨東エリア内の学校に通う子供たちやPTA、町会、商店街組合、ものづくりや観光まちおこしなど性格の異なるまちづくりグループにいたるまで、何かしらの形で墨東の地域活動に

集会所などで行われるまち見世の企画会議

木造住宅が並ぶ墨東エリア

参加している多くの人々が作品の制作や展示などに協力することで墨東のアートについて知り、具体的な関心事こそ異なるものの、地域活動という共通項で交流できる基盤が作られてきたのはひとつの収穫である。

また、住民やボランティアスタッフがただ作品を鑑賞する／制作を手伝う存在にとどまるのではなく、自らアート表現の主体となれる仕組みが作られたのはまち見世以前との違いといえる。表現の最先端を追求し作品の質を極めるよりは参加のハードルを下げ、地域イベントとしての公共的性格を相対的に優先させることで、まち見世はなんとなく高尚なニュアンスがつきまといがちなアートの展覧会ではなく、多様な地域活動のひとつとして受け入れられることができた。1980年代以降、同業者集団としての下町住民の同質性が薄まり、多様化する住民の関心を反映した様々な地域活動・地域文化が定着してきたのもこのような背景のひとつであろう。

—

2｜新たな地域コミュニティの形成

まち見世がもたらしたもうひとつの変化は、点々と存在していた拠点が企画会議などを通してお互い交流をもち、またボランティアを積極的に動員することで、まち見世が終わった後も日常的な付き合いが続く「ご近所」のネットワークを作り出した点である。さらに、2000年代以降増えてきたカフェ・飲食店・雑貨屋などの個人商店や、シェアハウス・社会的企業といった新たな人のつながりを摸索する活動の場（人）が加わることで、墨東エリアという場所を媒介する人的ネットワークの輪はこの4年間でますます広がってきた。

メンバーは墨東エリアの外から引っ越してきた20～30代の若者が多く、アートや地域活動に関心を持ち、気軽に付き合える近所の友人関係を求めてまち見世に関わるようになったという共通点を持つ。知らないまちに新しく引っ越してきた若者にとって、まち見世は地域との接点を提供し、近隣関係を作るきっかけとなったのである。また、こうした変化を可能にした外部要因として、半蔵門線の開通とマンション開発など、墨東エリアの居住環境の変化も欠かせない。このような若い新住民のコミュニティは既存の住民組織・まちづくりの流れとも緩やかなつながりを持ち、ゆっくり、しかし確実にそれまでの下町になかったもうひとつの社会的世界を作り出している。

—

3｜アートの発信と墨東エリアの観光地化

アートによる表現が墨東エリアにおける実質上の観光振興策としての側面を持ち合わせるようになったのは、まち見世がもたらした思わぬ変化のひとつである。まち見世が始まった2009年から、墨東エリアは東京スカイツリーの麓のまちとして徐々にメディアに取り上げられるようになり、それにつられるかたちで新聞や雑誌などでまち見世が紹介されることも増えてきた。スカイツリーで変わりゆくまちの現在を表現したアート作品が作られ、遠くからまち見世を見にくる観客も増えた。

「思わぬ変化」と上述したが、こうしたアートの役割を望ましいものと評価するか否かは、立場によって判断が分かれるところかもしれない。まち見世はアートの発信を通じてスカイツリーに向かうメディアや観光客の関心を墨東エリアのまちに向けさせ、赤線の記憶など、必ずしも誇らしい歴史ばかりではない墨東エリアの地域イメージを吹き払うことにある程度寄与したといえる。しかし一方で初期の墨東のアートが持っていた東京のメインストリーム文化に対する抵抗や批判意識は薄まり、地域活性化を目指す他の多くのアートプロジェクトとの違いが見えにくくなったのも事実ではないだろうか。まちの観光地化に対してどのような立場をとるかは、今後の議論の重要な課題となるだろう。

—

おわりに：今、墨東のアートに問われていること

以上で見てきたように、まち見世の4年間は、それがもたらした変化がどのような方向性のものであれ、少なくとも以前までなかった活動の広がりを生み出し、結果的に墨東の地域社会におけるアートの存在感を高めた点で、きわめて重要な転機となった。しかし同時にそれは、墨東のアートをめぐる環境が日々変化する中、アートプロジェクトの目的や存在意義、変わりゆく地域社会との関係性作りなど、さまざまな課題や問いが導き出された時間でもあった。

墨東エリアの密集市街地に潜んだ個性と魅力を再発見し、積極的に発信してきたアートの役割が一段落しつつある今の状況は、その一例であろう。当初、防災上の危険性や老朽化した居住環境などがネガティブに語られがちであった下町の再発見はアートならではの新鮮な発想によるものであったが、2000年代以降、急激に主流となってきた。本屋には墨東エリアを含む東京下町のガイドブックがあふれ、駅周辺の再開発やマンションの増加により人口も回復しはじめた。他方、墨東の「下町らしさ」を形作ってきた個人商店や町工場、長屋が並ぶ風景は急激になくなりつつある。日々変わりゆくまちを目の前にして、アートプロジェクトは何を目指し、誰に働きかけるべきか。墨東らしいアートのあり方とは何か。まち見世の4年間が明らかにしたのは、安直な地域活性化の効果でもなく、人と人をつなぐアートの特別な力でもない、こうした問いそのものではないだろうか。

とはいえ、未来は決して暗くない。これまでの歴史を振り返ってみれば、墨東のアートプロジェクトは常にタフな環境の中で生き延びてきた。財源は不安定で、担い手の数も充分ではなく、おまけにまちの人々の反応も全面的な支持とは言い難い中、それでもなんとかアートプロジェクトは継続的に行われてきた。東京の一角である墨東エリアではまちの衰退と再開発が同時に進み、すべての住民が共感する地域問題も、目指すべき将来のビジョンも、明確には存在しない。住民構成は多様で、アートプロジェクトはとくに反対されることもなければまちを「興す」こともなく、多様な住民構成を反映する文化活動の一つとして細々と続いてきた。今日盛んに広がっている地域振興型のアートプロジェクトというよりは、むしろ都市の隙間で勝手に生まれ、勝手に広がるサブカルチャーこそが、墨東のアートの原点といえるかもしれない。過去を振り向きつつ、未来に進む時である。

「墨東まち見世塾」でモデレーターを務める金氏（最左）

COLUMN #03

鳩の街通り商店街と私

文＝ヨネザワエリカ
Text: Erika YONEZAWA

道幅2メートルほどしかない鳩の街通り商店街が人で溢れて向かいの店舗まで歩けなかった、という昔の姿の話はよく耳にする。現在〈こすみ図書〉のあるお茶屋さんからは、「東北の民謡が大音量で流されて来てね。私たちは大量のおみおつけを振舞ったんだよ。売上も相当なもんだった」と、恵方巻きを買いにきた私に“ひらの寿司”のお母さんは笑顔で語ってくれた。彼女は私が前日行われた商店街のイベントでスタッフをしていたことを知っている。イベントは大成功。商店街は人で溢れた。予約がないと手に入らない恵方巻きをこっそり裏から出してくれたのは、昔の姿を思い出させてくれたイベントへのご褒美なのかもしれない。

—

ヨネザワエリカのオフィスがある〈チャレンジスポット!鈴木荘〉には、まち見世の主催団体のひとつでもあるNPO法人向島学会の〈アートスポット鳩や〉、女性画家のギャラリー兼アトリエがふたつ、〈紙工房 堂地堂〉、雑貨販売の〈レンタルショップ5号室〉、足つぼマッサージの〈トータルヘルスケア若石〉が入居している。他の入居者と違って、店舗を構えて売るものがないし、人を呼ぶ絵も描けない私は、イベントへ積極的に関わることにした。提灯の張り替えやイベントテントの設営といった力仕事はもちろん、会議に出席し意見をする。少しは役に立っているんじゃないかと思っているけど、オフィスを構えてまだ2年。偉そうなことは言えない。まだ「商店街が私を受け入れてくれた」なんて甘い考えを持っていない。鳩の街で私が商店街の利益につながる存在だと思われているから居場所があるにすぎない。新年会や暑気払いへ女装で行っても嫌な顔ひとつせず話しかけてくれるけど、鳩の街の人間として商店街の人と話す時、そこには独特の緊張感が漂う。無理もない。

—

スカイツリーや駅前の大型ショッピング施設に人が流れている今、鳩の街は人を呼ぶための施策に真剣だ。ベラボー市やラッキーセールといったセールを実施したり、ジャズフェスティバルといったイベントを企画したり。鈴木荘のような空き店舗活性への取り組みは、他県から視察(※1)が来るほど評価が高い。振興組合の会議では「商店街の存在意義」に切り込む意見が出る。「商店街はモノを売る場所。その固定概念は捨てないと、今の世の中は生きられない。例えばモノではなく文化を売る。新しさを受け入れなくてはならない。でも俺たち古い人間はそういうことに頭がまわらないんだ。だから先生(※2)や鈴木荘の若いメンバーに期待しているんだよ。」

—

それを聞いて、今私は商店街に何ができるんだろうと不安になるけど、考えすぎても埒があかない。仕方が無いから飲み屋でベロベロに酔っ払った花屋のUさんに「おれはアイツが好きなんだよ! 気に入っているんだよ!」と大声で言われて頭を小突かれる、いつものあのやり取りを思い出し、地道に関わっていこうと思う。

ヨネザワエリカ｜展示、演劇、ライブなどのレビューを執筆するライター。墨東まち見世事務局。向島の鳩の街通り商店街にオフィスを構え、商店街イベントの企画・運営のサポートを行う。

※1. 経済産業省・中小企業庁『新・がんばる商店街77選』へ入選
※2. 鳩の街通り商店街振興組合の組合長さんの呼び名

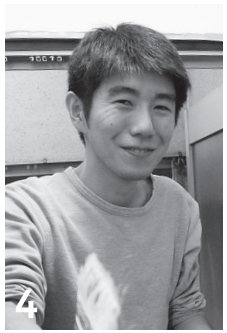
文＝橋本誠＋ヨネザワエリカ

1. 曽我高明 | Takaaki SOGA

墨東まち見世事務局。1997年に現代美術製作所（→P.92）をオープンし、仕事のかたわらで国内外のアーティストの企画展を開催する一方、墨東のまちなかで展開される数多くのアート活動にも関わってきたアートディレクターです。まち見世では一歩引いた立場から活動の全体を見守っていますが、多様な参加者の意見に耳を傾け、決めるべきところでは決めてくれる心強い存在です。向島学会の副理事長を務め、様々なまちづくり活動にも携わっています。

2. 真野洋介 | Yosuke MANO

墨東まち見世事務局。東京工業大学社会理工学研究科准教授。向島学会理事。〈向島博覧会2001〉への参加をきっかけに、研究フィールドのひとつを向島に設定。研究室の学生とともに、墨東エリアの住まいや活動する人々の調査や、まちづくりに関わる研究などへ継続的に取り組んでいます。〈RICE+〉や「向島アート・まち大学」などのアートプロジェクトにも参画経験があり、建築・まちづくりを専門とする立場からいつも鋭い視点を提供しています。



3. 清水永子 | Nagako SHIMIZU

墨東まち見世事務局。1992年、市民が芸術文化活動に主体的に関わる「社会とアートの橋渡し」を目的とした芸術文化地域活動「楽の会」を設立（代表・プロデューサー）。以後、自らが住む墨東エリアをはじめ、様々な場で先駆的な芸術活動を発信してきました。向島学会副理事長・NPO法人JCDNアドバイザー・アートNPOリンク理事なども務め、2011年度より墨東まち見世事務局に加入。厳しい意見と、おちゃめなジョークに助けられた人も多いようです。

4. 末永健治 | Kenji SUENAGA

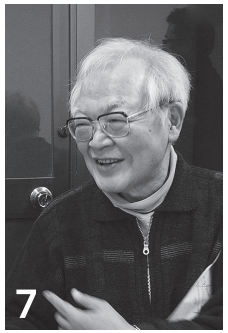
墨東まち見世事務局および向島学会に所属。まち見世開始の2009年度から、会社勤務のかたわら会計担当者として領収書の書き方から取りまとめまで、お金まわりの全てを冷静な視点でサポートする欠かせない存在です。「墨東まち見世塾」などのイベント運営時には、にこやかに受付で参加者を迎えてくれます。野球やバスケットボールなどスポーツに詳しく、2011年にはまち見世参加者有志とともに、日本シリーズ観戦イベントも企画。まち見世談議にも花が咲く機会を作ってくれました。

5. ヨネザワエリカ | Erika YONEZAWA

墨東まち見世事務局。鳩の街通り商店街のチャレンジ！スポット鈴木荘に女装のライターとしてオフィスを構えています。2011年度から広報として墨東まち見世事務局に参加。ツイッターやフェイスブックを活用した広報を積極的に展開しました。2012年度のメイン会期中には、ウェブニュースで参加企画情報を毎日更新。企画会議メンバーへの情報共有にも注力しました。墨東まち見世編集部の副部長として、アーカイブ活動にも熱心に取り組んでいます。

6. 石田龍太郎 | Ryutaro ISHIDA

墨東まち見世事務局。2009年より京島に住みはじめ、その年の秋に始動したまち見世の企画にサポーターとして参加。墨東エリアの三国志ファンを集め、「三国志部」（のちに「墨東三国志部」）を立ち上げ、「アカリノラウンジ」（→P.142）で「三国志部バー」などを企画しました。2010年からは墨東まち見世事務局として参加。プロジェクトの様々な場面を記録におさめてきました。2011年4月に茨城県水戸市に移住した後も、事務局の一員として、まち見世の運営に関わっています。



7. 高木新太郎 | Shintaro TAKAGI

向島学会監査。成蹊大学名誉教授。向島に生まれ育ち、長年地元を研究してきている地域の顔役で、自身が住まう玉ノ井地区では「寺島なす」の復活プロジェクトなどまちづくりの活動にも参加しています。向島学会では長年理事長を務めて（現・監査）メンバーを率い、まち見世ではアーティストなどがまちなかで活動する際の根回しなどをしてくださることもありました。トークイベントでのコメンテーターや、『「寺島・玉の井」歴史と文学のさんぽ』の案内人なども務めています。

8. 北條元康 | Motoyasu HOJO

向島学会理事で、向島の地元工務店の三代目。ポスト工務店 BUGHAUS棟梁。KOSUGE1-16の作品制作など、墨東エリアで行われてきた数々のアートプロジェクトやアーティストのインスタレーション、会場施工などをサポートしてきました。まち見世では「墨東まち見世インフォメーション屋台」の制作担当をはじめ大活躍。休日などに自分で鍋会やもちつき大会を企画するなど、何気ないコミュニケーションの場づくりに長けたムードメーカーでもあります。

9. 森司｜Tsukasa MORI

東京文化発信プロジェクト室。2009年度より東京アートポイント計画ディレクターとして、NPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムなどを手がけています。この一環として、まち見世の立ち上げの際には、アーティスト等の選定や、運営の仕組みづくりなどに関わりました。東京都による芸術文化を活用した被災地支援授業（Art Support Tohoku – Tokyo）に伴い東北出張も度重なる中、まち見世の展開を温かく見守っています。

10. 長尾聡子｜Satoko NAGAO

東京文化発信プロジェクト室。2012年度より東京アートポイント計画 プログラムオフィサーとしてまち見世を担当。事務局会議や企画会議へ積極的に顔を出しながら、現場をサポートしています。メイン会期には、新しい「まちみてマップ」を片手に墨東エリアで展開中の様々な参加企画や拠点をめぐる姿も。フライヤーなどの広報制作物や本書の制作では、見逃してしまいがちな細かい修正点を丁寧に指摘するなど、事務局メンバーを背後で支えています。

11. 橋本誠｜Makoto HASHIMOTO

東京文化発信プロジェクト室在籍中に、東京アートポイント計画プログラムオフィサーとしてまち見世を担当（2009～2011年度）。事務局や企画会議メンバー・サポーターを幅広くサポートし、招聘アーティストの提案なども行いました。2012年4月からは、フリーのアートプロデューサーとして東京と横浜を拠点に活動。まち見世には墨東まち見世編集部長として関わり、アートプロジェクトを伝えるドキュメント制作の手法を模索しています。「Tokyo Art Research Lab」のコーディネーターも務めています。

12. 石田喜美｜Kimi ISHIDA

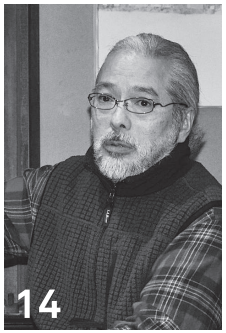
東京文化発信プロジェクト室在籍中に、東京アートポイント計画の人材育成プログラムやプロジェクト評価の仕組みづくりに加えて、まち見世を担当（2009～2010年度）。プライベートでも墨東エリアに居を移し、新住民のひとりとして、まち見世に関わる様々な人たちの相談にも乗ってきました。2011年4月より常磐大学の専任講師となり、茨城県水戸市に移住してしまいましたが、引き続きことあるごとに墨東エリアに通い、イベントに楽しく参加する姿が目撃されています。

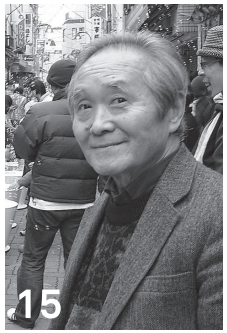
13. 吉成隆｜Takashi YOSHINARI

八広で金属加工業を営む吉成工業株式会社社長。ポスト工務店BUGHAUSメンバー。2003年よりKOSUGE1-16の作品への協力（サッカーゲーム機、サイクロドロームゲームDXなど）。自転車部のかき氷自転車の製作を担当するなど、墨東エリアでの制作活動時に技術的な協力をしてくれる欠かせない存在です。墨東まち見世編集部の部員やドンツキ協会の相談役でもあり、まち見世塾のトークイベントなどでは地元の人間としての発言がキラリと光ります。

14. 松橋一暁｜Kazuaki MATSUHASHI

鳩の街通り商店街振興組合理事長。立花美容室のご主人。ジャズフェスティバルや鳩の街屋台sweetsストリートなど、商店街を盛り上げるためのイベントを数多く企画し実施しています。2008年4月からは商店街直営の創業支援施設〈チャレンジスポット!鈴木荘〉事業をスタート。商店街の「先生」として大切な存在です。鳩の街通り商店街は、空き店舗活性化の取り組みが評価され経済産業省の「新・がんばる商店街77選」に全国から選定されました。





15. 藤井正昭｜Masaaki FUJII

キラキラ橘商店街にある山田屋薬局のご主人。「京島ロジコミマップ」という京島の魅力を伝えるマップ制作に京島地区まちづくり協議会のメンバーとして関わっています。まち見世では、商店街の空き店舗や路上を活用する企画に際しての相談役となり、4年間続いている名物企画《路地園芸術祭》を美術家・村山修二郎さんと運営。日々京島を歩き、その中で見つける路地の面白さや京島の歴史をトークイベントやシンポジウムの場でも詳しく話してくれました。

16. 森垣賢｜Ken MORIGAKI

東京藝術大学先端芸術表現科や筑波大学芸術専門学群で非常勤講師も務める向島在住のグラフィックデザイナー。まち見世に関わる主要な告知媒体やウェブのデザインを担当し、まち見世カラーとして馴染み深い緑色のロゴデザインを綿密な計算に基づき設計してきました。また、フライヤーやポスターなどに限らず、まちなかに設置したのぼり旗やビルボード、グッズなども積極的に提案して制作。デザイン・制作監修をしたインフォメーション屋台では第56回TDC賞を受賞しました。

COLUMN #04

路地園芸術祭のこれまでとこれから

文＝村山修二郎
Text: Shujiro MURAYAMA

私は、1999年から2007年まで墨田区の本所2丁目に住んでいた。ここは、関東大震災にて焼け野原になり、その後区画整理による碁盤の目のような整然としたまちに変わった。現在は、東京都心の近代化と道路整備によりほとんど自然の無い環境下。ここに、数年生活したのち、ふっと365日、土の上を歩いていないことに強烈に感じ得た瞬間があった。自然の無い場、土の無い環境に長期に身を置いたことにより、元々は東京の郊外で幼少期を過していた、子供の頃の植物に関わる記憶が呼び覚まされて来たのである。そんな中、墨田の身近にある少ない植物を良く見てみると、都心における植生の中に、路地で植物を育てている方が多くいることに気付かされた。それは、都市環境では、庭のない家や工場と一体化した長屋が多いため、家の限られた軒先と路地に面したスペースに創意工夫のもと、鉢や発泡スチロールなどに土と植物を入れ、自由に置く「路地園芸」として育て愛でている。下町の路地の植生はとても個性豊かで、ある種、造形的で芸術とも言える凄さと楽しさを、まちを歩く私たちに提供してくれている。もちろん、温暖化が進む都市環境における貴重な植物であり、これからの自然と人との付き合い方の現実と、新たな生活の在り方をまでも表してくれていると言える。下町の「路地園芸」はすでに生活に根付いた文化であり、都市の人にとって欠かせない重要なコミュニケーションツールのひとつなのである。

—

この特殊な墨田の、路地の植生をキーワードにした、コミュニティアートプロジェクトを2007年から毎年試み続けている理由は3つある。まず、戦災から焼け残った今や文化遺産と言える長屋と道が京島・向島エリアに多くあり、そこに符合して、ここにしかない良さ、それは現代の路地を歩く中で、身近な植物をきっかけに見いだせるまちの無限の魅力を、多くの人と共有したいと言うこと。次に、ここ都心の下町から発信することは、未来の自然と人との生き方の投げかけにはとても意義があると確信していること。最後に、村山が作家として心震える感動をこのまちから感じているからである。まち見世では、《路地園芸術祭》を京島と向島地域で開催しているが、「路地園芸は芸術だ」などと大それたことを主張しているわけではない。ただ、現代の都市環境の中で生き抜いて行くには、路地の園芸も芸術と感じ、思い、楽しむ、そんな植物を介した遊び心とゆとりを持つことが、これからもっと必要とされてくるのではないかと思うのである。

—

実施にあたっては、地域にあるものを生かす、使う、地産地消のように、地で生まれたものを地で共有し、その中から新たな気づきを生む仕掛けを心がけている。また、企画者も観者も参加者も、地域の植物と人とまちそのものから学ぶことを大切にしてきた。これからも墨田地域で継続して活動を行いたいと考えているので、初心を忘れること無く、地域で行う活動は生きているものとして、進化進歩させていきたい。

—

最後に、植物や自然を対象にしたプロジェクトを主宰している者として、東日本大震災にふれておかなくてはいけない。美術家として、人間として、震災直後の5月に被災地に立つことを選択した。どうにもできない壮大な自然の力に、多くの犠牲のもと改めて生きることの本質的な気づきを突きつけられた。無彩色になった地から、自然・植物の必要性と重要さを感じ得た時、人のため、自身のため、場のために、私が出来ることを考え、そして「green line project」を立ち上げることになる。被災地と他の地域の総ての地が、緑と共につながって行くようにという願いから、植物に関わる復興支援の活動を、墨田区を基軸に個人で手の届く範囲で行うと決めた。植物を介した、復興支援の活動・作品制作・地域活動は、何やら自然に導かれるように、自然に逆らわないで行うことが一番重要なことなのかなと思う。

村山修二郎｜美術家。1969年東京都生まれ。東京藝術大学大学院博士後期課程壁画二年在籍（2013年2月現在）。植物研究。地域植生リサーチ。植物に内在する初源的な力を抽出した、先進的な作品制作。植物に関わる社会地域活動も展開中。

[CHIRATTO]

DOCUMENT
ちらっとドキュメント

墨東まち見世ならではの
“ちらっと”したこぼれ話をご紹介します

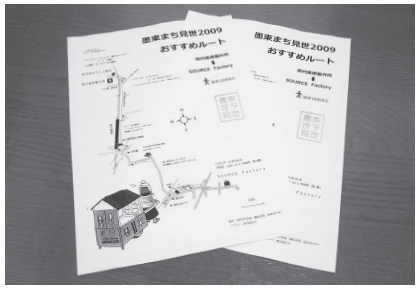
文＝橋本誠

墨東まち見世2009 開会式

まち見世の記念すべきオープニングイベントは京島のキラキラ会館で開催されました。映像上映(ブリギッテ・クラウゼ《向島 TOKYO Back for the future》、杉田このみ《ふと木歩という名をおもう》)、ダンス(深見章代、アキヨバレエ・ダンススクール)などのプログラムが行われ、関係者と地域住民が交流する機会となりました。参加アーティストのEAT&ART TAROがキラキラ橘商店街でセレクトした食材を囲んでパーティーも行われました。

アカリノラウンジ

2009年度参加アーティストの北川貴好が作品(→P.112)設置会場の一角を用いて、開場時間終了後深夜まで集いの場を運営。『チャーシューバー(通称)』『いい風呂の日だよ。北條さんの足場で足湯バー』『スナック現美』『サポーター木村さんによる木村姉妹バー』『このみかんないと』『学ランバー』『爪切りバー 血と肉』『コンカツバー』『三国志バー一番乗り』『ネコミミバー』など、サポーターなどが中心となって様々な企画が行われました。



墨東まち見世2009 おすすめルート

墨東エリアの魅力は裏道なのに、まち見世の来場者は道のりが分かりやすい大通りを通ってしまうことを残念に思ったサポーター有志が、路地に入っても迷いにくく、まち見世に関わるスポットも合わせて紹介されているルートマップを作成・配布しました。曳舟在住の漫画家・魚乃目三太さんのイラストつき。『鳩の街通り商店街⇔現代美術製作所』『現代美術製作所⇔SOURCE Factory』の2パターンが用意され、会場間の移動を演出しました。

みっちゃんち

三宅航太郎の「おしょくじ」スタッフをした流れで2009年度のまち見世サポーターとなった井上美智子さん(みっちゃん)は、2008年から京島のリノベーション長屋に住んでいます。知人のアーティスト・川崎いづみさんの絵画展を自宅で行うことを思いつき、まち見世の会期に合わせて実現しました。住所は非公開だったにも関わらず、《墨東まち見世ロビー》(→P.46)で噂を聞いた人や、路地さんぽの最中に目印を見つけた人が多く訪れたそうです。

東京都市大学 環境情報学部 岡部大介研究室

東京文化発信プロジェクト「学生とアーティストによるアート交流プログラム」をきっかけに、大学研究室で2009年度のまち見世のウェブサイト制作や、ブログによる情報発信を担当。2010年度以降もメンバーを変えながらウェブサイト運営を行いました。また、《墨東大学》(→P.117)などのプログラムへ積極的に参加したり、三宅航太郎の「おしょくじ」を大学のある横浜で展開したり、事務局スタッフとして活躍する学生が現れたりするなどの関わりが続きました。

橘館

2009年度のまち見世サポーターを中心としたメンバーが、岸井大輔の《墨東まち見世ロビー》が行われていたスペースをコミュニティシネマ「橘館」として継続する実行委員会を立ち上げ、《“映画祭”の映画祭 in 39アート》などの上映イベントや展示活動を行いました。2010年度に入ってからは、拠点を持たず京島周辺での上映プロジェクトとして活動を展開。まち見世では《橘館 presents シネマサーカス in 旧曳舟中》(→P.118)を企画しました。

チクタク商店

2009年度のまち見世がきっかけとなり、〈チャレンジスポット!鈴木荘〉の1階にサポーター出身者とスタジオ・シェッラハルの平岡直子、紙工房 堂地堂が共同でコミュニティスペースをオープン。オリジナル作品の制作・オープンアトリエ・トークイベント・まち歩きなどの企画を行いながら約1年にわたって運営されました。その後、紙工房 堂地堂は同「鈴木荘」内で独立して活動を続け、ネットワークプロジェクトにも参加を続けています。

墨東まち見世 かわら版

2010〜2011年度にわたって、主に墨東エリアでまち見世の活動を浸透させることを目的に、ニュースレターが制作・配布されました。メイン会期へ向けた動きやスタッフ＆アーティストの紹介、拠点訪問、イベントの実施報告、「39アート」など地域関連企画の紹介、4コマ漫画、お知らせなどの内容を事務局担当者（市川真弓・中島和成）がテンプレートに沿い、手書き風のフォントを使用してレイアウト。集会所の輪転機などで印刷しました。

ネットワークパーティー

2010年度のまち見世は、アーティストのほかにも多くの拠点運営者やイベント企画者がいたため、企画に取り組む人、それを見に訪れる人いずれにとっても、企画を網羅しにくいという悩みがありました。そこでメイン会期の終盤には、現代美術製作所を会場に企画の報告展示やパフォーマンスなど、各々にプログラムを持ち寄るパーティーを開催。参加者の活動を共有して交流を図る機会ができ、以降も恒例の企画となりました。

東日本大震災

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、まち見世では開催中だった山城大督《トーキョー・テレパシー》（→P.52）と、翌週から開催予定だった長島確《墨田区在住アトレウス家》［Part3×4］（→P.54）が中止となりました。墨東エリアではダメージの大きかった建物も多く、都市開発に伴う区画整理を早める要因のひとつになったとも言われています。以降のまち見世参加企画の中には、チャリティー要素を盛り込む企画も生まれました。

Lat/Long-project その後

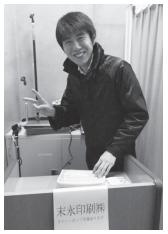
墨東エリア内の15ヶ所で展開された谷山恭子《Lat/Long-project“I'm here. ここにいるよ。”》（→P.56）。その後も和菓子司埼玉屋、珈琲店浮浪雲、BUNKAN（爬虫類館 分館）、玉ノ井カフェ、墨田聖書教会、東向島ふじ公園、宮元児童遊園の7ヶ所には作品が残り、「まちみてマップ」でも紹介されています（本書発行現在）。墨田聖書教会にある作品は、教会の牧師さん手づくりの十字架に緯度と経度が刻印されたものです。

OUR FAVORITE COFFEE SHOP

東向島在住のデザイナー・山内敦史さんは大の珈琲好き。屋内外問わずいろいろな場所に器具を持ち込み、こだわりの手淹れ珈琲を振る舞っています。2012年度のまち見世では、各企画とコラボレーションしながら、出店活動を行っていました。一方では、以前は着物の直し屋だったショーウインドウのある自宅に〈logique〉という名前をつけ、そのウィンドウや居住スペースの一部を開放した展示活動も不定期で行っています。

雨水基地 報告会

2012年度のメイン会期に、住宅街のまっただ中にある一言集会所前の広場で活動を行った《雨水基地》（→P.124）では、活動に関わってくれた人へのお礼と総括を兼ねて、報告お食事会を開催しました。雨水活用にちなんだ水炊き鍋を囲んで子供から大人まで多くの人が集まり、活動の経緯やまちとの関わりの中で感じ考えたこと、今後の展望などが報告され、盛り上がっていました。報告会は、「墨東まち見世塾」にヒントを得て企画したそうです。



墨東まち見世2012 クロージングパーティー

2009年度に開会式が行われたキラキラ会館で、2012年度のメイン会期を締めくくるパーティーが開催されました。会場前の広場には《雨水基地》の屋台、中には《ロジ展》のマイ旗を展示。《墨東文庫［街頭紙芝居編］》の紙芝居実演や、墨田聖書教会の牧師・石川さんのギター演奏などが行われ、傍らではちらっと事務局×くちべた喫茶による『ぼくらの茶BAR』やOUR FAVORITE COFFEE SHOPの珈琲がおもてなし、ikkA、爬虫類館 分館、東向島珈琲店などからフードのケータリングも行われました。会場内の掲示物は「末永印刷」が担当し、あをば荘のメンバーが司会を行うなど裏方も楽しく活躍し、これまでの活動の充実が感じられる楽しいパーティーとなりました。

COLUMN #05

まちみてマップから見える新しい芽

文=長尾聡子
Text: Satoko NAGAO

企画会議

墨東エリアのアートネットワークを支えるまち見世企画会議。それは「大人」な集まりである。毎回の顔ぶれは多彩だ。学生、ものづくりのエキスパート、日中の仕事の一方で自ら活動を続ける墨東の住人、まちに魅せられて通うアーティストなど、決して強制されたわけではないのにいろんな価値観を持つ人が定期的に集まる。進行担当も参加者で分担し、各自の個性がにじみ出る。始まれば2時間では足りない。初参加の人も次第に互いのキャラクターや活動の関心、墨東の最新情報がわかる。

まち見世の根幹となる「ネットワークプロジェクト」の原点がこんな集まりである。

特筆すべきは彼らの持つ多様な相談機能である。例えば、作品制作や設置公開の場所、材料、加工、サポート、その他様々な「〜したい」を投げかければ、「私の知人が」、「うちの工場で」と日常会話のテンポでヒントが返ってくる。まさに生きた情報が貯蔵されている。この応答性が、様々なレンジでまちに関わって活動に取り組む人へ、励みとなってあたたかく染みこんでいるのではないか。アートを通じて形成されたコミュニティが活きていることを感じる。

—

4年かけて蓄積された社会関係資本

事務局のコアメンバーが「まち見世はプロデューサー制ではない」と口にするのを度々聞いたが、トップダウンではなくボトムアップ方式が目指されている。まち見世は一見、「時間がかかって決まらない」かもしれない現在のスタイルを、4年間の変遷を経て選びつつある。

まち見世2012の振り返り会で、人と人との関係性が地域に活力を生み出すという考え方を「社会関係資本」(「社会資本」の語に「関係」が入る)というが、まち見世は4年間を通してこれを綿々と蓄積し、新しいスタイルを自らの手で作り上げたのだ、と評価する言葉があった。このプロセス自体がプロジェクトであり、「アート」じゃないと言われていたこともひょっとしたら「アート」そのものかもしれない、と。

生活圏と隣り合って主体的に楽しむことを重要視してきたその姿は、まちをアートで有名にしたいという意識とはひと味違う。このエリアがすでに歴史と奥深い魅力を湛えており、東京という近代都市の中にあって人と人のつながりや距離感が今も感じられるユニークさの上に立ち上がっているのではないだろうか。

—

運営母体(舞台の裏方)

「自主的運営」というのは、聞こえはよいが、放っておけば回らない。運営に「工夫」は欠かせない。

最終年度の成果物としてプロジェクトのインフラともいえる『BOKU-to-TekuTeku まちみてマップ』がある。これも、企画会議で最終的に残ったネーミング「BOKU-to-TekuTeku」と「まちみてマップ」の2案のどちらかだけを採るのではなくコンセプトも一緒に合体してしまったものだ。ボトムアップの見本のような決まり方であったが、このような方式を後押しし、制作で最後の受け皿(プラットフォーム)の役割を果たしたのは事務局のコアメンバーだった。監修は平成24年度に向島学会内に新設された「墨東まち見世部会」。中長期的な継続も見据え、弊室の提案をふまえてのマップ制作であった。この連携に象徴される運営方式は、この4年間に有形無形の手で育て上げられたものだと思う。この財産が、墨東エリアでこれからも効力を発揮していくよう、新たな試みをつなぎたいと願う。

長尾聡子 | 東京アートポイント計画 プログラムオフィサー。〈墨東まち見世2012〉を担当。東京藝術大学大学院音楽研究科芸術環境創造分野修了後、2008年より横浜市泉区民文化センターに勤務。2012年より現職。

［墨東まち見世振り返り会］

墨田のまちと アートプロジェクトの これから

編集＝阿部謙一＋編集部

〈墨東まち見世2012〉メイン会期終了の約2ヶ月後、まち見世が2009年に開会式を行ったキラキラ会館にて、『墨東まち見世2012メイン会期振り返り会』が開催されました。プロジェクトの実施報告、今後へつなげるグループトークの後に、その場にいる全員でディスカッションを実施。メイン会期終盤のまち見世塾で問われたテーマ「まちにアートは必要ですか?」を引き継ぐ話題や、墨東エリアにおけるこれからの活動のあり方について、アーティスト・事務局・まち見世編集部・地元協力者と様々な立場からの発言がありました。墨田のまちとアートの歴史的な関わりと、まち見世の4年間がもたらした「今」と「これから」が見えてきた全体ディスカッションの内容を抜粋してご紹介します。

司会：樋口裕一（アーティスト）　参加者：EAT&ART TARO（アーティスト）、下平千夏（アーティスト）、清水永子（事務局）、橋本誠（墨東まち見世編集部）、大橋加誉（「どこにいるかわからない」展）、フジシロヤスシ（ちらっと事務局）、昆野純子（こすみ図書）、佐藤史治（あをば荘）、曽我高明（事務局）、北條元康（向島学会）、青木威明（アトリエ犬屋敷）、吉成隆（吉成工業）ほか計28人

樋口｜この振り返り会では、「地域にとってアートは必要か?」ということと、今後、墨田ならではのアートというか、活動をどんなかたちで発信していけばいいだろうかというアイデアについて、話せたらと思います。まず、TAROさんからお願いできますか。

TARO｜前回のまち見世塾では、「まちにアートは必要ですか?」というテーマでみんなと話をしましたが、僕はまず、墨田区はいろんなイベントをやっているエリアだなと思っています。NPOレベルで動いているものに限らず、地域でやっているいろんなイベントのチラシがある。アートっぽいものもあるし、全然違うものもあるし、昔からやってるおばちゃんの縁日のようなちょっとゆるいものから、カルチャークラブみたいなものまでいっぱいあります。そういったものとどう棲み分けていくか、一緒にやっていくか、もしくはそれらと違うことをやらなければいけないのか。僕の考えでは、アートと称してプロジェクトをしていくならば、他ではできないことをする必要があるんじゃないかと思います。何か差を考えていかないと、ほかの地域プロジェクトと同じになってしまう。それは地域に必要かもしれないけど、アートでなくてもその必要を満たしてくれるものがあるし、増えてきているような気もしているんです。必ずしもアートと括らないのもありだと思っているので、それでもアートプロジェクトとして続けたいのかどうかということは、考えてみていいと思います。

樋口｜いまの話を受けて、アートプロジェクトというものの存在について、下平さんからも話していただきたいと思います。

下平｜語弊があるかもしれませんが、私自身はアートプロジェクトをやっていきたいわけではないです。まち見世が「アートプロジェクト」であるべきかどうかというと、べつに「アート」を打ち出す必要はないかもしれない。「プロジェクト」ではなく普通に展覧会があってもいいし、その内容も必ずしも「アート」として囲う必要はないと思います。ただ、このまちでアートをやるのは絶対におもしろいと私は思うので、アートをやっていく人がいていいし、やらなくなる人もいていいというような、そういうスタンスです。だから、それがこのまちに本当に必要かどうかはわかりませんが、私個人としては、商店街に空いてるスペースがあったら、そこで展示はしてみたいとは思います。

樋口｜他との差別化というか、墨東ならではという部分をアピールしていくにあたっては、それを自分たちで共有しながら打ち出していく必要があるかと思うんですが、TAROさんが思う墨東らしさというのは、どういうところですか。

TARO｜アートっぽい企画もあるし、そうじゃないのもあると思うんだけど、意外とアートじゃないもので盛り上がったりしますよね。そういうのを混ぜてもアート

プロジェクトと言っていいのかどうかという考え方は確かにあるけど、目標をはっきりさせすぎると、ほかの要素が入りにくくなってしまう。アートではない企画が増えすぎると、どんどんずれていってしまうのかな。どうなんでしょうか。

清水｜事務局をやりつつ4年間見てきましたが、現在では、私のなかのアートという間口がすごく広くなって、それぞれの人の表現したい何かがアーティスティックな動きであるならば、それは他の方と共有できるし、ある種の感動とかショック、インパクトがあると信じています。墨東でも、いくつかそういう空気が出ていると思うんですね。だから、「それもアートなのね」という時代が来ているんだと思います。でも、何でもありとはちょっと違うとも思うんですね。墨東とほかの地域との差異ということでいえば、それはそこに住んでいる、たたずんでいる、動いている人たちが自ずと作り上げていくものだと感じています。アーティストが外から来ることが悪いとか良いとかいうこととは、話は全然別のことになりますが。

樋口｜墨東の外から見た視点というのも重要かと思いますので、今回、編集部でドキュメントをまとめている橋本さんから、ほかのプロジェクトとの比較も含めてお話しいただけますか。

橋本｜2011年度までは東京文化発信プロジェクトの担当スタッフとして関わりがあったので、はたしてきちんと外からの視点を保てているのかというと自信がないです。ただ、当事者と言うにはやはり距離があるし、編集部メンバーも含めて、当事者でないからこそ見えたこと、考えさせられたことは確かにいろいろありますね。こうしたプロジェクトはいろんな地域で行われているわけですが、生活とすごく近いというのが、墨東のいちばんの魅力ではないでしょうか。それを発見したアーティストのアプローチが、本当に普段生活している、活動している人たちの手に支えられて、花開いている。新里さんや谷山さんの「100日プロジェクト」もそうだと思います。彼女たちの視点や手法ありきでありながら、様々な場面で支えてくれる人がいたからできた部分が非常に大きい。「ネットワークプロジェクト」に関しても、なかには外から見たときに「内輪的に楽しそう」で終わってしまう企画もあるとは思うんですが、その輪に入らせてもらえそうだという雰囲気がいつもあると思います。関わりたいという意志さえあれば、プロジェクトや地域に一歩深く入っていける感じがあるというのが、今の墨東の魅力だなと感じています。

樋口｜僕たちは今年度、《雨水基地》というプロジェクトをしてきました。もともと雨水利用をやってきた下地があって思いついたわけですが、一言会や佐原さんから、彼らがやってきた歴史的なことを学んだり、協力していただいたりしながら進めることができたので、墨東以外ではできなかったという思いはあります。でも、自分としては、がっつりアートというところと、アートという冠をなしにしたコミュニケーションのイベントみたいなところの間で、揺れていた部分もあったのはたしかです。でも、こうした多様性、その両軸があったからこそ、まち見世はおもしろかったような気がしてるんですね。みんなそれぞれがスタンスに迷いつつ、お互いがコミュニケーションをとりながら、考え方の違う人たちがゆるくつながれるというのはおもしろいと思いました。いまのは僕の意見ですが、ここで、まち見世以降のイベントがこれからどんなふうになってほしいか、もともと地元出身で、アートプロジェクトを見ているうちに自分が企画する側になったという大橋さんの意見も聞いてみたいのですが。

大橋｜正直、私にはあまりそういうビジョンのようなものはありません。〈現代美術製作所〉がオープンしたり、〈RICE+〉があったりしたということを知る、ここで起きていることの証人は増えていったけれども、ずっと活動が続いていたかといえば、私の知るかぎりでは途切れたときもあったらしいという解釈なんですね。だから、いま躍起になってプロジェクトを続けなきゃとは思わないし、どうせ続いていくだろうとも思っています。

フジシロ｜私も大橋さんのように住んで15年ぐらい経つので、地元意識があります。それで大きなプロジェクトを続けるということでなくてもいいかなという、同じような意見です。ささやかな活動でも、マイペースになにかを続けることができるだろうと思ってます。とにかく、いつも思っているのは、おもしろいことをずっと続けていきたいということなんです。ただ、まち見世みたいに負担金などを使ってなにかをやるというときには、やる側にそれをできる体制がないとだめだろうという気はしてします。

樋口｜昆野さんはいかがですか。

昆野｜私は、アンケートには「プロジェクトを続けたほうがいい」と書いたんですけど、枠組みを整備するということではなくて、もう土壌はできてきているし、みんながそれぞれに活動を継続していくことはできるんじゃないかと思っています。ただ、〈39アート〉みたいに、みんなが知り合い同士で協力しているところを示すことも必要で、それで新しい仲間が増えてくると思うし、新しい仲間というのはすごく重要だと思うんですね。ここに住んで「墨東は最高だ」みたいなのも幸せなことですが、生活とアートが密着していて、その幸せな状況を確認できるような生活ができたらいいと思います。それを「アートが必要だ」と言うべきなのかはわからないけれど、アートと呼びたくなるのは、なんとなくわかります。

樋口｜この流れで、新しく墨田に引っ越してきた佐藤さんから、生活の場と制作の場を墨田に置いたことについて伺いたいですね。

佐藤｜僕は、大橋さんとか藤代さんはすごいと思っています。「地域の人と関係を結ぶ」という言い方がありますけど、僕は「地域の人」って何なんだという気もしているんですね。「地域の人とアートを通して関係を結んでハッピー」みたいな構造では、地域の人に実際には開かれていかないんじゃないかと思っています。でも、そういったふたつの対立とは別のところで、地域のほうから立ち上がってくるというのはおもしろいし、共感することも多いので、僕は墨田に引っ越してきたわけです。もともと出身は奈良で、縁もゆかりもないんですけど、そういうことに惹かれて入ってきて、そういう人たちがなにを考えているんだろうかということが気になっています。

曽我｜いまの話はとてもおもしろいですね。たいていのアートプロジェクトというのは上から降ってきて、外から来た人がやって、地域の人たちはまちづくりにつながりましたね、成果が上がりましたねということになる。だけど、墨田ではその段階はとっくに終わっていて、まちなかにアーティストやアートを好きな人、あるいは自分でやっちゃう人もふつうに住んでいる。だから、生半可なアーティストがいても別に驚かないし、「また、これやってんの？」みたいな感じになるわけですよ。墨田は、だいぶ成熟したんだなと思います。それから大橋さんも言ったけど、途切れ途切れとはいえ、支えている人がたくさんいる。なおかつ、まちづくりを1980年代の終わりからずっとやっていますから、外から来た人を受け入れてるんですよね。アートのイベントも見慣れてるし、あんまり驚かない。だからできている部分もあったと感じます。でも、だからといってアートがわかっているというわけでは決してないので、いろんな試行錯誤もあります。大事なのは、このまちが内向きに閉じてるんじゃなくて外に開いているということです。内側で楽しんでいるようにも見えるんだけど、そこに入れるような仕掛けはちゃんとあって、外の人間を排除しないようにしているというところが、けっこう重要かなと僕は思いました。どんなプロジェクトでもそうです。なにか自分たちだけで鍋を食べて終わりみたいな感じになりがちなところに誰でも入ってきていいし、お花見に酔っ払いが入ってきて一緒に飲むような、場を共有できる余裕がちょっとあるかなという感じです。それは、まち見世の4年間で、あるいはそれ以前から作ってきたところなのかもしれない。意識的なのか無意識なのか、そういう体質がこのまちにはあるんだろうし、担い手が徐々にそういうふうになってきたのかもしれない。北條さんたちは、RICE+などの活動でいろいろ受け入れてきたわけですよね。

北條｜受け入れてきたということではないかな。住んだ人たちとは当たり前に仲よくなるし、お金の関係ではなく、もっと肝心なもののやりとりで関係ができていくことがわかっている人たちなら、何かを共有できるのかなと思います。このあいだ、餅つきをしたら、ぶらっといろんな人が集まってきて、そこで「わあ、おいしそうね」「食べたいわ」という人にはあげるんですけど、「売ってるんですか?」という人には「売り物じゃないんですよね」って、なんかそういうことなのかな。これはアートではないけど、何かそういうものだよなって思う。商売じゃないし、お金をもらうという感覚が、だんだん嫌になってくるんだよね。

清水｜すごく下町的よね。

北條｜下町的というか、もともといる人たちは、何かをちょっと借りるとか、あるものはみんなで分けるとか、そういう感覚だったんだと思うんですね。近所の子供とかがうちに来れば、お茶を飲んでお菓子を食べて帰っていくし、お互いに助け合うということが自然にできていたんでしょうね。だけど、都市化が進んで、いろんなところから人が入ってくるようになって、じつは入ってきてる人が開いてないことも多いんですよ。開いて入ってきてる人たちは、やっぱり受け入れてもらえてるんです。アーティストも同じで、受け入れてもらえない人は閉じている。よく言われるんです。東京者は冷たい人間だって。べつに冷たいわけではなくて、頼ってくれたら、本当に大変だと思ったら、みんなが手を貸しますよ。このあいだの雪のときもそうです。ここに住んでる、拠点を持ってる人たちはおそらく、できるかぎり周りの家まで除雪してると思うんですけど、そういう積み重ねで道が通れるようになってくる。シャッター商店街とかは誰もいないから除雪してないし、そこは人が通らない。悪循環ですよね。お店を閉めてても、商店街じゃなくても、除雪されてるところは人が通る。それはどういうことかというと、お金のやりとりとは違ったところで、人のことを考えるということなんです。

樋口｜今回のアンケートを読んで思ったのは、まち見世に関わっている人同志のコミュニケーションは、かなりいい流れまで来ている、充実しているということでした。でも、広報の問題なのか、自分たちのネットワークのスタンスが関係しているのかわからないんですが、まち見世の存在を第三者にまではなかなかアピールできていないんじゃないかとも思いました。まち見世は企画会議の頃から、外に対して発信していくより、まずは地元で知ってもらうことという話はどんどん出たんです。でも、それを外に発信して外部から人が来てくれたらハッピーなのか、ひょっとしたら、内輪的なところでだんだん浸透していくだけが理想型かもしれないという考え方もある。そのあたりに関して、思うところがあるという方はいらっしゃいませんか。

TARO｜僕は、べつに誰かに見てもらう必要もないのではという気がしています。すごく有名な人が来ているわけでもなかったりするし、見てもらうことが重要だという話もあんまり出てこない。期間を設けてチラシを作って…ということ自体が、実はいらないかもしれないなあと思うんです。それでも、〈float〉とか〈あをば荘〉とかが出てきたので、次のそういう人たちを呼び込むためには同じ手を使っていけばいいのかもしれないし、もしかしたらもっといいやり方があるかもしれない。もちろん、オープンにするから知らない人が来てくれるわけだけど、別のやり方でもって、外から来た人の手で次のあをば荘ができちゃう仕組みというのは考えてもいい。それは、期間を設けてチラシを配って、アートプロジェクトをしますということではないかもしれないとは、なんとなく思っています。

樋口｜青木さんは、〈爬虫類館分館〉と喫茶店の夜のマスターをやっていて、〈アトリエ犬屋敷〉という立派な拠点も始めて、これからいろいろとやっていこうというところですが、発信ということについて、どう考えていますか。

青木｜2009年に分館を始めるとき、商店街のすぐ近くで岸井大輔さんが《墨東まち見世ロビー》をやっていたんですが、僕らはバタバタで余裕がなかったので関わることができなかったんです。でも、友だち同士の遊びの延長で、レイブパーティーとか、洞窟にDJセットを持ち込んで、踊って、酒を飲んで、といったストリートの動きみたいなことをしていました。社会に対して不満があって、自分たちなりの生き方というか、なにか試してみたかったという気持ちはあったんです。それが、2011年からぐっとお近づきになれて、自分も関わらせてもらったことで、まち見世がどういったものなのかを初めて知ったし、すごくよかったと思ってます。犬屋敷は、空き家状態だった印刷工場という場所なんですけど、分館で出会った商店街のつながりとか、家族ぐるみのおばあさんやおじいさんのつながりみたいなのも、うまく活かせるような動きをしていきたいと思っています。リーズナブルに場所を提供して、一緒になる方々との化学変化がその場で生まれ、少しずついろんな人の個性がそこに染みこんでいけばいいし、5年契約なので、4年後までには、場としてのある程度の完成を目指しています。そして、僕は電器屋なので、今後は照明器具とかのスクラップや廃材から生まれるもの、たとえばアイデアグッズみたいなものをコツコツ作ったり、販売したりしていきたいですね。ときにはイベントで使ってもらったりしながら、そういう「空間を愛でる」ということを続けていきたいと考えています。

樋口｜吉成さんも、まち見世の感想をお願いします。

吉成｜僕はアーティストでもないし、ただここに住んで、生業としてものを作っている。アーティストの方々のこういうものが作りたいというのを実現させてあげるという、シンプルな関係で、ただそれだけのスタンスです。その過程で「こいつら、おもしろいな」と思っただけで、おもしろくなかったら、たぶん手伝わない。何がおもしろいかというと、作った作品に責任を持ちますよね。当たり前だよね、自分の名前が入るんだから。だから、まちに関わろうが関わらなかろうが、アーティストというポジションはあると思います。そこには、結構冷たいものがあっていいと思う。それで、お裾分けできるというのもありだろうけど、どこかで自分がアーティストだということは忘れないでいてほしい。その立場で見せるものがきっとあるから。それがこのまちに必要か必要じゃないかはわかりません。しかも、僕らは目が肥えてきちゃってるから、曽我さんも言ったように、ちょっとしたものを見たって驚かない。それを許容範囲が広いというふうに外からは見えるのかもしれないけど、おもしろいものを見たいというのは、たぶん一緒です。それで、僕のスタンスは、ものを作る人間を増やしてほしい。このまちは結構ものを作ってきて、プロデュース、要するに製作はしたけれども、クリエイトしてきたかというとそうでもない。クリエイトしたものを真似ることは上手いという、いまだに昔の日本型のかたちです。だからこそ、アーティストが発想したものを見たいんです。それと、ものづくりといってるけれども、結局は人づくりだと思っています。まずは暮らす、結婚する、子供ができるとなったときに初めて、このまちに関われるのか、このまちに根ざすのかということが具体性を持ってくる。たとえば僕みたいに、建物の上に住んで下で仕事をするというようなかたちをとった瞬間に、地域と関わらざるを得なくなり、地域への責任も持たざるを得ない。お互い様っていうかたちは絶対に出てきます。大企業がない代わりに家族企業が多いですから、ゆるいつながりだとしても、お互いのことがわかるという意味で、それもやっぱりお互い様ということになる。今年度の雨水基地もそうだし、あをば荘もそうなんだけど、僕らは以前に似たものを見てるから、新しいものだとは思っていません。でも、新しい人がやっているとは思っています。そこは結構大事なこと。人が変えていくということが根本にあるから、今後、このまちがどう変わっていくかを見たいし、ここから去る人がいても、ふるさとみたいに「墨田ってよかったね」と思い出すまちにはなってほしいと思います。

平成25年1月20日 キラキラ会館にて収録

BOKUTO MACHI MISE 2009-2012 | Summary

墨東まち見世実施概要

BOKUTO MACHI MISE

2009

まちが遊ぶ100日間

東京都と東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開する〈東京アートポイント計画〉の立ち上げに合わせて開始。特定非営利活動法人向島学会内に設けられた事務局と、東京アートポイント計画により、企画内容が検討され、会期を100日間と設定しました。これまでに地域で活動実績のあるアーティストらに加えて、異なるタイプのアーティストのプロジェクトも取り入れ17組の手による企画を行うことや、まちなかのコミュニケーション・デザイン全体を担当するデザイナーを起用することなどが決められました。サポーターや広報活動のために制作された「墨東まち見世インフォメーション屋台」が活躍。東京文化発信プロジェクトによる「学生とアーティストによるアート交流プログラム」の一環として、墨東エリアをフィールドワークの場に設定した東京都市大学環境情報学部岡部研究室が公式ウェブサイトを制作・運営するとともに、サポーターと一緒にインターネット上で活動の様子を発信しました。会期終了後も拠点の運営や不定期でのイベント実施などとして継続する活動が多く、次年度以降の足がかりができた年となりました。

2009年度（平成21年度）

主な活動

◎「まちが遊ぶ100日間」をテーマに17組のアーティストらによる企画を実施
◎100日間の会期と16日間のコア期間を設定
◎「墨東まち見世インフォメーション屋台」の制作
◎公式ウェブサイトの制作・運営
◎継続性のある活動や拠点を形成

実施データ

会期：平成21年9月1日〜12月9日
コア期間：平成21年11月21日〜12月6日
主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（財団法人東京都歴史文化財団※）、特定非営利活動法人向島学会
後援：墨田区、一般社団法人墨田区観光協会、財団法人墨田まちづくり公社
協力：アサヒビール株式会社
事務局：末永健治、住中浩史、曽我高明、遠山元気、真野洋介
広報ツールデザイン：森垣賢、春山優香利
ウェブ制作・運営：東京都市大学環境情報学部岡部研究室
東京アートポイント計画：森司（ディレクター）、石田喜美、橋本誠

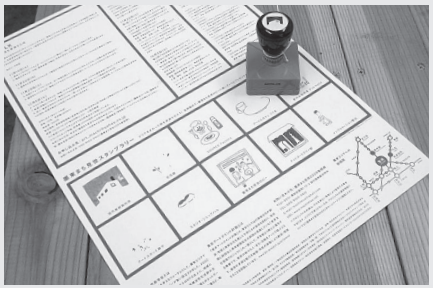
※2010年度より公益財団法人へ移行

墨東まち見世2009ポスター

東武線曳舟駅前のビルボード

各拠点に設置されたのぼり

墨東まち見世インフォメーション屋台　写真：太田拓実
※第56回TDC賞（56th Annual Type Directors Club）受賞
http://tdc.org



スタンプラリー　イラスト：おいたまい

岸井大輔〈墨東まち見世ロビー〉と三宅航太郎

BOKUTO MACHI MISE

2010

ハロー, ニュートーキョー!

通年展開へと移行し、企画の柱を「ネットワークプロジェクト」と「100日プロジェクト」にするという以降の大枠が出来上がりました。「ネットワークプロジェクト」では、前年度の参加者だけではなく新しく活動の担い手になっていただけそうな方にも積極的に声をかけ、企画会議を立ち上げるほか、事務局として運営に関わっていただける方を募集しました。企画も募集型にして選考の仕組みも企画会議の中で決定するというプロセスを踏み、時間をかけて決められました。「100日プロジェクト」では期間をずらして2組のアーティストを招聘。ひと組目はメイン会期中に、ふた組目は地域のネットワークの中で自主的に立ち上げられた〈39アート in 向島〉に合わせて発表を行うことができるよう、計画されました。また、一軒家を活用した演劇プログラム《墨田区在住アトレウス家》も招聘企画として通年で展開。「旧アトレウス家」と称された家は企画会議や事務局が活動する拠点として、メイン会期中は「まち見世案内所」としても活用されました。その他、「墨東まち見世塾」、「墨東まち見世さんぽ」をシリーズ化。かわら版を制作して地域向けの新しい情報発信の手法も試みられました。

2010年度（平成22年度）

主な活動

◎通年展開を意識した企画会議や事務局の立ち上げ
◎「ハロー, ニュートーキョー!」をテーマに20のネットワークプロジェクトを実施
◎100日プロジェクト2組と《墨田区在住アトレウス家》で計3組の招聘プログラムを実施
◎53日間のメイン会期を設定
◎メイン会期中にレンタサイクルを実施
◎旧アトレウス家を活動拠点やまち見世案内所として活用
◎「墨東まち見世塾」「墨東まち見世さんぽ」をシリーズ展開
◎かわら版の制作

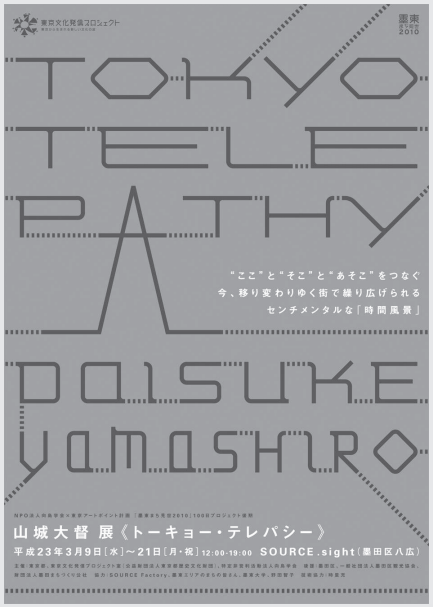
実施データ

メイン会期：平成22年10月2日〜11月23日
主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人向島学会
後援：墨田区、一般社団法人墨田区観光協会、財団法人墨田まちづくり公社
協力：アサヒビール株式会社
事務局：石田龍太郎、市川真弓、大橋加誉、末永健治
曽我高明、遠山元気、真野洋介、村澤りな
広報ツールデザイン：森垣賢、福岡泰隆
ウェブ制作・運営：東京都市大学環境情報学部岡部研究室
東京アートポイント計画：森司（ディレクター）、石田喜美、橋本誠（プログラムオフィサー）

墨東まち見世2010リーフレット

墨東まち見世さんぽフライヤー　イラスト：おいたまい

池田光宏《by the Window“墨東バージョン”》フライヤー



山城大督《トーキョー・テレパシー》フライヤー

BOKUTO MACHI MISE

2011

気がつけば、お向かいさんはアーティスト

前年度に引き続き、「ネットワークプロジェクト」と「100日プロジェクト」を中心に展開。「ネットワークプロジェクト」では、一定の条件を満たしていれば選考なしでの参加が認められるようになり、より多様な企画者の参加を促すことになりました。また、企画会議や「墨東まち見世塾」の会場として、地域の様々なアート拠点を活用し、事務局と参加メンバーがともに進行することで地域で活動する者同士の相互理解やネットワークの充実を図ることができました。メイン会期中は〈チャレンジスポット！鈴木荘〉が拠点となり、まち見世案内所として、また会場探しを行っていた企画の展示場所としても活用されました。

案内所が置かれたチャレンジスポット!鈴木荘

2011年度（平成23年度）

主な活動

◎企画会議や事務局活動の充実
◎地域住人の企画を含む20のネットワークプロジェクトを実施
◎100日プロジェクトとして1組のアーティストを招聘
◎34日間のメイン会期を設定
◎鳩の街通り商店街の〈チャレンジスポット!鈴木荘〉を活動拠点やまち見世案内所として活用
◎「墨東まち見世塾」「墨東まち見世さんぽ」をシリーズ展開

実施データ

メイン会期：平成23年10月21日～11月23日
主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人向島学会
後援：墨田区、一般社団法人墨田区観光協会、財団法人墨田まちづくり公社
協力：アサヒビール株式会社
事務局：石田龍太郎、大崎敬志朗、清水永子、末永健治、曽我高明、中島和成、野村美里、真野洋介、ヨネザワエリカ
広報ツールデザイン：森垣賢、永松大剛
ウェブ制作・運営：東京都市大学環境情報学部岡部研究室
東京アートポイント計画：森司（ディレクター）、芦部玲奈、橋本誠（プログラムオフィサー）

墨東まち見世2011ポスター

墨東まち見世さんぽ＋墨東まち見世塾フライヤー

谷山恭子《Lat/Long-project》フライヤー

墨東まち見世2011ウェブサイト

BOKUTO MACHI MISE

2012

前年度に引き続き、「ネットワークプロジェクト」と「100日プロジェクト」を中心に展開。「ネットワークプロジェクト」は、まち見世が主催する「特別企画」との連携で、企画団体が主催する「参加企画」を同時開催。まち見世に関わる人々や拠点がより多様な企画展開を行える枠組みと、それらのネットワークをいかに充実させ発信するかという点が重視されました。そのひとつの手法として、地域のアート拠点や団体を一覧することのできる「まちみてマップ」が制作され、それぞれが日常的に活動する際のツールとして活用されました。また、まち見世の4年間のドキュメント制作を視野に入れた「墨東まち見世編集塾」が展開されました。

墨東まち見世案内所（旧墨東まち見世ロビー）

2012年度（平成24年度）

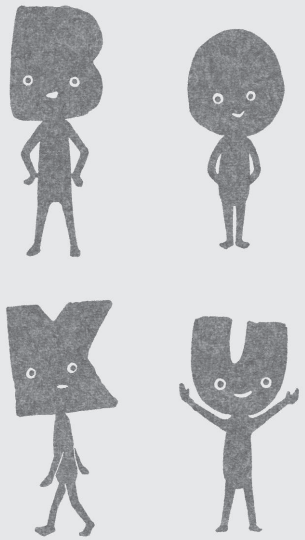
主な活動

◎『BOKU-to-TekuTekuまちみてマップ』を制作
◎ネットワークプロジェクトは4つの特別企画とともに15の参加企画を同時開催
◎100日プロジェクトとして1組のアーティストを招聘
◎38日間のメイン会期を設定
◎キラキラ橘商店街の旧墨東まち見世ロビーを活動拠点やまち見世案内所として活用
◎「墨東まち見世塾」「墨東まち見世さんぽ」「墨東まち見世編集塾」をシリーズ展開

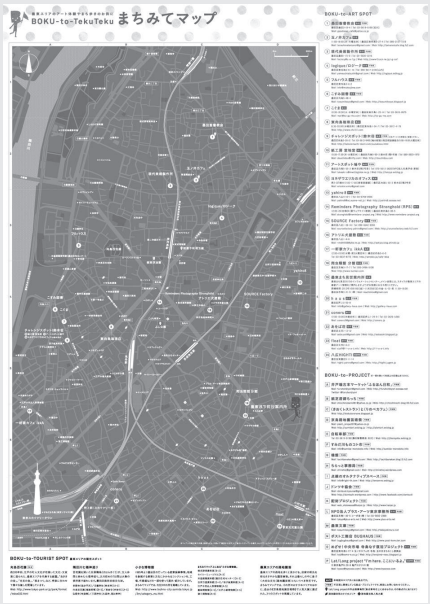
実施データ

メイン会期：平成24年10月19日〜11月25日
主催：東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人向島学会
後援：墨田区、一般社団法人墨田区観光協会、財団法人墨田まちづくり公社
協力：アサヒビール株式会社
事務局：石田龍太郎、清水永子、末永健治、曽我高明、野村美里、真野洋介、吉川晃司、ヨネザワエリカ
広報ツールデザイン：森垣賢、新里碧
ウェブ制作・運営：東京都市大学環境情報学部岡部研究室
東京アートポイント計画：森司（ディレクター）、芦部玲奈、長尾聡子（プログラムオフィサー）

墨東まち見世2012フライヤー


マップ名の「BOKU」にちなみ生まれたキャラクター　イラスト：市原茉子

BOKU-to-TekuTekuまちみてマップ 表面



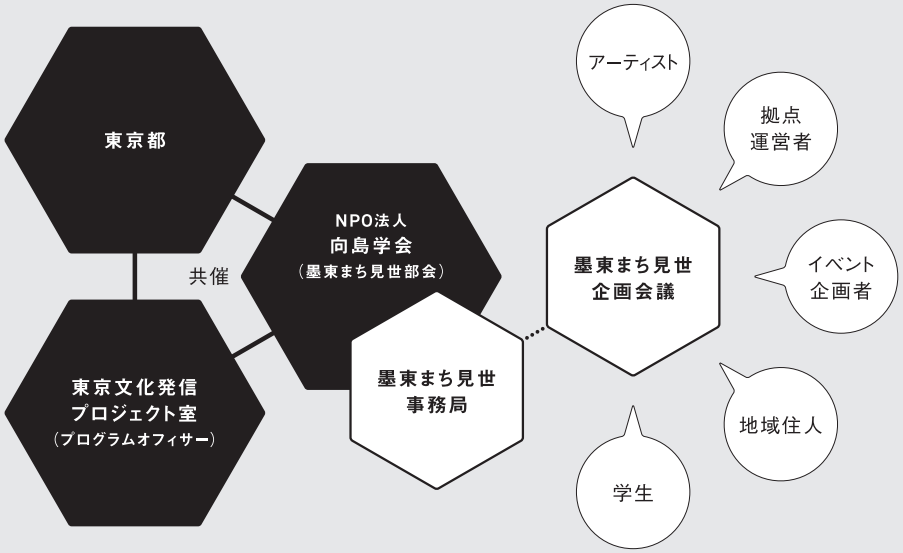
BOKU-to-TekuTekuまちみてマップ 裏面

BOKUTO MACHI MISE

運営体制

〈墨東まち見世〉は、主催三者のうち特定非営利活動法人向島学会を中心に組織された事務局が中心となり、企画運営などを実施しています。開始当初は向島学会担当者と東京文化発信プロジェクト室担当者(東京アートポイント計画 ディレクター、プログラムオフィサー)により事業の方針から具体的なプログラム内容までが検討されていました。2010年度に「墨東まち見世企画会議」が立ち上げられて以降は、主催者に加え、地域住人や拠点運営者、アーティストなどの参加者とのネットワークを構築しながら、事業の方向性やプログラム内容が検討されるようになりました。2012年度は向島学会内に「墨東まち見世部会」が立ち上げられ、継続的な活動も視野に入れた運営が行われました。

まち見世の参加者が集う企画会議の様子



東京都

東京文化発信プロジェクト室

(公益財団法人東京都歴史文化財団)

東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、〈東京文化発信プロジェクト〉の一環として〈東京アートポイント計画〉を展開しています。NPO法人等と協働し、事業の企画運営や自治体・公的団体など関係機関との調整、評価(検証)に関わる仕組みづくりなどを行い、人材育成事業〈Tokyo Art Research Lab〉などを通して成果や課題を共有しています。

—

特定非営利活動法人向島学会

(墨東まち見世部会)

「墨東まち見世事務局」を設置し、東京文化発信プロジェクト室と共に事業の企画運営を担っています。まちづくりなど、普段から地域に根ざした活動に取り組むNPO法人として他の事業や団体との連携を図る活動も行っています。

—

墨東まち見世事務局

主催者間で協議された事業の方向性やプログラム内容をふまえ、具体的な検討や実施に関わる業務を行っています。向島学会担当者だけではなく、地域住人や学生など、墨東エリアでの活動やアートプロジェクトに興味のあるメンバーにより組織されています。「墨東まち見世企画会議」を開催し、地域のネットワーク形成を推進しています。

—

墨東まち見世企画会議

墨東まち見世の活動趣旨に共感し、協働する意思のある方であれば参加できる、話し合いの場づくりを主とした会議。メイン会期前後などには週1回、その他の期間などでも月1回程度の会を開催しています。

［関連企画］

墨東まち見世塾

まちとアートをテーマにゲストの活動を知る勉強会、テーマについて意見交換をする場、招聘プログラムの状況を共有する場など、まち見世の展開に合わせて様々な趣旨でトークイベントの企画を行いました。

2009年度

アーティストが住むまちづくり
実施日：平成21年11月28日
会場：寺島集会所
トーク：スタジオ・シェッラハル 栗原汐里（アーティスト）、SOURCE Factory 下平千夏（アーティスト）、北川貴好（アーティスト）、野田明宏（一寺言問を防災のまちにする会）ほか
司会：真野洋介（墨東まち見世事務局）
コメンテーター：渡辺慎二（向島学会）
※墨東まち見世・交流のサロンとして実施

96日目のふりかえりトーク
実施日：平成21年11月5日
会場：墨田聖書教会
トーク：岸井大輔（アーティスト）、住中浩史（墨東まち見世事務局）、石田喜美（東京アートポイント計画）ほか
司会：曽我高明（墨東まち見世事務局）
※墨東まち見世・交流のサロンとして実施

地域密着型アートプロジェクトの可能性
実施日：平成21年11月23日
会場：ユートリヤ2階 マスターホール

クロストーク「まち で／が 遊べたか?!」
トーク：曽我高明（墨東まち見世事務局）×住中浩史（墨東まち見世事務局）×パルコキノシタ（アーティスト）
司会：橋本誠（東京アートポイント計画）

クロストーク「まちなかアートプロジェクトのコミュニケーション・デザイン」
トーク：森垣賢（グラフィックデザイナー）×岡部大介（東京都市大学講師）
司会：森司（東京アートポイント計画 ディレクター）

クロストーク「4人のサポーターの本音トーク」
トーク：遠山元気×北条元康×井上美智子×大橋加誉（墨東まち見世サポーター）
司会：石田喜美（東京アートポイント計画）

クロストーク「社会と関わるアートとは？」
トーク：岸井大輔（アーティスト）×藤井光（アーティスト）
司会：森司（東京アートポイント計画 ディレクター）

報告「イザ!カエルキャラバン! in 東京 vol.1―寺島」
報告者：野田明宏（一寺言問を防災のまちにする会）

車座談議「市井における新しいアートの役割～墨東の芸術見世は、まちやあなたのなにかを変えるのか？」
講演：熊倉純子（東京藝術大学 准教授）
※東京アートポイント計画インターンプログラム「シッカイ屋」の一環として実施

2010年度

第1回「大岩オスカール 都市の記憶・都市へのまなざし」
実施日：平成22年7月24日
会場：ユートリヤ3階 視聴覚室
ゲスト：大岩オスカール（アーティスト）

第2回「池田光宏 by the Window“墨東バージョン”に向けて」
実施日：平成22年10月3日
会場：一寺言問集会所
ゲスト：池田光宏（アーティスト）

第3回「KOSUGE1-16＋吉田有里 地域とアートのシアワセな関係」
実施日：平成22年11月20日（土）
会場：一寺言問集会所
ゲスト：KOSUGE1-16（アーティストユニット）、吉田有里（「あいちトリエンナーレ2010」アシスタント キュレーター）

第4回「山城大督 移動と体感―墨東リサーチで見えてきたもの」
実施日：平成23年2月6日
会場：一寺言問集会所
ゲスト：山城大督（アーティスト）

2011年度

第1回「まちに開かれたアートな拠点づくりとは?」
実施日：平成23年10月30日　会場：float
トーク：住中浩史（アーティスト）、floatメンバーほか

第2回「100日プロジェクト・キックオフトーク～まちなかアートの新しいかたち～」
実施日：平成23年11月20日
会場：墨田聖書教会
ゲスト：谷山恭子（アーティスト）、海老澤彩（AOBA+ART キュレーター）

第3回「中間報告会～メイン期間の報告と、100日プロジェクトのこれから～」
実施日：平成23年12月10日
会場：yahiro 8
プレゼンテーター：ネットワークプロジェクト参加者、谷山恭子（アーティスト）

2012年度

第1回「嘉藤笑子のドクメンタ&ベルリンビエンナーレ報告」
実施日：平成24年6月30日　会場：亀戸スタジオ
ゲスト：嘉藤笑子（Art Autonomy Network［AAN］ディレクター、武蔵野美術大学 非常勤講師）

第2回「100日プロジェクト 新里碧“曳舟湯怪”キックオフトーク」
実施日：平成24年10月20日　会場：墨東まち見世案内所
ゲスト：新里碧（アーティスト）

第3回「地理から考える墨東エリアの今までとこれから」
実施日：平成24年11月10日　会場：墨東まち見世案内所
ゲスト：地理人、齋藤佳
モデレーター：吉川晃司（墨東まち見世事務局）

第4回「まちにアートは必要ですか？―墨東のアートから見えてきたこと―」
実施日：平成24年11月24日　会場：墨東まち見世案内所
ゲスト：EAT&ART TARO（アーティスト）、ティトス・スプリー（アーティスト）、清水永子（墨東まち見世事務局）
モデレーター：金善美（一橋大学 大学院）

2012年度第4回「まちにアートは必要ですか?」

［関連企画］

墨東まち見世さんぽ

事務局スタッフだけではなく、まち見世の参加アーティストや地元住人など、様々な人が案内人となり、それぞれに多様な内容・コースで墨東エリアの魅力を再発見するユニークなまち歩きを実施しました。

2009年度

1. 屋台でぐるぐるアート散歩
実施日：平成21年11月14日
案内人：遠山元気（墨東まち見世事務局）、井上美智子（墨東まち見世サポーター）ほか

2. 墨東文学散歩
実施日：平成21年11月14日
案内人：曽我高明（墨東まち見世事務局）

2009年度 墨東文学散歩

3. 墨東まち見世まるごと散歩
実施日：平成21年11月22日
案内人：北川貴好（アーティスト）

4. 民家ビフォーアフター散歩
実施日：平成21年11月28日
案内人：住中浩史（墨東まち見世事務局）

5. 墨東まちづくり散歩
実施日：平成21年11月28日
案内人：真野洋介（墨東まち見世事務局）

6. キラキラ食べ歩き散歩
実施日：平成21年12月5日
案内人：住中浩史（墨東まち見世事務局）

7. 厳選!長屋めぐり散歩
実施日：平成21年12月5日　案内人：遠山元気（墨東まち見世事務局）、北条元康（墨東まち見世サポーター）

8. ふと木歩という名をおもう散歩
実施日：平成21年12月5日
案内人：杉田このみ（アーティスト）

2010年度

1. はたらくすがた探してさんぽ
実施日：平成22年10月2日
案内人：北村伊知郎（アーティスト）

2. 防災まちづくりさんぽ
実施日：平成22年10月3日
案内人：真野洋介（墨東まち見世事務局）

3. 銭湯100%味わいさんぽ
実施日：平成22年10月10日、11月26日
案内人：宮腰義仁（銭湯さいこう）

4. 墨東まち見世早わかりさんぽ
実施日：平成22年10月16日、10月31日、11月21日
案内人：墨東まち見世事務局

5. ウインドウ・イーティング
実施日：平成22年10月23日
案内人：EAT&ART TARO（アーティスト）

6. すみだ蜜源さがしワークショップ
実施日：平成22年10月24日
案内人：カワチキララ（アーティスト、すみだ百花蜜プロジェクト実行委員会）
※「AIGすみだコミュニティ・プログラム」助成企画

7. こんな隙間から!?新タワー撮影さんぽ
実施日：平成22年11月3日
案内人：石田龍太郎（墨東まち見世事務局）

8. 自転車部による《Test Track "Mukojima"》ツアー
実施日：平成22年11月6日
案内人：北條元康、曽我高明（自転車部）

9. 厳選!長屋めぐりさんぽ
実施日：平成22年11月7日
案内人：北條元康（北條工務店）

10. 路地園芸術巡り
実施日：平成22年11月13日
案内人：村山修二郎（アーティスト）

11.『墨東文庫』さんぽ
実施日：平成22年11月14日
案会人：木村健世（アーティスト）

12.〈京島おしょくじ〉お披露目さんぽ
実施日：平成22年11月20日
案内人：おしょくじ営業所

2011年度

1. 墨東まち見世・早わかりさんぽ
実施日：平成23年10月29日、11月13日
案内人：墨東まち見世事務局

2. 墨東まち見世早わかり自転車ツアー
実施日：平成23年10月30日、11月3日、11月13日、11月19日、11月20日
案内人：石川良男、栗原汐里、筒井佳樹ほか（自転車部）

3. ウインドウ・イーティング
実施日：平成23年10月30日
案内人：EAT&ART TARO（アーティスト）

4.「働くこと」きいてみよう!さんぽ
実施日：平成23年11月3日
案内人：北村伊知郎（労働コンプレックス研究所所長）

5. 大人（20歳以上）限定! スペシャルコース「向島よるトーク」さんぽ
実施日：平成23年11月3日
案内人：友野健一（墨田区観光協会）
お話：山田隆之（BAR Bee）、阿部洋一（一言会）

6. 墨東の映画館・夢の跡探訪さんぽ
実施日：平成23年11月5日
案内人：北條元康（北條工務店）

7. 子どもといっしょにどこまで?さんぽ
実施日：平成23年11月6日
案内人：小学2年の男の子

8. アートな路地園芸巡りさんぽ
実施日：平成23年11月12日
案内人：村山修二郎（アーティスト）

9. こんな隙間から!?スカイツリー撮影さんぽ
実施日：平成23年11月19日
案内人：中島和成（墨東まち見世事務局）

10. 知られざる墨東キリシタン史を歩く
実施日：平成23年11月20日
案内人：石川葉子（墨田聖書教会）

11. 100日プロジェクトさんぽ
実施日：平成24年1月9日
案内人：谷山恭子（アーティスト）

2012年度

1. 墨東まち見世早わかりさんぽ
実施日：平成24年10月27日
案内人：墨東まち見世事務局

2. 墨東のB級名建築を探せ!さんぽ
実施日：平成24年11月3日
案内人：北條元康（北條工務店、BUGHAUS）

3.「寺島・玉の井」歴史と文学のさんぽ
実施日：平成24年11月10日
案内人：高木新太郎（成蹊大学 名誉教授）

4. 墨東の路地園芸術さんぽ
実施日：平成24年11月24日
案内人：村山修二郎（アーティスト）

2011年度「働くこと」きいてみよう!さんぽ

［関連企画］

墨東まち見世編集塾

4年目の節目の活動として、まち見世および墨東エリアの歴史を振り返りながら、改めてその魅力を再編集し、伝える広報ツールやドキュメントの制作プロジェクトを実施。公開レクチャー＋トークを通してそのあり方について考え、集まった「編集部員」に取材や執筆活動をしていただきながら本書を作成しました。

第1回公開レクチャー＋トーク
「アートプロジェクトを“伝える”ツールとは」
実施日：平成24年8月4日
ゲスト：森垣賢（グラフィックデザイナー） レクチャー：橋本誠（墨東まち見世編集部長、アートプロデューサー）

第2回公開レクチャー＋トーク
「墨東について知る」
実施日：平成24年9月1日
ゲスト：曽我高明、真野洋介（向島学会）、ちっち＋木村健世と墨東文庫編集室、下平千夏＋大橋加誉

第3回公開レクチャー＋トーク
「ドキュメントブックをつくる1」
実施日：平成24年9月30日
ゲスト：内沼晋太郎（ブック・コーディネーター）、齋藤歩（編集者） レクチャー：橋本誠

第4回「ドキュメントブックをつくる2」
実施日：平成24年12月1日
ゲスト：友川綾子（編集・アートライター）
レクチャー：橋本誠

ワーキング
実施日：平成24年8月〜平成25年3月
第1回公開レクチャー＋トークに合わせて編集部員を募集。以降の公開トーク＋レクチャーやドキュメントブック制作プロジェクトの進行に合わせて随時勉強会や実作業を行うワーキングを開催しました。編集部員のうち有志10名は本書の「100日プロジェクト」「ネットワークプロジェクト」の取材および執筆も担当しています。

会場：墨東まち見世案内所ほか

第3回公開レクチャー＋トーク

おわりに

「墨東まち見世」(以後、まち見世)は、2008年度から東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開する東京文化発信プロジェクトに、翌2009年度に「東京アートポイント計画」が加わった際の第1号アートプロジェクトとして、まさにパイロット事業として取り組んだものであった。

詳しくは実施概要(→P.156)にあるが、私とプログラムオフィサーとして着任した橋本誠が立ち上げ時の担当をした。初年度の『墨東まち見世2009 活動報告書』は、担当の橋本がひとりで編集したものである。しかし今回、企画(Plan)や実施(Do)のみならず、PDCAサイクルのCheckとActionに位置する記録、編集、評価の十全な実施を推奨する我々としては、実務支援をしつつも実施現場の内製に近いかたちで記録を残したいという思いがあった。

そこで、活動の変遷を熟知し、4年目にフリーランスとなった橋本に、まち見世のこれまでの活動を総括するドキュメントプロジェクトのリーダー役として、「墨東まち見世編集塾」などを開催しながら、編集部長として編集・構成を担ってもらいできたのが本書である。

NPOとしての団体(事務局)育成と事業実施のサポートを使命とする我々が、どのようにまち見世の展開に関わってきたのかは、橋本が寄せた論考「消費されないアートプロジェクトを求めて」(→P.60)などで詳らかにされている。本書を通して、プログラムオフィサーが共催団体とどのような関係を取り結び、やり取りをし、事業を具体化させていったのか、理解していただけるものと期待する。その上で、この4年間が双方にとって学びの場でもあったことは付記しておきたい。課題のすべては、地域を舞台としたアートプロジェクトの実施イメージの構築とその具体化。すなわち企画(P)と実施(D)体制作りの4年間であったと思う。

まち見世は、多くの作家に参加協力を得て実現した事業でもあったが、その中でも「100日プロジェクト」の原型を作り、かつ現在の墨東関係者となる人々を活動に引き込むきっかけを用意した劇作家、岸井大輔※の名前は挙げておきたい。

最後に成果(アウトカム)について触れたいと思う。アーティストとともにまち見世が墨東にもたらしたもの、もしくは、墨東がまち見世を通じてアートプロジェクトにもたらしたものは何か。問うまでもなく、活動事例として収録されている「ネットワークプロジェクト」の実施を通じ、墨東エリアに点在するアーティストや活動のネットワーク化、それを視覚化した『BOKU-to-TekuTeku まちみてマップ』の制作、と言えるだろう。

墨東エリアに移り住んだ若きアーティストたちの活動は、結果としてマップに落とし込めるほどの数となり、拠点形成がなされた証ともなった。その間、人と場所をつなぐ連絡調整業務を役割としたまち見世事務局は、事業主催型でないコーディネート型(「墨東スタイル」)事務局のあり方を具現化したと言えるだろう。資源(時間、お金、エネルギー、場所)をシェアするエコ型事業展開は、活動の持続性を期待させる。

墨東は、アトリエを構えるなどして拠点を形成するアーティストたちと、その間を行き来するサポーターとしての住民等が、アートプロジェクトをめぐって通年で動き回っているという日常があるまちになった。アートが個人の生活の中ではなく「市井にある状態」が醸成され、人と人が結ばれ、日常と地続きのままアートを体感し当事者として楽しむ住民の声が、4年の活動を振り返った「墨東まち見世振り返り会」(→P.148)会場には溢れていた。〈墨東まち見世〉は、システムとしてかつ新たな地域資源としての様相を帯びつつあるように思う。

まち見世は、人・まち・活動をアートで結ぶ「アートポイント計画」の初期目標を一定レベル達成したと思う。だが、今も課題はある。それは、次のステップの展開において改善されていくものだろう。

現時点では、無事に終えることができたことに感謝し、関わってくださった多くの方のご尽力に心からお礼を申し上げ、終わりの言葉に代えたい。

森司 [東京アートポイント計画 ディレクター]

※岸井大輔による《墨東まち見世ロビー》(2009年)がどのような活動であったかは『LOBBY—はじまりの場を創る』(2010年3月発行)を参照されたい。

写真：中里和人

ART PROJECT IN SUMIDA | BOKUTO MACHI MISE 2009-2012

墨田のまちとアートプロジェクト

［墨東まち見世2009-2012ドキュメント］

［企画］
東京都、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
特定非営利活動法人向島学会

［監修］特定非営利活動法人向島学会「墨東まち見世部会」

［編集］墨東まち見世編集部
橋本誠（編集部長）、ヨネザワエリカ（副編集部長）
及川裕子、金善美、児玉幸代、小室優、髙橋りほ、中村祐希
野村美里、本村恭子、山内敦史、横田伶未
―
長尾聡子（東京アートポイント計画 プログラムオフィサー）

［編集協力］阿部謙一、長尾芽生

［写真］※別記のあるものを除く
安藤達朗、石田佑佳、石田龍太郎、井上美智子、内海昭子、大津伴絵
大橋加誉、川上真生子、北村光隆、木村吉見、栗原汐里、後藤勝
佐藤史治、住中浩史、曽我高明、髙橋尚子、谷山恭子、道本久美子
遠山元気、中里和人、中島和成、西岳拡貴、樋口裕一、藤田奈々子
北條元康、本間晴智、松井さやか、三田大介、宮葉子、村山修二郎
森垣賢、吉川晃司、点線のセサミスペース、gomm、PAUL LUNA
墨東まち見世編集部、特定非営利活動法人向島学会

［デザイン］森垣賢

［印刷］株式会社アトミ

［発行］
平成25年3月21日
東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階
Tel: 03-5638-8800　E-mail: info-ap@bh-project.jp
http://www.bh-project.jp

［本書に関するお問い合わせ先］
特定非営利活動法人向島学会「墨東まち見世部会」
〒131-0031 東京都墨田区墨田1-15-3 現代美術製作所内
E-mail: machimise@gmail.com　http://www.mukojima.org

© 東京文化発信プロジェクト室

※本書は「墨東まち見世2012」のプロジェクトの一環として、まち見世の4年間の活動を振り返るドキュメント制作チーム「墨東まち見世編集部」を中心に編纂されました。